

椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

— 8 —

中 卷

福岡県築上郡築城町所在
赤幡森ヶ坪遺跡の調査

1992

福岡県教育委員会

椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

— 8 —

中 卷

福岡県築上郡築城町所在
赤橋森ヶ坪遺跡の調査

例 言

1. 本書は、昭和63年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて発掘調査を実施した築上郡築城町塞ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡・十双遺跡の報告書であり、一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第8冊目にあたる。
2. 本書に掲載した遺跡は、上巻-塞ノ神遺跡(第7-A地点)・赤幡森ヶ坪遺跡(第7-B地点)、中巻-赤幡森ヶ坪遺跡、下巻-十双遺跡(第7-C地点)である。
3. 遺構の写真撮影・実測図作成は、調査担当者が行った。
4. 遺物の復原・整理作業は、九州歴史資料館及び福岡県文化課甘木発掘調査事務所において岩瀬正信整理指導員のもとに行った。
5. 上・中巻掲載の遺物写真は、岡紀久夫氏の撮影による。上・中巻掲載の遺物の実測は、渡辺輝子・高瀬照美・大野愛里・鬼木つや子・若松三枝子・小崎みゆき・棚町陽子・友永澄子・中川真理子の諸氏及び井上・伊崎・小田が行い、図面作成・製図は、豊福弥生・塩足里美・近藤美恵子・関久江の諸氏及び伊崎・小田による。
6. 赤幡森ヶ坪遺跡出土の鉄滓分析は、新日本製鉄株式会社TACセンターに依頼し、大澤正己氏に分析結果についての玉稿をいただいた。
7. 挿図で使用する方位は、すべて座標北である。
8. 遺跡分布図は、昭和53年国土地理院発行の「中津」5万分の1を使用した。
9. 中巻図版1の航空写真は、国土地理院の撮影による。
10. 本書の執筆は、上巻を小田が行い、中巻は井上・伊崎・小田による。下巻は、井上・中間・大澤があたった。
11. 本書の編集は、上・中巻を小田が、下巻を中間が担当し、小田がとりまとめた。

本文目次

[中巻]

赤幡森ヶ坪遺跡

(6) 鍛冶炉跡	283
(7) 溝	286
(8) 谷状遺構	294
(9) その他の遺構と遺物	338
3. 遺物各説	354
4. 自然科学的分析	381
5. 小 結	389

図 版 目 次

[中巻]

図 版 1	赤幡森ヶ坪遺跡・十双遺跡周辺航空写真(国土地理院撮影)	1
図 版 2	(1) 赤幡森ヶ坪遺跡遠景(辛山から)	1
	(2) 塞ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡・十双遺跡航空写真(南東上空から)	2
図 版 3	(1) 赤幡森ヶ坪遺跡空中写真(南から)	2
	(2) 赤幡森ヶ坪遺跡空中写真(南東から)	2
図 版 4	(1) 1号住居跡(南から)	21
	(2) 3・4号住居跡検出状況(南東から)	25
図 版 5	(1) 3・4号住居跡(南東から)	25
	(2) 3号住居跡カマド, 4号住居跡内焼土痕(南東から)	26
図 版 6	(1) 5・6号住居跡(南から)	29
	(2) 6号住居跡カマド(南東から)	30
図 版 7	(1) 北端側道部分住居跡群(北西から)	31
	(2) 北端側道部分住居跡群(南東から)	31
図 版 8	(1) 8号住居跡(南東から)	32
	(2) 8号住居跡カマド(北東から)	33
	(3) カマド完掘状況(北東から)	33
図 版 9	(1) 9号住居跡(南から)	34

図版 9	(2)	10号住居跡 (南西から)	36
	(3)	10号住居跡カマド (南から)	36
図版 10	(1)	11号住居跡, 2号溝 (南から)	41
	(2)	11号住居跡カマド (南から)	41
図版 11	(1)	13~16号住居跡, 5・7・9・10号竪穴 (南から)	43
	(2)	15号住居跡カマド (南西から)	47
	(3)	16号住居跡カマド (南から)	48
図版 12	(1)	17号住居跡 (南西から)	51
	(2)	18号住居跡 (南から)	52
図版 13	(1)	19号住居跡 (南東から)	53
	(2)	19号住居跡貼床下部 (南東から)	53
図版 14	(1)	20号住居跡 (南西から)	55
	(2)	20号住居跡貼床下部 (南東から)	55
図版 15	(1)	21号住居跡 (北から)	56
	(2)	22号住居跡 (南から)	58
	(3)	22号住居跡カマド (南から)	58
図版 16	(1)	22号住居跡貼床下部 (南から)	58
	(2)	23・24号住居跡周辺 (南から)	61
図版 17	(1)	23・24号住居跡, 18号土壇 (南から)	61
	(2)	23号住居跡カマド (南から)	61
	(3)	24号住居跡カマド (南から)	65
図版 18	(1)	25号住居跡 (南西から)	66
	(2)	25号住居跡カマド (南西から)	66
図版 19	(1)	26号住居跡 (南から)	70
	(2)	26号住居跡カマド (南から)	70
図版 20	(1)	27号住居跡, 6号建物跡 (南から)	72
	(2)	27号住居跡カマド (西から)	72
	(3)	遺物出土状況 (南から)	72
図版 21	(1)	28号住居跡 (北東から)	74
	(2)	29号住居跡 (北東から)	74
図版 22	(1)	30号住居跡カマド (南西から)	75
	(2)	27・31・32号住居跡, 6号建物跡 (南西から)	77
	(3)	32号住居跡 (南西から)	79

図版 23	(1) 33号住居跡 (南から)	80
	(2) 34号住居跡 (南東から)	81
図版 24	(1) 34号住居跡カマド (南東から)	81
	(2) カマド断ち割り状況 (南東から)	81
図版 25	(1) 35号住居跡 (南から)	84
	(2) 35号住居跡カマド (南から)	84
	(3) カマド断ち割り状況 (南から)	84
図版 26	(1) 36・41~43号住居跡 (北東から)	85
	(2) 36・41~43号住居跡 (南東から)	85
図版 27	(1) 36・43号住居跡 (西から)	85
	(2) 36号住居跡 (西から)	85
図版 28	(1) 調査区南西端住居跡群 (東から)	89
	(2) 調査区南西端住居跡群 (東から)	89
図版 29	(1) 37・38号住居跡 (南西から)	91
	(2) 37・38・45号住居跡 (東から)	91
図版 30	(1) 39号住居跡 (南東から)	92
	(2) カマド検出状況 (南東から)	92
	(3) カマド完掘状況 (南東から)	92
図版 31	(1) 40号住居跡 (東から)	96
	(2) 41号住居跡 (南東から)	97
図版 32	46~49・51~56号住居跡 (北西から)	97
図版 33	(1) 45号住居跡 (南から)	102
	(2) 37・38・46~55・80~85号住居跡 (東から)	102
図版 34	(1) 46号住居跡 (南から)	103
	(2) 46号住居跡貼床下部 (南から)	103
図版 35	(1) 47号住居跡 (東から)	103
	(2) 47号住居跡カマド (東から)	103
図版 36	(1) 48・49号住居跡 (北東から)	107
	(2) 48号住居跡貼床下部 (南西から)	107
	(3) 48号住居跡カマド (南西から)	107
図版 37	(1) 49号住居跡 (東から)	108
	(2) 49号住居跡貼床下部 (南西から)	108
	(3) 49号住居跡カマド (南から)	108

図版 38	(1) 51~54号住居跡 (西から)	112
	(2) 51~53・56号住居跡貼床下部 (西から)	112
図版 39	(1) 51号住居跡 (南西から)	112
	(2) 51号住居跡貼床下部 (南西から)	113
	(3) 51号住居跡カマド (南から)	113
図版 40	(1) 52・53号住居跡 (南東から)	115
	(2) 52号住居跡貼床下部 (南西から)	115
	(3) カマド断ち割り状況 (南から)	116
図版 41	(1) 51~53号住居跡 (北から)	118
	(2) 53・54号住居跡 (西から)	118
図版 42	(1) 53号住居跡 (北から)	118
	(2) カマド検出状況 (南から)	118
図版 43	(1) 54号住居跡 (南西から)	120
	(2) 54号住居跡カマド (南から)	120
図版 44	(1) 55号住居跡 (南西から)	122
	(2) 55号住居跡カマド (南から)	122
図版 45	(1) 56号住居跡 (西から)	124
	(2) 56号住居跡貼床下部 (西から)	124
	(3) 56号住居跡カマド (南から)	124
図版 46	57~62・70号住居跡 (東から)	125
図版 47	(1) 57~62・70号住居跡 (北西から)	125
	(2) 57号住居跡カマド (東から)	125
図版 48	(1) 60~62号住居跡 (南から)	128
	(2) 60号住居跡 (南から)	128
図版 49	(1) 63・64・68号住居跡 (東から)	131
	(2) 63・64・68号住居跡貼床下部 (西から)	131
図版 50	(1) 66号住居跡 (南西から)	133
	(2) 67・72号住居跡 (西から)	133
図版 51	(1) 69号住居跡 (南西から)	137
	(2) 礎石出土状況 (北から)	137
図版 52	(1) 70号住居跡 (南東から)	138
	(2) 71号住居跡 (南から)	138
	(3) 71号住居跡カマド (南から)	139

図版 53	(1)	中央部下層住居跡群 (東から)	143
	(2)	75~79号住居跡, 18号竪穴 (北から)	143
図版 54	(1)	75号住居跡 (北から)	143
	(2)	76号住居跡 (西から)	145
図版 55	(1)	77~79号住居跡 (南から)	147
	(2)	78号住居跡カマド (南から)	147
図版 56		37・38・50・80~82号住居跡 (北東から)	149
図版 57	(1)	80号住居跡 (東から)	150
	(2)	80号住居跡カマド (南から)	150
図版 58	(1)	調査区南西端住居跡群 (北西から)	151
	(2)	50・81号住居跡 (北西から)	151
図版 59	(1)	81号住居跡 (北西から)	151
	(2)	カマド検出状況 (南西から)	151
	(3)	カマド断ち割り状況 (南西から)	151
図版 60	(1)	82号住居跡 (北東から)	153
	(2)	82号住居跡カマド (西から)	153
図版 61	(1)	83号住居跡 (北東から)	156
	(2)	83号住居跡カマド (南東から)	156
図版 62	(1)	84・85号住居跡 (北東から)	157
	(2)	84・85号住居跡貼床下部 (北東から)	157
図版 63	(1)	84号住居跡 (北東から)	158
	(2)	84号住居跡カマド (南から)	158
	(3)	85号住居跡カマド (南西から)	162
図版 64	(1)	86・91~94号住居跡, 23号建物跡 (西から)	163
	(2)	86号住居跡, 23号建物跡 (南から)	163
図版 65	(1)	87・88号住居跡 (南東から)	164
	(2)	87号住居跡カマド (南東から)	164
図版 66	(1)	89号住居跡 (南東から)	166
	(2)	89号住居跡カマド (南東から)	166
図版 67	(1)	90号住居跡 (南から)	167
	(2)	91号住居跡 (南から)	170
図版 68	(1)	92号住居跡 (南から)	170
	(2)	カマド遺存状況 (南から)	170

図版 69	(1)	93号住居跡 (南東から)	171
	(2)	94号住居跡 (南東から)	171
図版 70	(1)	中央部下層住居跡群 (東から)	173
	(2)	中央部下層住居跡群 (南から)	173
図版 71	(1)	95・96号住居跡, 22~25号竪穴 (東から)	173
	(2)	96号住居跡 (西から)	177
図版 72	(1)	95号住居跡, 20~22・25号竪穴, 42号土壌 (南から)	173
	(2)	95号住居跡 (南から)	173
図版 73	(1)	95号住居跡カマド (南から)	174
	(2)	天井石除去状況 (南から)	174
図版 74	(1)	カマド復原状況 (南から)	174
	(2)	遺物出土状況 (南から)	174
図版 75	(1)	99号住居跡 (北西から)	181
	(2)	遺物出土状況 (北から)	181
図版 76	(1)	97・98号住居跡 (南西から)	178
	(2)	100号住居跡, 45号土壌 (北西から)	182
	(3)	100号住居跡カマド (南から)	182
図版 77		80~82・101~103号住居跡 (南東から)	183
図版 78	(1)	101・102号住居跡 (南東から)	183
	(2)	101号住居跡カマド (南から)	183
図版 79	(1)	104号住居跡 (南東から)	185
	(2)	104号住居跡カマド (南東から)	186
図版 80	(1)	106号住居跡 (南東から)	188
	(2)	106号住居跡カマド (南東から)	188
	(3)	支脚出土状況 (南東から)	188
図版 81	(1)	107号住居跡, 46号土壌 (東から)	190
	(2)	遺物出土状況 (西から)	190
図版 82	(1)	1号建物跡 (北西から)	198
	(2)	2号建物跡 (北西から)	198
図版 83	(1)	3号建物跡 (南東から)	198
	(2)	4号建物跡 (北から)	200
図版 84	(1)	5号建物跡 (北から)	202
	(2)	6号建物跡, 27号住居跡 (北から)	202

図版 85	(1)	7・18・19号建物跡 (北西から)	202
	(2)	8・29号建物跡 (北西から)	203
図版 86	(1)	9号建物跡 (西から)	206
	(2)	8・10・29号建物跡 (北西から)	206
図版 87	(1)	11・14・15・17・36号建物跡 (南東から)	206
	(2)	11・14・36号建物跡 (南東から)	206
図版 88	(1)	12号建物跡 (南西から)	207
	(2)	13号建物跡 (北から)	209
図版 89	(1)	15・17号建物跡 (南東から)	209
	(2)	16号建物跡 (南東から)	209
図版 90	(1)	1～3号竪穴, 4・5号土塼 (南から)	226
	(2)	17～25号竪穴 (南から)	234
図版 91	(1)	2号竪穴 (南西から)	226
	(2)	3号竪穴 (北西から)	227
図版 92	(1)	8号竪穴 (南西から)	230
	(2)	飯蛸壺出土状況 (南から)	230
図版 93	(1)	17～20号竪穴, 14号溝 (北東から)	234
	(2)	20～24号竪穴 (北東から)	238
図版 94	(1)	13号竪穴 (北東から)	232
	(2)	遺物出土状況 (南東から)	232
	(3)	遺物出土状況 (北東から)	232
図版 95	(1)	14号竪穴 (南から)	232
	(2)	15号竪穴 (東から)	232
図版 96	(1)	1号土塼 (南東から)	240
	(2)	2号土塼 (東から)	243
	(3)	3号土塼 (東から)	243
図版 97	(1)	4号土塼 (南東から)	243
	(2)	4号土塼遺物出土状況 (東から)	243
	(3)	7号土塼 (北東から)	243
図版 98	(1)	8号土塼 (北東から)	246
	(2)	9号土塼 (東から)	246
	(3)	10号土塼 (南東から)	246
図版 99	(1)	12号土塼 (南東から)	249

図 版 99	(2)	15号土城 (南東から)	249
	(3)	16号土城 (東から)	251
図 版 100	(1)	18号土城 (北東から)	251
	(2)	19号土城 (北から)	251
	(3)	19号土城遺物出土状況 (北から)	251
図 版 101	(1)	20号土城 (北東から)	251
	(2)	21号土城 (西から)	253
	(3)	22号土城 (南東から)	253
図 版 102	(1)	23・24号土城 (南から)	253
	(2)	26号土城 (東から)	255
図 版 103	(1)	27号土城 (北から)	255
	(2)	28号土城 (南から)	259
	(3)	28号土城土層 (東から)	259
図 版 104	(1)	29号土城 (北西から)	260
	(2)	29・30号土城 (北から)	260
	(3)	31号土城 (南西から)	260
図 版 105	(1)	32号土城 (北東から)	263
	(2)	33号土城 (北から)	263
図 版 106	(1)	34号土城 (東から)	263
	(2)	35号土城 (西から)	263
図 版 107	(1)	36号土城 (南東から)	265
	(2)	37号土城 (北西から)	265
図 版 108	(1)	38号土城 (西から)	265
	(2)	39号土城 (北東から)	267
	(3)	40号土城 (南東から)	267
図 版 109	(1)	42号土城 (南東から)	267
	(2)	43号土城 (南東から)	270
図 版 110	(1)	44号土城 (西から)	270
	(2)	45号土城 (北から)	270
図 版 111	(1)	東群 (2~9号) 集石土城 (南東から)	274
	(2)	東群 (2~9号) 集石土城 (南西から)	274
図 版 112	(1)	2~9号集石土城半截状況 (北西から)	274
	(2)	2~9号集石土城完掘状況 (北西から)	274

図 版 113	(1)	1号集石土壌 (南から)	274
	(2)	2号集石土壌 (南西から)	276
図 版 114	(1)	3号集石土壌半裁状況 (南東から)	277
	(2)	3号集石土壌完掘状況 (北西から)	277
図 版 115	(1)	4号集石土壌 (南東から)	277
	(2)	4号集石土壌完掘状況 (南東から)	277
図 版 116	(1)	7~9号集石土壌 (北西から)	279
	(2)	6~8号集石土壌完掘状況 (北西から)	279
図 版 117		中央群 (10~15号) 集石土壌 (北西から)	279
図 版 118	(1)	10号集石土壌半裁状況 (南東から)	279
	(2)	10号集石土壌完掘状況 (南東から)	279
図 版 119	(1)	11号集石土壌半裁状況 (北東から)	279
	(2)	12・13号集石土壌半裁状況 (北東から)	280
図 版 120	(1)	西群 (16~18号) 集石土壌 (南東から)	280
	(2)	完掘状況 (南東から)	280
	(3)	17号集石土壌 (北東から)	280
図 版 121	(1)	1号鍛冶炉跡 (南から)	283
	(2)	1号鍛冶炉跡 (西から)	283
図 版 122	(1)	2号鍛冶炉跡 (南から)	285
	(2)	2号鍛冶炉跡 (南から)	285
図 版 123	(1)	3号溝土層断面 (南から)	286
	(2)	3号溝遺物出土状況 (南から)	286
	(3)	9号溝土層断面 (西から)	291
	(4)	9号溝土層断面 (西から)	291
図 版 124	(1)	12号溝 (南西から)	293
	(2)	調査区南東壁土層断面 (西から)	293
図 版 125	(1)	下層谷状遺構 (南西から)	294
	(2)	谷部土層断面 (南東から)	294
図 版 126	(1)	遺物出土状況 (北から)	294
	(2)	長頸壺出土状況 (北から)	294
	(3)	石斧出土状況 (北から)	294
図 版 127	(1)	工事に追われる発掘調査	1
	(2)	料金徴収所建設後	1

图 版 128	(1)	1号住居跡出土土器	22
	(2)	3号住居跡出土土器	26
	(3)	5号住居跡出土土器	29
	(4)	6号住居跡出土土器	30
	(5)	8号住居跡出土土器	33
	(6)	9号住居跡出土土器	34
	(7)	10号住居跡出土土器①	36
图 版 129		10号住居跡出土土器②	36
图 版 130	(1)	10号住居跡出土土器③	40
	(2)	11号住居跡出土土器	41
	(3)	15号住居跡出土土器	47
	(4)	16号住居跡出土土器	50
	(5)	19号住居跡出土土器	54
图 版 131	(1)	21号住居跡出土土器	57
	(2)	22号住居跡出土土器	59
	(3)	24号住居跡出土土器	65
	(4)	25号住居跡出土土器①	67
图 版 132	(1)	25号住居跡出土土器②	67
	(2)	27号住居跡出土土器	73
	(3)	28号住居跡出土土器	74
	(4)	31号住居跡出土土器	77
	(5)	32号住居跡出土土器	79
	(6)	34号住居跡出土土器①	82
图 版 133	(1)	34号住居跡出土土器②	82
	(2)	37・38号住居跡上面出土土器	89
	(3)	39号住居跡出土土器	95
	(4)	40号住居跡出土土器	97
	(5)	44号住居跡出土土器	101
	(6)	51号住居跡出土土器	113
图 版 134	(1)	53号住居跡出土土器	119
	(2)	54号住居跡出土土器	120
	(3)	55号住居跡出土土器	123
	(4)	61号住居跡出土土器	129

图 版 134	(5)	63号住居跡出土土器	132
	(6)	67号住居跡出土土器	134
	(7)	74号住居跡出土土器	143
	(8)	76号住居跡出土土器	145
	(9)	81号住居跡出土土器	151
图 版 135	(1)	83号住居跡出土土器	157
	(2)	84号住居跡出土土器	159
	(3)	85号住居跡出土土器	162
	(4)	90号住居跡出土土器	169
	(5)	92号住居跡出土土器	170
	(6)	94号住居跡出土土器	172
	(7)	95号住居跡出土土器①	176
图 版 136	(1)	95号住居跡出土土器②	176
	(2)	99号住居跡出土土器①	181
图 版 137	(1)	99号住居跡出土土器②	181
	(2)	100号住居跡出土土器	182
	(3)	104号住居跡出土土器	186
	(4)	106号住居跡出土土器	188
	(5)	107号住居跡出土土器	190
图 版 138	(1)	2号竖穴出土土器	226
	(2)	4号竖穴出土土器	228
	(3)	5号竖穴出土土器	228
	(4)	9号竖穴出土土器	230
	(5)	10号竖穴出土土器	230
	(6)	13号竖穴出土土器	232
	(7)	1号土坑出土土器①	240
图 版 139		1号土坑出土土器②	240
图 版 140	(1)	1号土坑出土土器③	240
	(2)	2号土坑出土土器	243
	(3)	4号土坑出土土器	243
	(4)	9号土坑出土土器①	246
图 版 141	(1)	9号土坑出土土器②	246
	(2)	10号土坑出土土器	246

图 版 141	(3) 12号土坑出土土器	249
	(4) 15号土坑出土土器	249
	(5) 19号土坑出土土器	251
	(6) 20号土坑出土土器	251
图 版 142	(1) 22号土坑出土土器	253
	(2) 23号土坑出土土器	253
	(3) 25号土坑出土土器	255
	(4) 26号土坑出土土器	255
	(5) 27号土坑出土土器	256
	(6) 28号土坑出土土器	260
	(7) 29号土坑出土土器	260
图 版 143	(1) 31号土坑出土土器	260
	(2) 35号土坑出土土器	263
	(3) 36号土坑出土土器	265
图 版 144	(1) 37号土坑出土土器	265
	(2) 38号土坑出土土器	265
	(3) 40号土坑出土土器	267
	(4) 44号土坑出土土器	270
	(5) 45号土坑出土土器	271
图 版 145	(1) 5号集石土坑出土土器	277
	(2) 3号溝出土土器	286
	(3) 8号溝出土土器	289
	(4) 9号溝出土土器	291
	(5) 11号溝出土土器	291
	(6) 14号溝出土土器	293
图 版 146	谷部出土土器①	296
图 版 147	谷部出土土器②	296
图 版 148	谷部出土土器③	296
图 版 149	谷部出土土器④	303
图 版 150	谷部出土土器⑤	303
图 版 151	谷部出土土器⑥	303
图 版 152	谷部出土土器⑦	303
图 版 153	谷部出土土器⑧	309

図版 154	谷部出土土器⑨	309
図版 155	谷部出土土器⑩	309
図版 156	谷部出土土器⑪	313
図版 157	谷部出土土器⑫	313
図版 158	谷部出土土器⑬	329
図版 159	谷部出土土器⑭	329
図版 160	谷部出土土器⑮	329
図版 161	谷部出土土器⑯	329
図版 162	谷部出土土器⑰	329
図版 163	谷部出土土器⑱	333
図版 164	谷部出土土器⑲	333
図版 165	谷部出土土器⑳	333
図版 166	谷部出土土器㉑	333
図版 167	谷部出土土器㉒	337
図版 168	谷部出土土器㉓	296
図版 169	(1) 北端谷部倫出土土器	294
	(2) 旧河道出土土器	338
	(3) ビット出土土器①	343
図版 170	ビット出土土器②	343
図版 171	ビット出土土器③	343
図版 172	遺構検出面出土土器①	346
図版 173	遺構検出面出土土器②	346
図版 174	遺構検出面出土土器③	346
図版 175	遺構検出面出土土器④	350
図版 176	遺構検出面出土土器⑤	350
図版 177	(1) 緑釉陶器①	354
	(2) 緑釉陶器②	354
図版 178	緑釉陶器③	354
図版 179	(1) 灰釉陶器	356
	(2) 文字資料土器	357
	(3) 縄文土器・フイゴ羽口・土製品他	363
図版 180	焼塩土器①(上-外面, 下-内面)	358
図版 181	焼塩土器②(上-外面, 下-内面)	358

図版 182	焼塩土器③(上-外面, 下-内面)	361
図版 183	焼塩土器④(上-外面, 下-内面)	361
図版 184	(1) 焼塩土器⑤	361
	(2) 包含層・2号鍛冶出土フイゴ羽口	363
図版 185	(1) 住居跡・竪穴・包含層出土飯罎壺	364
	(2) 住居跡出土土鉢	364
図版 186	(1) 住居跡・土塼・溝・包含層出土土鉢	364
	(2) ビット・包含層出土土鉢	364
図版 187	(1) 住居跡・土塼出土模造鏡	366
	(2) 住居跡・竪穴・溝他出土ミニチュア土器	366
図版 188	(1) 赤幡森ヶ坪遺跡出土石帯・管玉	369
	(2) 赤幡森ヶ坪遺跡出土石製品・銅製品	369
	(3) 住居跡・竪穴・包含層出土紡錘車・石製円盤	369
	(4) 住居跡・土塼・谷部・包含層出土石斧・石産丁	372
図版 189	(1) 住居跡・土塼・谷部・包含層出土砥石①	372
	(2) 住居跡・土塼・谷部・包含層出土砥石②	372
図版 190	(1) 住居跡・土塼・包含層出土鉄器①	375
	(2) 住居跡・土塼・包含層出土鉄器②	375
図版 191	(1) 住居跡・土塼・包含層出土鉄器③	379
	(2) 竪穴出土瓦	380
図版 192	竪穴・包含層出土瓦	380
図版 193	精錬鍛冶滓の顕微鏡組織	382
図版 194	鍛錬鍛冶滓の顕微鏡組織	382
図版 195	赤幡森ヶ坪遺跡出土精錬鍛冶滓(FK6)	383
図版 196	鍛冶工房空間利用の各例	385

挿 図 目 次

[中 巻]

第 293 図	1号鍛冶炉跡実測図(1/40)	283
第 294 図	2号鍛冶炉跡実測図(1/40)	284

第 295 图	锻造炉路周边出土土器实测图 (1/3)	285
第 296 图	3号溝土层断面实测图 (1/40)	286
第 297 图	3号溝出土土器实测图① (1/3)	287
第 298 图	3号溝出土土器实测图② (1/4)	288
第 299 图	3~5·8·9号溝出土土器实测图 (1/3)	290
第 300 图	9号溝土层断面实测图 (1/80)	291
第 301 图	11·12·14号溝出土土器实测图 (1/3)	292
第 302 图	谷部实测图 (1/1,200)	294
第 303 图	谷部土层断面实测图 (1/80)	295
第 304 图	谷部出土弥生土器实测图① (1/4)	297
第 305 图	谷部出土弥生土器实测图② (1/4)	298
第 306 图	谷部出土弥生土器实测图③ (1/4)	299
第 307 图	谷部出土弥生土器实测图④ (1/4)	300
第 308 图	谷部出土弥生土器实测图⑤ (1/4)	301
第 309 图	谷部出土弥生土器实测图⑥ (1/4)	302
第 310 图	谷部出土弥生土器实测图⑦ (1/4)	304
第 311 图	谷部出土弥生土器实测图⑧ (1/4)	305
第 312 图	谷部出土弥生土器实测图⑨ (1/4)	306
第 313 图	谷部出土弥生土器实测图⑩ (1/4)	307
第 314 图	谷部出土弥生土器实测图⑪ (1/4)	308
第 315 图	谷部出土弥生土器实测图⑫ (1/4)	309
第 316 图	谷部出土弥生土器实测图⑬ (1/6)	310
第 317 图	谷部出土弥生土器实测图⑭ (1/6)	311
第 318 图	谷部出土弥生土器实测图⑮ (1/6)	312
第 319 图	谷部出土弥生土器实测图⑯ (1/6)	313
第 320 图	谷部出土弥生土器实测图⑰ (1/4)	314
第 321 图	谷部出土弥生土器实测图⑱ (1/4)	315
第 322 图	谷部出土弥生土器实测图⑲ (1/4)	316
第 323 图	谷部出土弥生土器实测图⑳ (1/4)	317
第 324 图	谷部出土弥生土器实测图㉑ (1/4)	318
第 325 图	谷部出土弥生土器实测图㉒ (1/4)	319
第 326 图	谷部出土弥生土器实测图㉓ (1/4)	320
第 327 图	谷部出土弥生土器实测图㉔ (1/4)	321

第 328 図	谷部出土弥生土器実測図㉔ (1/4)	322
第 329 図	谷部出土弥生土器実測図㉕ (1/4)	323
第 330 図	谷部出土弥生土器実測図㉖ (1/4)	324
第 331 図	谷部出土弥生土器実測図㉗ (1/4)	325
第 332 図	谷部出土弥生土器実測図㉘ (1/4)	326
第 333 図	谷部出土弥生土器実測図㉙ (1/4)	327
第 334 図	谷部出土弥生土器実測図㉚ (1/4)	328
第 335 図	谷部出土弥生土器実測図㉛ (1/4)	330
第 336 図	谷部出土弥生土器実測図㉜ (1/4)	331
第 337 図	谷部出土弥生土器実測図㉝ (1/4)	332
第 338 図	谷部出土弥生土器実測図㉞ (1/4)	334
第 339 図	谷部出土弥生土器実測図㉟ (1/4)	335
第 340 図	谷部出土弥生土器実測図㊱ (1/4)	336
第 341 図	谷部出土弥生土器実測図㊲ (1/4)	337
第 342 図	旧河道土層断面実測図 (1/80)	339
第 343 図	旧河道出土土器実測図① (1/3)	340
第 344 図	旧河道出土土器実測図② (1/3)	341
第 345 図	旧河道出土土器実測図③ (1/3)	342
第 346 図	ビット出土土器実測図① (1/3)	344
第 347 図	ビット出土土器実測図② (1/3)	345
第 348 図	遺構検出面出土土器実測図① (1/3)	347
第 349 図	遺構検出面出土土器実測図② (1/3)	348
第 350 図	遺構検出面出土土器実測図③ (1/3)	349
第 351 図	遺構検出面出土土器実測図④ (1/3)	351
第 352 図	遺構検出面出土土器実測図⑤ (1/3)	352
第 353 図	緑釉陶器実測図 (1/3)	355
第 354 図	灰釉陶器実測図 (1/3)	356
第 355 図	文字資料土器実測図 (1/2)	357
第 356 図	小形土器実測図 (1/2)	358
第 357 図	焼塩土器実測図① (1/3)	359
第 358 図	焼塩土器実測図② (1/3)	360
第 359 図	焼塩土器実測図③ (1/3)	362
第 360 図	フイゴ羽口実測図 (1/3)	363

第 361 図	飯崎壺実測図 (1/3)	364
第 362 図	土鎌実測図 (1/2)	365
第 363 図	土製模造鏡実測図 (1/2)	367
第 364 図	土製品実測図 (1/2)	368
第 365 図	石器実測図① (1/2)	370
第 366 図	石器実測図② (1/3)	371
第 367 図	石器実測図③ (1/2)	373
第 368 図	石器実測図④ (1/3)	374
第 369 図	鉄鎌実測図 (1/2)	376
第 370 図	刀子・短刀実測図 (1/2)	377
第 371 図	鉄鎌・鉋・紡錘車他実測図 (1/2)	378
第 372 図	鉄器・銅製品実測図 (1/2)	379
第 373 図	瓦実測図 (1/6)	380
第 374 図	森ヶ坪遺跡鍛冶工房空間利用図	385
第 375 図	カマド模式図	390
第 376 図	住居跡変遷模式図 (1/1,200)	391

表 目 次

表 8	鎌・刀子出土地一覧表	375
表 9	供試材一覧表	382
表 10	鉄滓・鍛造剥片の化学組成	387
表 11	赤穂森ヶ坪遺跡出土精錬鍛冶滓 (FK6) のコンピュータープログラムによる高速走査分析結果	388
表 12	鉄滓出土地一覧表	392

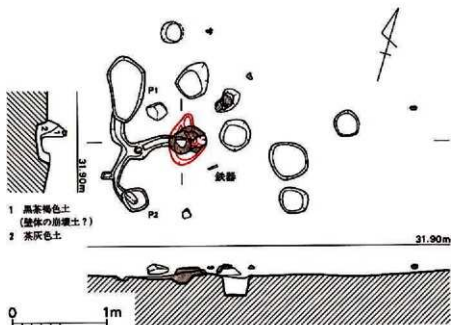
(6) 鍛冶炉跡

調査区の西側において、製鉄関連の鍛冶炉跡2基を検出した。

1号鍛冶炉跡（図版121，第293図）

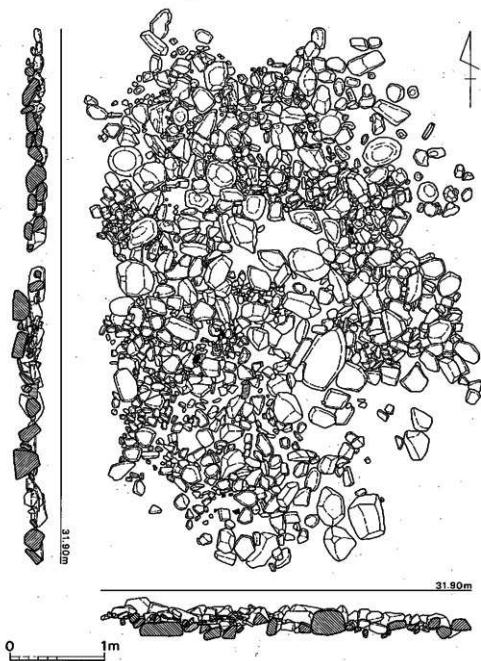
22号土壇の北西側から検出された鍛冶炉である。炉は北壁と南壁の一部の炉壁を残し，中心部には20×24cm，深さ8cmのピットが穿たれている。底面を除き壁面は真赤に焼けていた。残りの良い北側の炉壁は底面から高さ23cm遺存し，壁面は赤変していた。炉跡から西側に幅11～18cm，深さ4～5cmの浅い溝が西走し，40cm延びた所で二又に分かれ，それぞれP1・P2のピットに注いでいる。溝内からは焼土塊や炭化物小片がかなり検出された。

炉跡とP1の間には20×18cm，厚さ10cm前後の比較的偏平な石が置かれていた。また，炉跡の東側からは椀形埴や羽口片，土師器・須恵器片などが点在して検出され，炉の南東20cmの所からは鉄錐1点が出土した。炉跡の断面を切った所，中心の炉跡については，当初，43×38cm，深さ15cm前後の不整円形のピットを掘り，その中に茶灰色土を詰め，その上に炉壁を構築していることが判った。炉の周辺からは7個のピットが検出されたものの，覆屋等の柱穴としてはまともなようである。



第293図 1号鍛冶炉跡実測図 (1/40)

2号铁冶炉跡 (图版122, 第294图)



第 294 图 2号铁冶炉跡实测图 (1/40)

1号鍛冶炉跡の東側から検出された。大小の河原石が5.75×4mの範囲に長方形に敷き詰められ、その南西部から炉跡は検出された。85×45cmの範囲で大きめの河原石で囲まれた凹地があり、中からは焼土塊や炭化物小片とともに、羽口片や鉄滓が多数出土した。また、炉に近接して炉壁の一部に使用されたと思われる粘土塊も発見されている。炉内には羽口片や鉄滓とともに、多数の小さな河原石が入っていたものの、底面は大きな石を敷いていた。

また、炉の周辺の敷石上からは羽口片や鉄滓、土師器・須恵器などの小破片が散在していた。炉跡が長方形に敷き詰められた石敷の南西側に片寄っていることからすれば、北側から東側には鍛冶炉に係る別の作業施設が存在した可能性が高いが、明確な遺構としては検出されなかった。また、覆屋等の施設の痕跡も把握できなかった。このような石敷上に、なぜ鍛冶炉を構築したかは判らないが、湿気を嫌う鍛冶炉の性格を物語るものかもしれない。

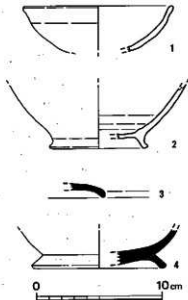
鍛冶炉跡周辺出土土器 (第295図)

須恵器(3・4)3は坏蓋の小破片で、口縁端部が喙状をなすものである。内外ともクロコナデ仕上げで、色調は灰色を呈し、焼成も良好である。4は高台付椀の破片資料で、復原高台径10.6cmを測る。体部内外と高台周辺はクロコナデで、底部内外はナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成は良好、堅緻である。

土師器(1・2)1は高台付椀と思われる破片資料で、復原口径12cmを測る。体部内外はナデで、体部外面には指頭圧痕を顕著に残している。口縁部内外はヨコナデで仕上げている。体部外面には著しい煤の付着がみられる。2は高台付椀の破片で、復原高台径7.8cmを測る。高台も高く、体部は直線的に外傾する椀である。体部内外と高台付近はクロコナデで仕上げている。色調は1・2とも黄褐色を呈し、焼成は良好である。

以上の土器が鍛冶炉周辺から出土したもので、1～3が1号鍛冶炉跡、4が2号鍛冶炉跡周辺から出土した資料である。1・2の土師器は9世紀後半頃、3の須恵器

は8世紀中頃のもので、1世紀近くの開きがある。また、4の須恵器は7世紀後半のもので、それぞれ年代が異なる結果になってしまう。しかし、2号鍛冶炉周辺出土の土器は同一の遺構として考えた石敷上から出土したものであり、鍛冶炉の年代を決める上で、他の土器より有効な遺物である。その意味では、2号鍛冶炉の時期は7世紀後半といえるだろう。(井上)



第295図 鍛冶炉跡周辺出土土器
実測図(1/3)

(7) 溝

調査区の全域において長短16条の溝を検出した。方向性としては南-北、東-西、北東-南西の3方向に大別できる。溝の性格については不明瞭な点が多い。出土遺物には、弥生土器・須恵器・土師器・鉄器等がある。以下、個別に説明を加える。

1号溝

調査区の北東側に位置し、長さ4.64m、深さ0.2mを測る。中央部で膨れ、最大幅1.13mを測る。遺物の出土はなかった。

2号溝 (図版7-2・10-1, 第36図)

1号溝の2m南西側に位置し、11号住居跡を切る。長軸を東西方向に取り、長さ6.18m、最大幅1.15m、深さは10cmと削平が著しい。埋土中から土師器片が出土しているが、図示不可能。

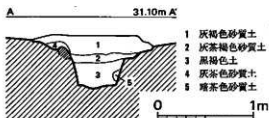
3号溝 (図版123-1・2, 第296図)

調査区の東寄りを北-南東方向に走る溝で、南東側は区外に伸展し、北側は5号竪穴で止まる。15・23・91号住居跡、5・13号竪穴、23号土壇、9号集石土壇、4・5号溝に切られ、30号土壇を切っている。また、4号溝は3号溝の切り替えである。総延長90.6m、最大幅1.48m、深さは南東端部で0.1m、中央部0.2m、北側0.4mを測る。埋土中から弥生土器・須恵器・土師器等が割合多量に出土した。

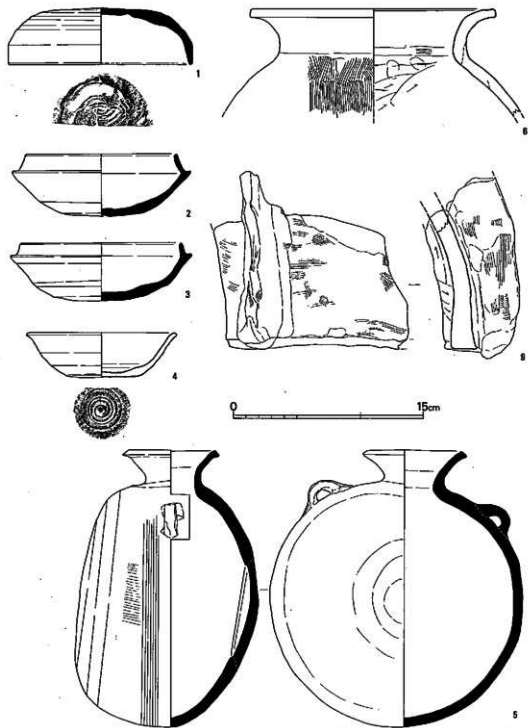
出土土器 (図版145-2, 第297~299図)

須恵器 (1~3・5) 1は坏蓋で、器高4.4cm、復原口径14.4cmを測る。口唇部は丸く納め、天井部との境にへら沈線を巡らす。調整は口縁部ヨコナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面にはタタキ目がみられる。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈する。2・3は坏身で、たちあがりは内傾する。調整は口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面回転ナデによる。器高は2が4.8cm、3は4.5cmで、口径は2が11.9cm、3は12.4cmを測る。焼成は2・3ともに不良で、色調は2が暗緑灰色、3は暗赤褐色を呈する。

5は提瓶で、器高21.7cm、復原口径7.4cmを測る。口縁部はラッパ状に大きく開き、肩部に環状取っ手を貼付する。調整は口縁部ヨコナデ、胴部回転ヘラケズリ・ナデ・カキ目、内面ナデ



第296図 3号溝土層断面実測図 (1/40)



第 297 图 3号溝出土土器実刻図①(1/3)

による。焼成は堅緻で、色調は暗青灰色を呈する。

土師器（4・6～8）4は坏で、器高3.5cm、復原口径11.6cmを測る。底部から大きく開き、口唇部は肥厚する。調整は口縁部ヨコナデ、内外面ナデで、外底部はヘラ切りによる。胎土に赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、色調は明橙色を呈する。

6・7は甕で、6は口縁～肩部破片。口縁部は水平気味に開く。口径は18.8cmに復原した。7は完形品で、器高38.5cm、口径21.7cm、胴部最大径32.9cmを測る。口縁部は頸部から短く開き、撫肩の肩部から丸底の底部に移行する。胎土に長石・石英・角閃石を多く含む。焼成は良好で、橙褐色を呈する。

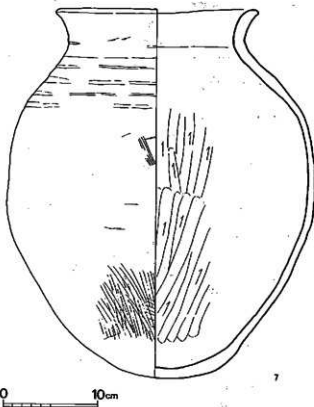
8は取っ手付き甕の口縁～胴部破片であるが、取っ手は剥離している。口縁部は大きく開き、端部を折り曲げる。胴部は大きく張るようである。口縁部ヨコナデ、外面粗いハケ目、内面ヘラケズリ～雑なヘラミガキ調整による。胎土に石英・角閃石を含む。焼成は良好で、色調は暗黄褐色を呈する。

土製品（9）9は移動式カマドの基底部破片で、縦方向の底が遺存する。底部は8号竪穴の出土である。焼成は良好で、褐色を呈する。溝の時期は、6世紀後半であろう。

4号溝

3号溝の掘り直して、本来3B溝とすべきであるが、新番号を付した。3号溝の南1/3から派生し、4・5号集石土壌より先には延びない。長さ35.4m、最大幅1.38mを測る。3号溝に比して土器の出土は少なく、弥生土器・須恵器・土師器が出土した。

出土土器（第299図）



第298図 3号溝出土土器実測図② (1/4)

弥生土器(1) 1は壺の肩部破片で、貝殻腹縁による鋸歯状山形文を施文する。焼成は軟質で、白黄色を呈する。

5号溝

調査区の南西端部に位置し、3号溝を切る。また、13号建物跡と重複関係を有するが、新旧は判然としない。弓状を呈し、長さ22m、幅0.76mを測る。北側に深くなっており、深さは15cmを測る。埋土中から土師器が出土した。

出土土器(第299図)

土師器(1) 1は壺の口縁～肩部破片で、口縁部は大きく開く。調整は口縁部ヨコナデ、内外面ハケ目による。焼成は良好で、色調は暗黄褐色を呈する。

6号溝

5号溝の7m西側に位置し、21号住居跡に切られる。長さ18.4m、幅1.06m、深さ0.18mを測り、溝底は北側に深くなっている。埋土中から須恵器・土師器片が出土したのみ。

7号溝

10号住居跡のすぐ東側に位置し、4号竅穴・10号土壇に切られる。10号住居跡検出面の20cm下層で検出したが、住居跡をL字形に囲み、同時並存の可能性を否定できない。埋土中からは土師器小片が出土したのみ。

8号溝

6号溝の3.5m西側に位置する。全長19.6m、中央部幅1.62mで、東側は二股に分かれる。深さは12cmと残りが悪い。埋土中からは弥生土器・須恵器・土師器が出土した。

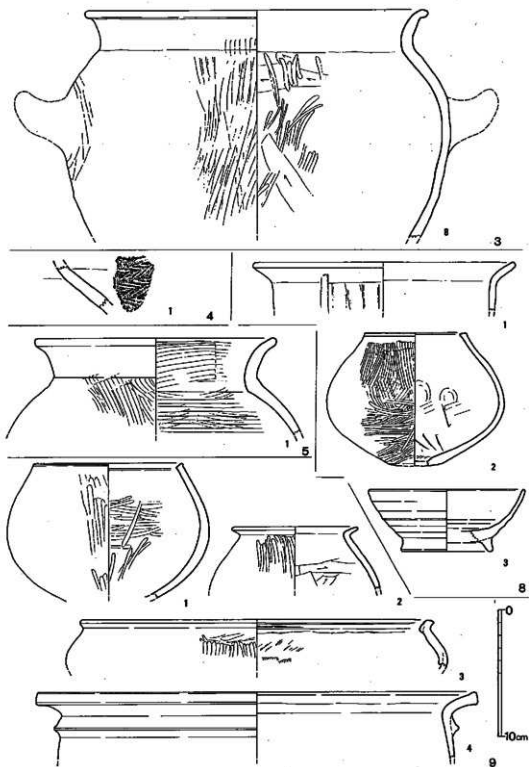
出土土器(図版145-3、第299図)

弥生土器(2) 2は無頸壺で、胴部は算盤玉状に張る。外面の上位はハケ目、下位はヘラミガキによる。焼成は良好で、色調は暗橙褐色を呈する。器高10.4cm、復原口径7.8cmを測る。

土師器(1・3) 1は壺の口縁部破片で、口径は20.8cmに復原した。3は小型の椀で、器高4.9cm、口径は11.8cm、高台は7.1cmに復原した。胎土は精良で、色調は橙色を呈する。

9号溝

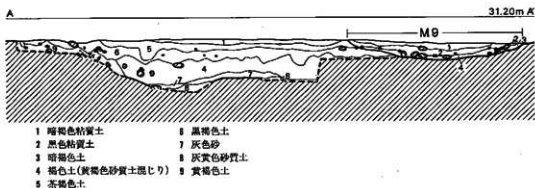
調査区の南東部を東西方向に走る溝で、東端は1号集石土壇に切られる。長さ50m、最大幅5.2m、深さ0.36mを測る。9号溝とクロスする遺構は溝ではなく、谷状の落込みである。埋土中から割合多量の弥生土器が出土した。



第299图 3~5·8·9号溝出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (図版145-4, 第299図)

弥生土器 (1~4) 1は底部を欠くが、鉢になるか。内外面ともヘラミガキを施す。2は小型甕の口頸部破片で、頸部の締りはよい。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ状の擦過による。口径は10.0cmに復元した。3は口縁部破片で、口径は27.6cmに復元したが、もう少し小さくなるか。口唇部内面に細いヘラ沈線を巡らす。高坏になろう。4は甕の口縁部破片で、口縁部は「く」字形を呈する。頸部直下に断面三角凸帯を貼付する。焼成は良好で、乳灰色を呈する。この他に、甕底部・高坏脚部等が出土している。



第300図 9号溝土層断面実測図 (1/80)

10号溝

12号竪穴のすぐ南側に位置し、東西方向に走る。長さ15.4m, 中央部幅0.72m, 深さ0.27mを測る。埋土中から須恵器・土師器片が出土した。

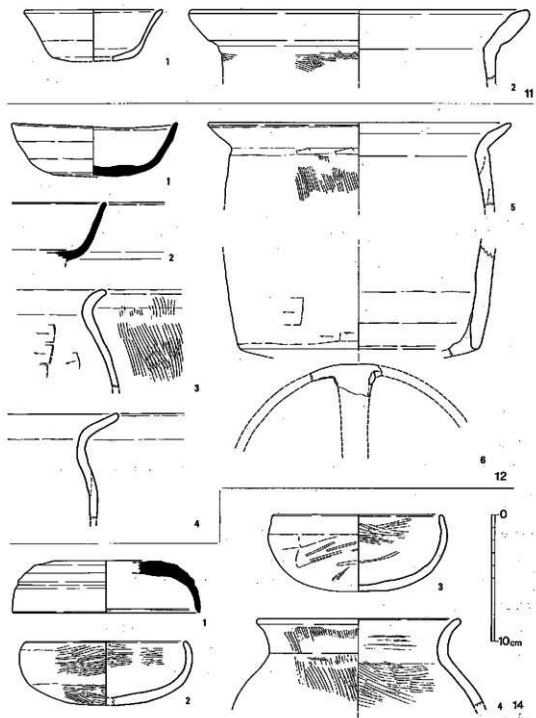
11号溝

調査区の北東端部を北東-南西に走る。北側は区外に伸展するが、残存長10.46m, 幅1.13m, 深さ0.13mを測る。37号土塚は下層の検出である。埋土中から須恵器・土師器が出土した。出土土器 (図版145-5, 第301図)

土師器 (1・2) 1は坏で、器高4.0cm, 口径は10.8cmに復元した。口唇部は丸く納める。2は甕の口縁部破片で、口径は22.6cmに復元した。口縁部は肥厚し、頸部内面の稜はシャープである。宇野氏が勝円式土器と仮称した土器 (註1) と同類と思われる。

12号溝 (図版124-1)

当初、3号鍛冶炉跡としていた遺構のすぐ西側に位置する。長さ6.86m, 幅1.74m, 深さ0.1



第 301 图 11·12·14号清出土土器实测图 (1/3)

mを測る。埋土には焼土が多く、須恵器・土師器が出土した。なお、106号住居跡は当遺構の下層の検出である。

出土土器 (第301図)

須恵器(1・2) 1は坏身で、器高4.2cm、復原口径13.0cmを測る。口唇部はやや肥厚する。内外面ともナデ調整による。焼成は堅緻で、色調は黒灰色を呈する。2は口縁～底部小破片で、坏身になろう。口唇部は丸く納める。

土師器(3～6) 3～5は甕の口縁部破片で、4の口縁部はかなり開く。5の口径は24.0cmに復原した。調整は何れも口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。

6は瓶の底部破片で、底部中央に棒を一本付加している。外面工具による擦過、内面ナデ調整による。胎土に石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、色調は暗橙褐色を呈する。

13号溝 (第288図)

2・3・5号集石土塙の北西側で、それらを限るように位置する。直線的で、長さ9.72m、最大幅0.48m、深さは0.12mと浅い。埋土中からは、土師器坏小片が出土している。

14号溝 (図版90-2・93-1)

調査区中央住居群の下層から検出した東西に走る溝で、17・19号竅穴を切っている。長さ21m、中央での幅2.66m、深さ0.15mを測る。埋土中から須恵器・土師器が出土している。

出土土器 (図版145-6, 第301図)

須恵器(1) 1は坏壺で、器高4.1cm、復原口径14.8cmを測る。口唇部内面には、僅かに段が残る。天井部は低く、境にヘラ沈線を巡らしている。焼成は堅緻で、色調は緑灰色を呈する。

土師器(2～4) 2・3は坏で、2の口縁部は内湾し、3はやや立上がり気味。器高は2が5.0cm、3は6.0cm、口径は2が12.4cm、3は13.0cmに復原した。調整は内外面ともヘラミガキによる。焼成は良好で、色調は2が淡橙色、3は暗褐色を呈する。4は甕の口縁部破片で、復原口径は15.6cm。内外面ともハケ目調整による。

15号溝

調査区の北側を北西-南東方向に直線的に走る溝で、最も新しい。長さ40.6m、幅0.38mで、深さは13cmと浅い。土師器小片が出土したのみ。

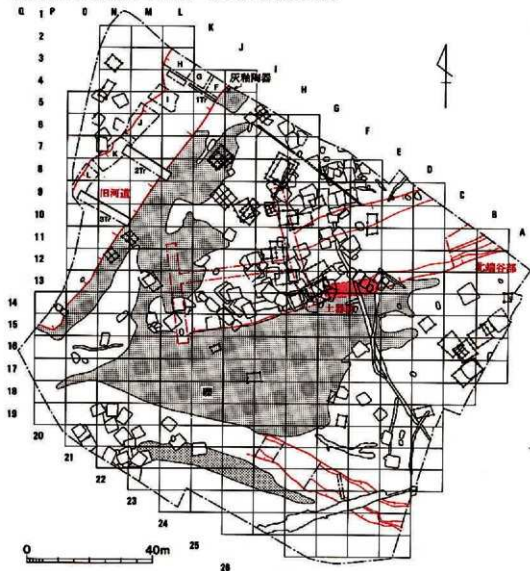
16号溝 (図版82-1)

1号建物跡と重複して位置するが、前後関係は不明。長さ12.2m、幅0.42mで、深さは12cmと浅い。土師器細片が僅かに出土した程度。

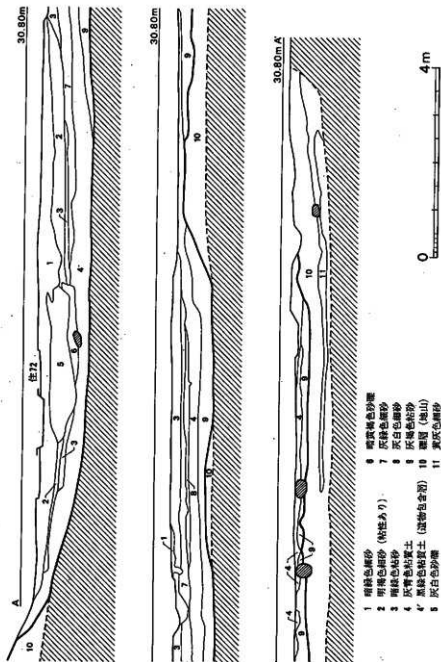
(小田)

(8) 谷状遺構 (図版125・126, 第302・303図)

谷部は土層目で観察した結果、上端幅は22.6m、遺構検出面からの深さ1.72mを測る。長さは中央トレンチまでしか把握していないが、西側にT字形にトレンチを入れた所、礫層の立上がりが出てこなかったことから調査区の東西に伸展するものと考えられる。④層の黒緑色粘土が土器包含層で、パソコン200箱もの土器が出土した。土器は一箇所に投棄された状態で出土しており、数点ではあるが完形品もみられた。土器の他には、石器・鉄器が出土している。また、北端谷部とした遺構は、当谷部と一連のものと考えられる。



第302図 谷部実測図 (1/1,200)



第 303 圖 谷部土層断面実測図 (1/80)

谷部出土弥生土器 (図版146~168, 第304~341図)

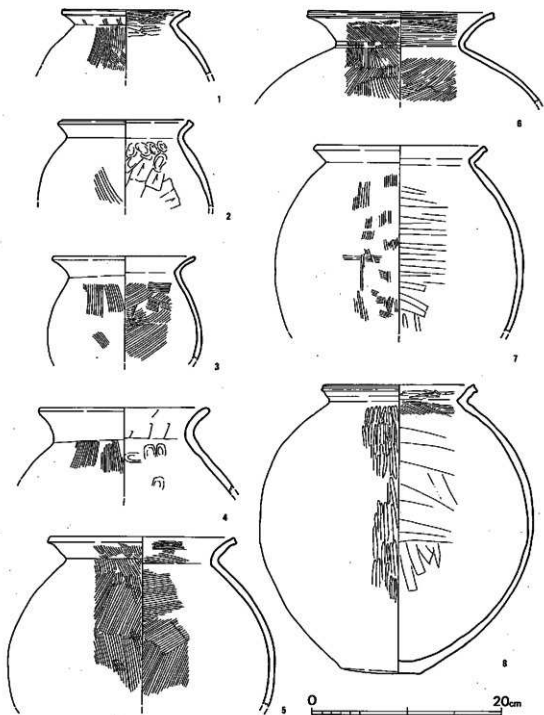
壺(1~84)大きく10種類に大別できる。①タイプは球形の胴部に頸部が強く締り、「く」字状に強く外反した口縁部が付く壺(1~8)、②タイプは偏球形の胴部に立ち気味に大きく外反する口頸部が付く壺(9~13・15・17)、③タイプは細頸壺(18~33)、④タイプは無頸壺(34~44)、⑤タイプは広口短頸壺(47~50)、⑥タイプは備先状口縁の壺(51~53)、⑦タイプは袋状口縁の壺(54~75)、⑧タイプは長頸の壺で、頸部に多条の凹線文を施した吉備系壺(76)、⑨タイプは垂下口縁の壺(77)、⑩タイプは偏球形の胴部中に2条の凸帯を巡らし、その間をS字状付文等を貼付し、加飾した吉備系の壺(84)の10種類である。

①タイプの壺は、筑前地方では類例の少ない土器である。8は球形の胴部に強く締まった口頸部が付き、口縁端部には凹線文が施されている。口径16cm、胴部最大径29.3cm、底径8.4cm、器高30.2cmを測る。このタイプの壺の調整手法は、胴部外面を刷毛調整したもの(1~6)、刷毛の後丁寧にヘラ磨きしたもの(7・8)、内面を刷毛調整したもの(3・5・6)、ナデのもの(4・7)、ヘラ削りしたもの(2・8)、口縁部内外を刷毛の後外面をナデで仕上げたもの(1・5・6)、ヨコナデで仕上げたもの(2~4・7・8)がある。2の口縁端部はヨコナデにより、揃み上げ気味に仕上げている。

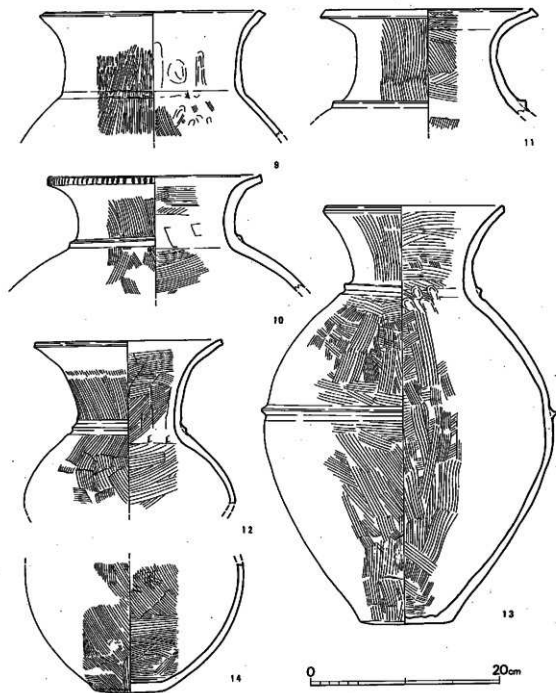
②タイプの壺は、頸部下と胴部中に三角凸帯を巡らすのが一般的で、9のような無いものもある。調整手法は、胴部・頸部内外とも刷毛、口縁部内外はヨコナデで仕上げたものが多い。9のように外面へラ磨きで仕上げた作りの良い土器もある。大きさにも大小があり、13は口径18.6cm、胴部最大径31.4cm、器高42.6cm、15は29.3cm、胴部最大径44.6cm、器高59.6cmを測る。

③タイプの細頸壺には、長頸のもの(18~23・27~29)と短頸のもの(24・26)があり、大きさにも大小がある。何れも作りの良い精製の土器である。調整手法は頸部・胴部外面を刷毛のもの(21~28)、ヘラ磨きで仕上げたもの(18~20・22・29・30)、刷毛ないしはタタキの後ナデ仕上げのもの(31~33)、内面は刷毛の後ナデたものが大半である。口縁部内外はヨコナデで仕上げている。28のように胴部外面下半と内面をヘラ削りしたものもある。25の胴部外面下半はナデ仕上げである。また、23の頸部下には紐状の貼付文が付いた珍しい土器である。21は完形品で、口径14.6cm、胴部最大径22.7cm、器高32.2cmを測る。色調は黄褐色を呈し、胎土は精良で、完成良好な土器である。

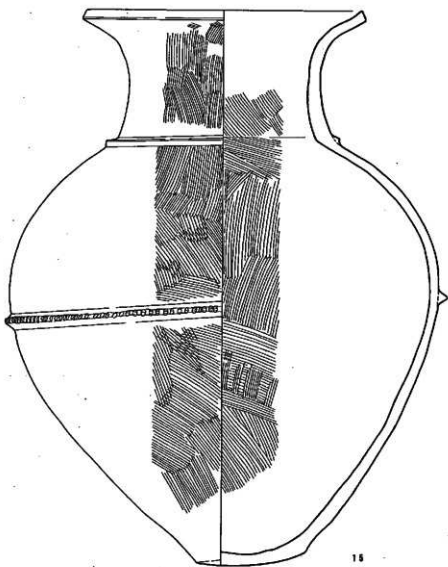
④タイプの無頸壺には、偏球形の外湾気味に立上がる口頸部がつくもの(34~37)、内湾するもの(39~42)がある。底部も小さな平底をなすものと、丸底のもの、尖底のものなどがある。また、41・42の胴部中に注口状の孔がある。器形は明らかではないが、45・46は注口の破片で、おそらくこの種の無頸壺に付くものと思われる。調整手法は34・36・37・40は丁寧にヘラ磨き、35・38は刷毛の後粗いヘラ磨き、39は内外ともナデ仕上げで、外部外面下半はヘラ削りの後ナデでいて、外部に屈折線を残している。内面は35・39が刷毛の後ナデ、後は全てナデ



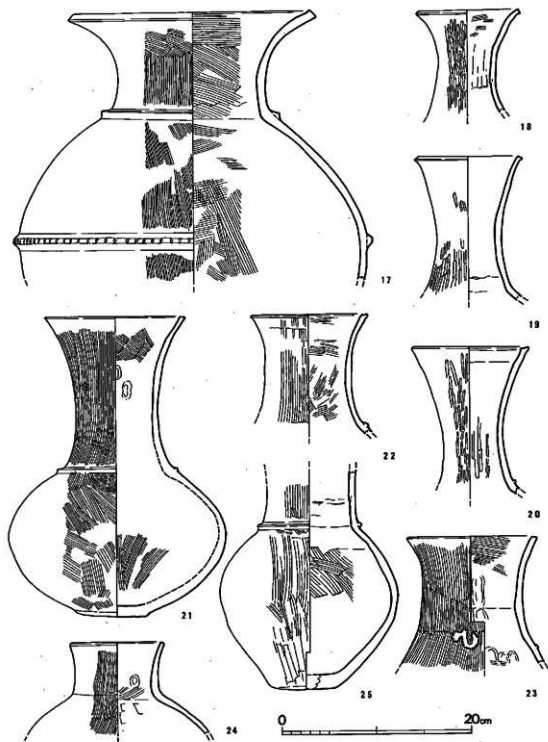
第 304 图 谷部出土弥生土器夹测图① (1/4)



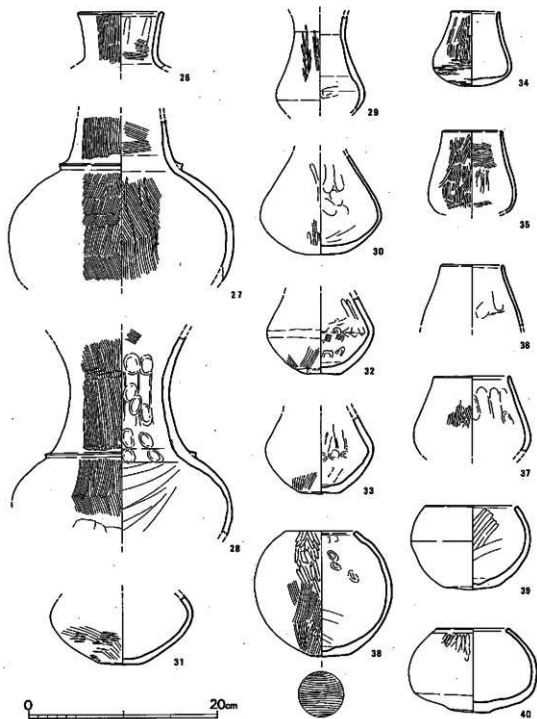
第 305 图 谷部出土弥生土器实测图② (1/4)



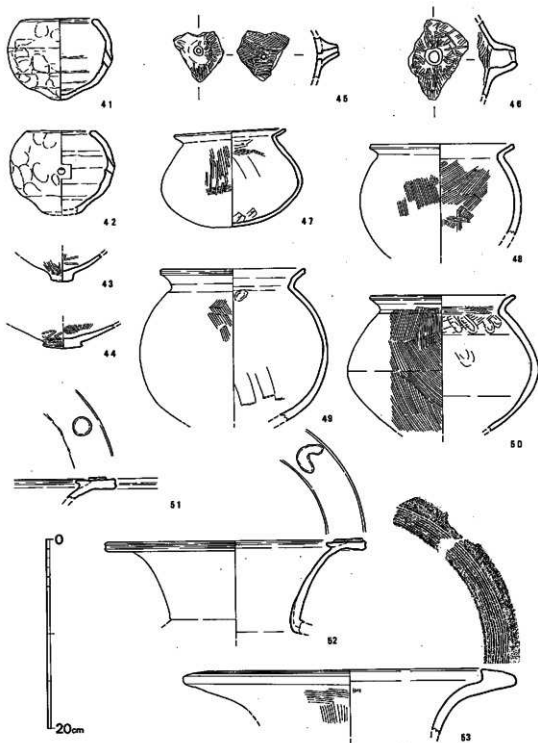
第 306 圖 谷部出土弥生土器実測図③ (1/4)



第 307 图 谷部出土弥生土器实测图④ (1/4)



第 308 图 谷部出土弥生土器实测图⑤ (1/4)



第 309 图 谷部出土弥生土器实测图⑥ (1/4)

て仕上げています。41・42は内外ともナデ仕上げで、体部外面には指頭圧痕を顕著に残し、粘土紐の輪積み痕もみられる。34は口径5.2cm、胴部最大径8.2cm、器高8cmを測る。38は口径7.5cm、胴部最大径14.7cm、器高13cm、39は復原口径9.7cm、胴部最大径12.8cm、器高8.75cm、40は復原口径7.8cm、胴部最大径13.8cm、器高8.7cmを測る。

⑤タイプの広口短頸壺は、偏球形の胴部に強く「く」字状に外反した口縁部が付く壺である。調整は47が胴部外面上半へラ磨き、下半はナデ、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げています。48～50は胴部外面を刷毛、内面は48が刷毛、49はナデ、50は刷毛の後ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げています。47は復原口径11.7cm、胴部最大径14.7cm、器高10.2cmを測る。

⑥タイプは鋤先状口縁の壺で、口縁部上面には51が円形貼付文、52が「く」字状貼付文、53には櫛描きの沈線文が施されている。復原口径は52が27.8cm、53が35.7cmを測る。

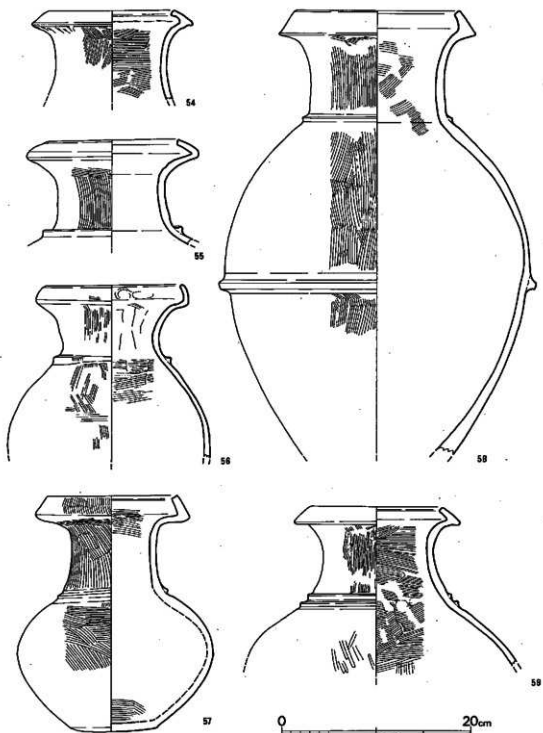
⑦タイプの袋状口縁の壺には、口縁部の形状により3種類に細別できる。口縁部外面が丸味をもつもの(55・56)、直線的になるもの(54・57～64)、外湾気味になるもの(65～75)があり、外湾気味のものには68～75のように口縁屈折部が鋤状をなすものもある。特に、73～75は顕著で、外面には凹線文と櫛歯の鋸歯文が施され、75の頸部には二段に凹線文が巡り、頸部下には三角凸帯が付されている。凸帯端部と凸帯下には刺突文が施されている。大きさにも大中小があり、57は復原口径13.6cm、器高25.2cm、61は口径16cm、器高34.2cm、71は復原口径29.6cmを測る。

調整手法は頸部外面を刷毛のもの(54～60・62・71・73・75)、刷毛の後へラ磨きしたもの(64～66・68～70)、刷毛の後ナデなもの(61・67)、内面は刷毛とナデがあり、刷毛が多い。胴部外面は刷毛のもの(56～58・66・68・71)、刷毛の後へラ磨きで仕上げたもの(59・61・65)があり、内面は刷毛仕上げのものが多い。口縁部内外はヨコナデ仕上げで、57・61は刷毛調整のみである。

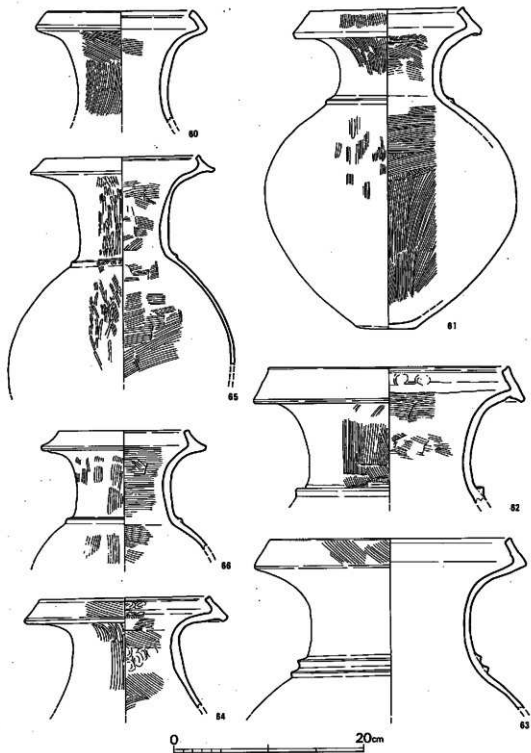
⑧タイプは長頸壺(76)で、頸部に多条の凹線文をめぐらし、その下に刺突文を施していて、吉備地方の上東式土器の特徴を有している吉備系土器である。胴部外面は刷毛の後へラ磨きと思われ、内面は刷毛とナデが併用されている。

⑨タイプの垂下した口縁部を有する壺(77)は、北部九州では珍しいもので、主に周防地方の中期の壺によくみられるタイプであり、周防地方との関係と考えるべき土器である。調整は胴部外面刷毛の後へラ磨き、内面粗い刷毛、頸部内外面とも細かい刷毛の後部分的にへラ磨き、口縁部内外もヨコナデの後部分的にへラ磨きして仕上げています。口径40.8cmを測る。底部は凸レンズ状の平底である。

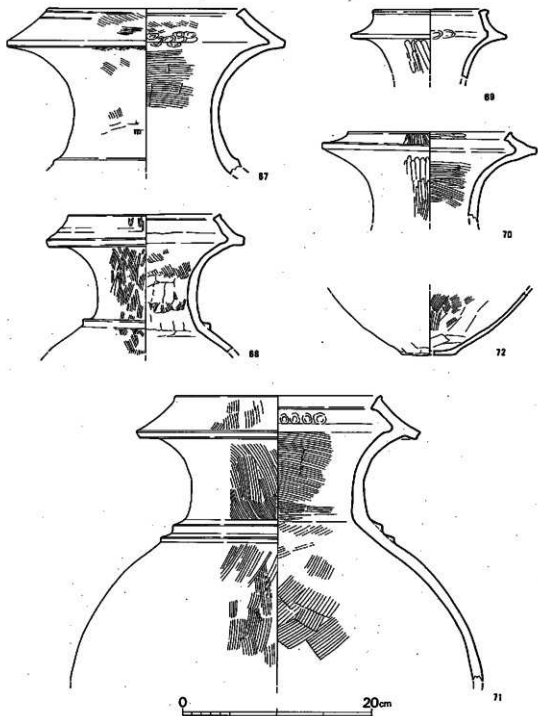
⑩タイプ(84)は、胴部の破片資料であるが、胴部に巡る2条の三角凸帯とその間を飾ったS字貼付文や紐状貼付文等は、上東式土器の長頸壺や特殊壺などによくみられるものである。調整は内外とも刷毛で仕上げ、凸帯部はヨコナデで仕上げています。



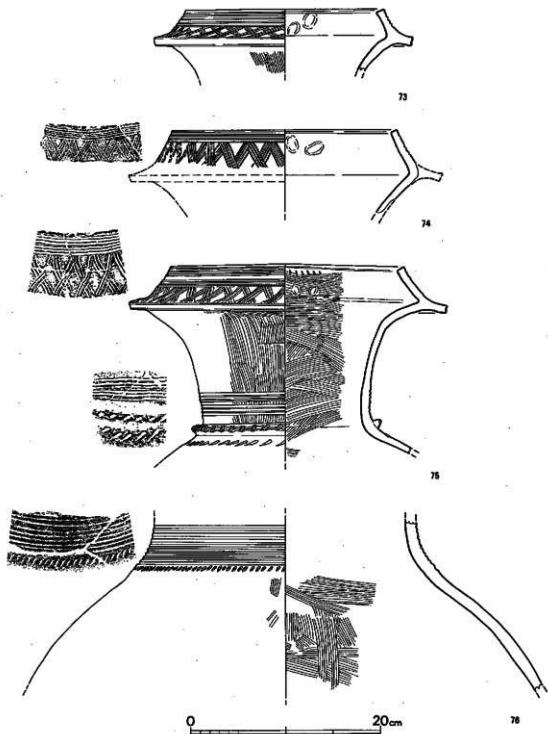
第310图 谷部出土弥生土器実測图⑦(1/4)



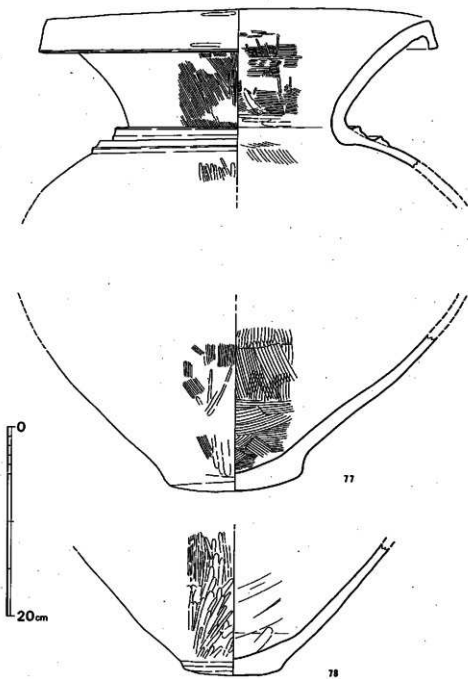
第 311 图 谷部出土弥生土器实测图⑧ (1/4)



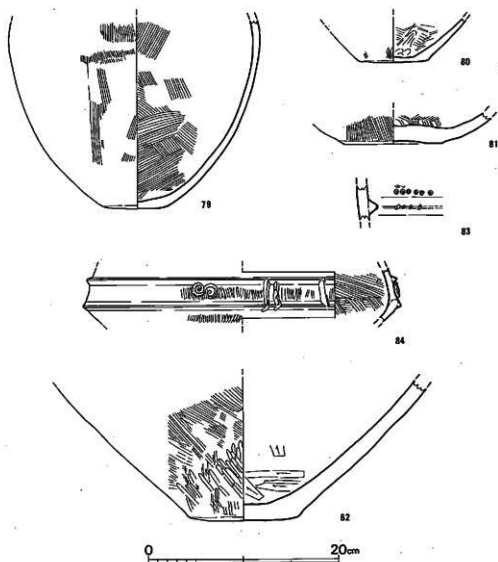
第 312 图 谷部出土彝生土器实测图⑨ (1/4)



第 313 图 谷部出土弥生土器实测图⑩ (1/4)



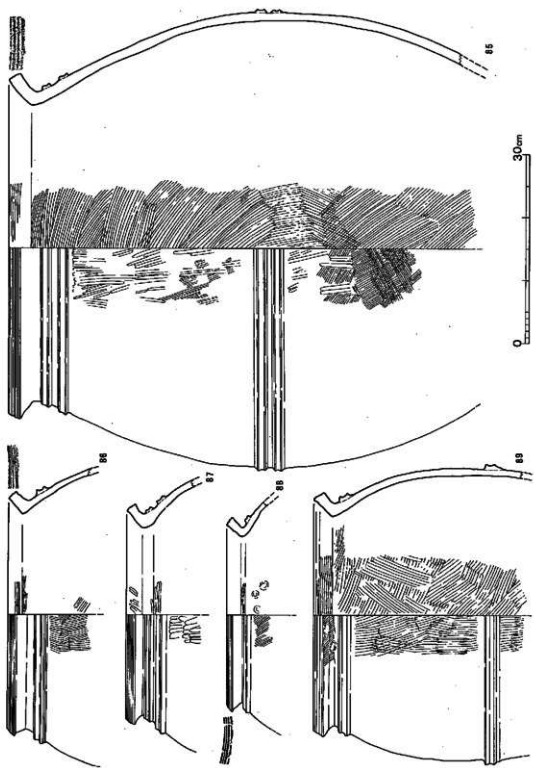
第 314 图 谷部出土弥生土器実測图① (1/4)



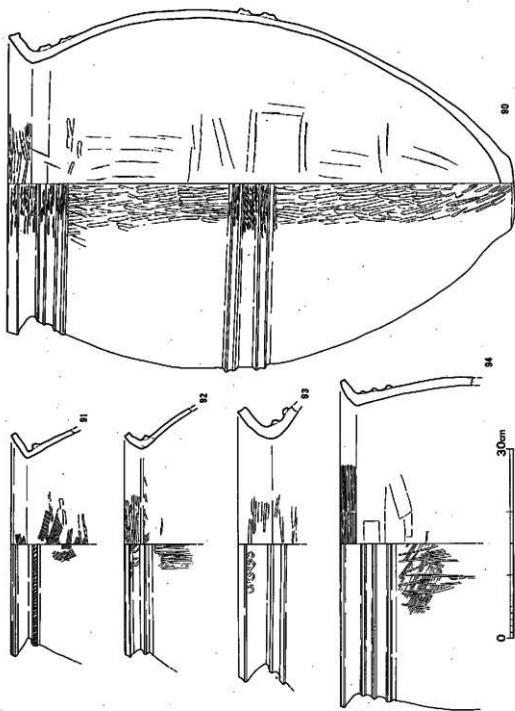
第315図 谷部出土弥生土器実測図⑬ (1/4)

甕 (85~152) 大中小があり, 85~109は大型品, 111・114・115~126・128~136・138~142は中型品, 112・113・127・137・143~147は小型品である。

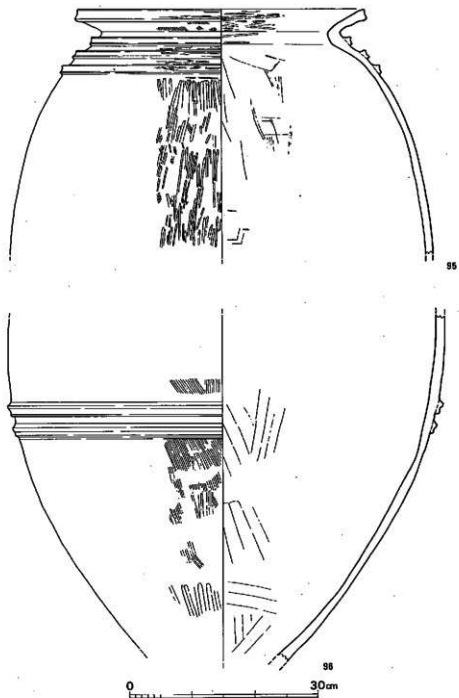
85~109の大型品の中でも, 85~97は頸部が強く締まった大型の甕で, 口縁下に1~3条, 胴部に1~2条の凸帯が巡る成人用甕棺とも言える大型甕である。85~88の口縁端部には凹線文が施されている。99~103・105は頸部に1条の凸帯を有するものの, 胴部に凸帯を持たないも



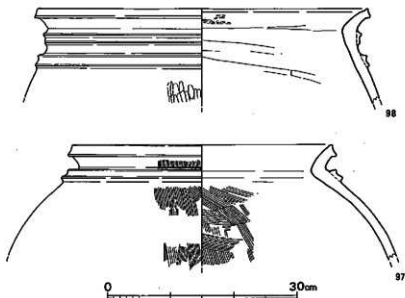
第 316 圖 谷部出土弥生土器灰濺面③ (1/6)



第 317 图 谷部出土弥生土器类测图③ (1/6)



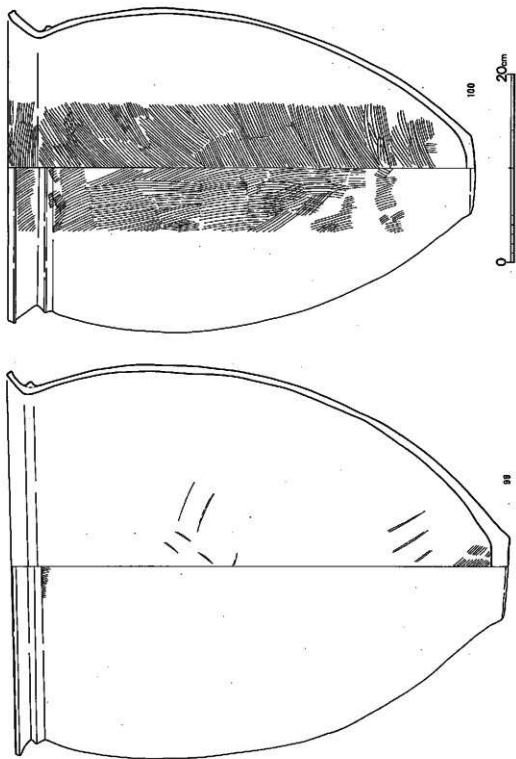
第 318 图 谷部出土弥生土器实例图⑨ (1/6)



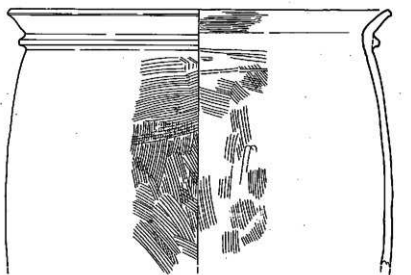
第 319 図 谷部出土弥生土器実測図⑩ (1/6)

ので、108・109は何れの凸帯もない大型の甕である。調整手法にも差異があり、85・88・90・92～96・98の胴部外面は刷毛の後とへら磨きして仕上げている、90はとりわけ丁寧にへら磨きしている。他は刷毛のものが多く、108のようなタタキ目を残すもの、100のように胴部下半をへら削りしたのものもある。胴部内面は刷毛のもの、ナデのもの、両者を併用したものもある。底部は104・108が凸レンズ状平底をなす他は平底である。大きさは、85が口径55.5cm、胴部最大径74.3cm、残存器高70.5cm、90は口径47.2cm、胴部最大径58.4cm、器高79.2cm、99は復原口径40.8cm、胴部最大径42.3cm、器高51.8cm、100は口径33.5cm、胴部最大径34.9cm、器高48.6cm、108は口径32.2cm、胴部最大径37.5cm、器高47.9cmを測る。

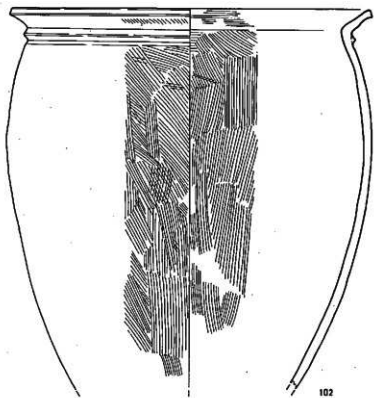
中型の甕の中にも、緩やかな「く」字状口縁をもつ中期的な甕(144)と、後期に通有の「く」字状口縁の長胴の甕がある。器形的には大差ないが、底部の形状と調整手法に差異がみられる。明らかに平底をなすもの(130・137・139・140・144)と、緩やかな凸レンズ状平底をなすもの(112～114・129・136・138)がある。調整手法は基本的に胴部外面は刷毛で、129・135・136のような工具によるナデ調整をしたものもある。また、139のような刷毛の後へら磨きをした珍しい例もある。胴部内面は刷毛のもの(114～121・123・124)、ナデのもの(122・125・126)、刷毛とナデを併用したもの(111・136～138)、へら削りしたもの(113・128・129・131～142・144)があり、へら削り技法の多用が目立っている。111・117・135の胴部外面は二次加熱を受け、赤変している。また、123・141の胴部外面には煤の付着がみられる。



第 320 图 谷部出土弥生土器类图④ (1/4)



101



102

0 20cm

第 321 圖 谷部出土弥生土器実測圖⑩ (1/4)

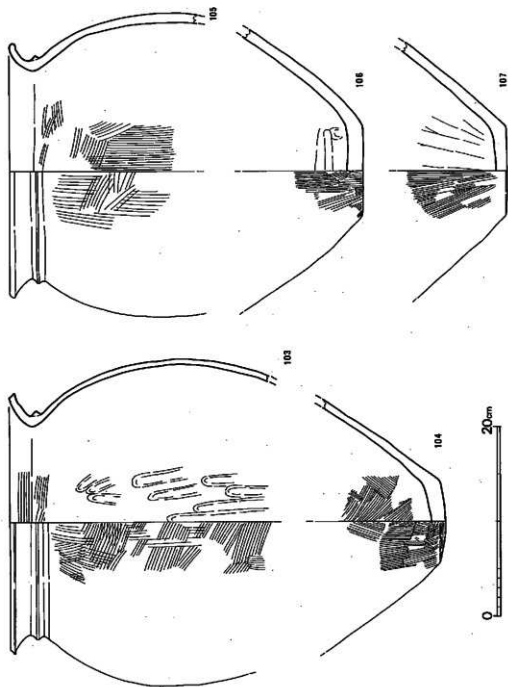
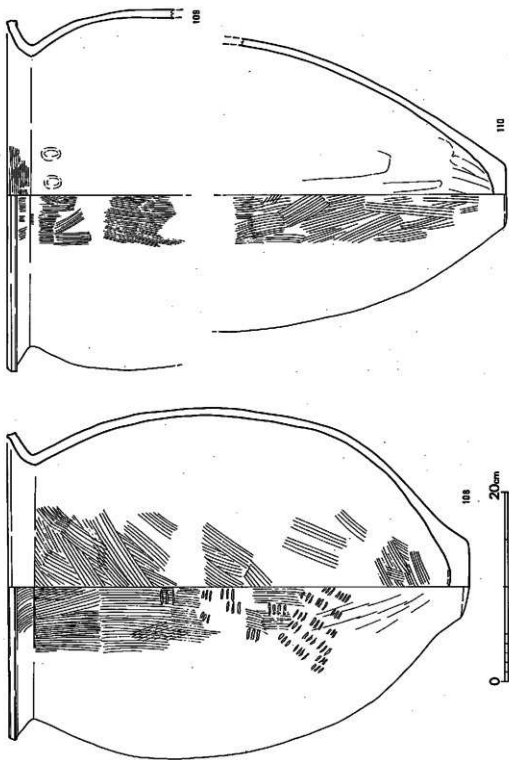
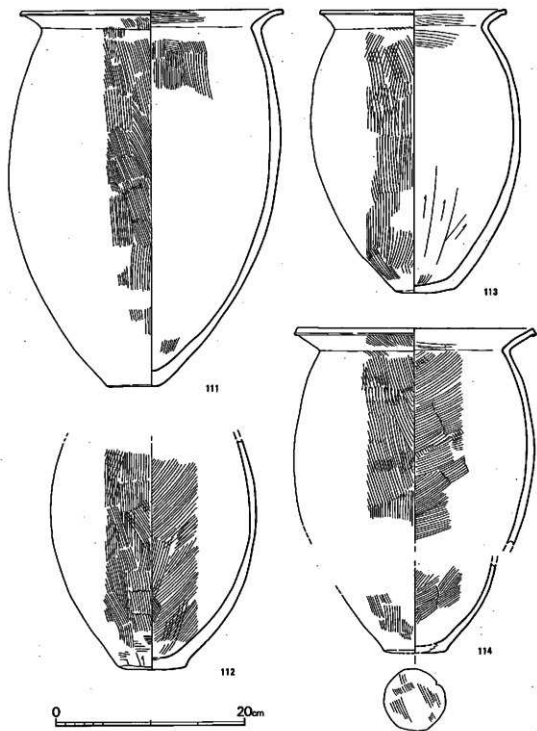


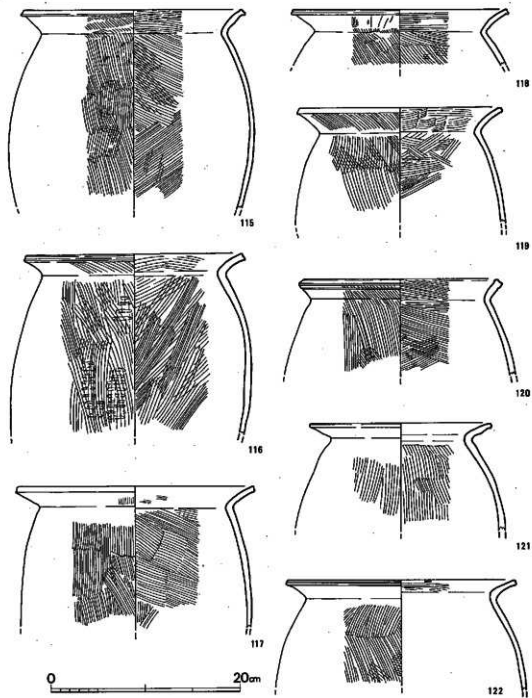
图 322 谷部出土弥生土器类图⑨ (1/4)



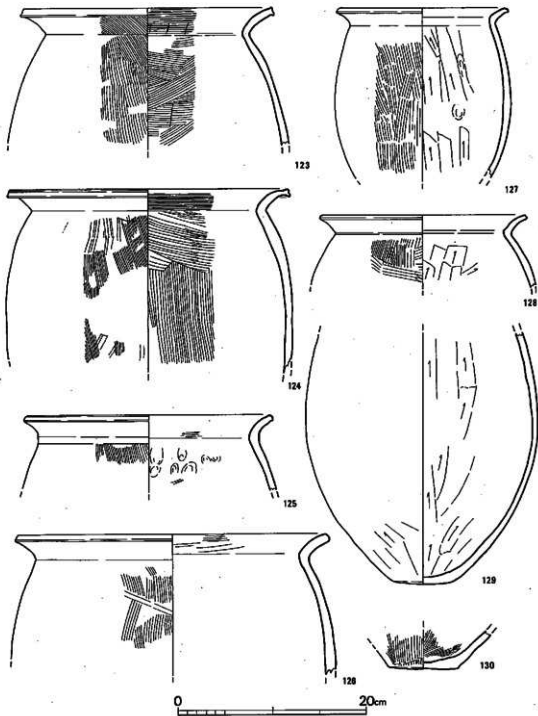
第 323 图 谷部出土弥生土器实例图④ (1/4)



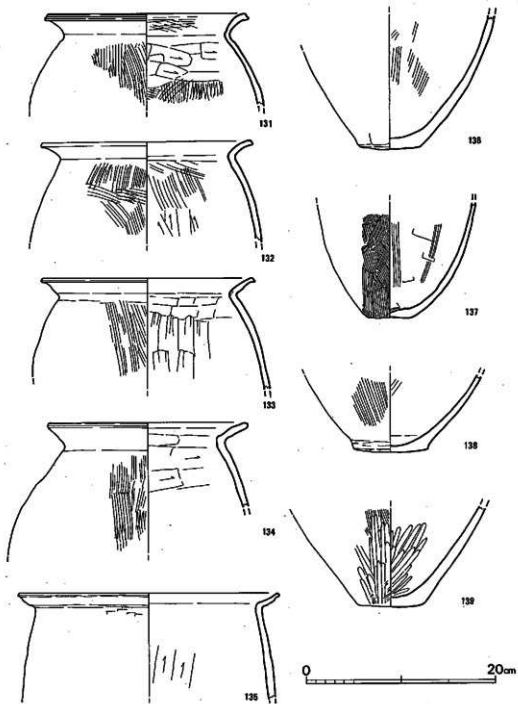
第 324 图 谷部出土弥生土器实测图② (1/4)



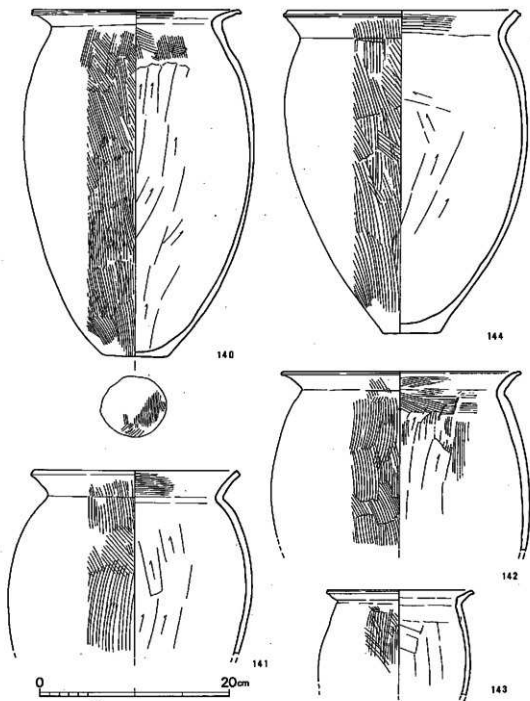
第 325 图 谷部出土弥生土器实测图② (1/4)



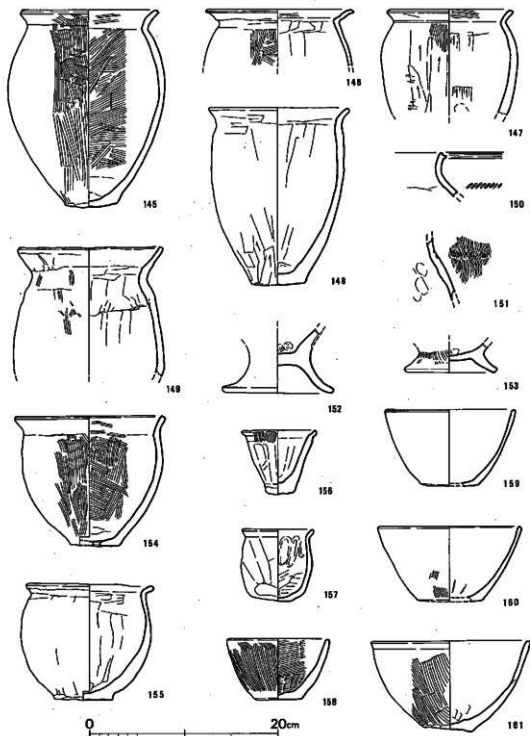
第 326 圖 谷部出土弥生土器実測図③ (1/4)



第 327 图 谷部出土弥生土器实测图② (1/4)

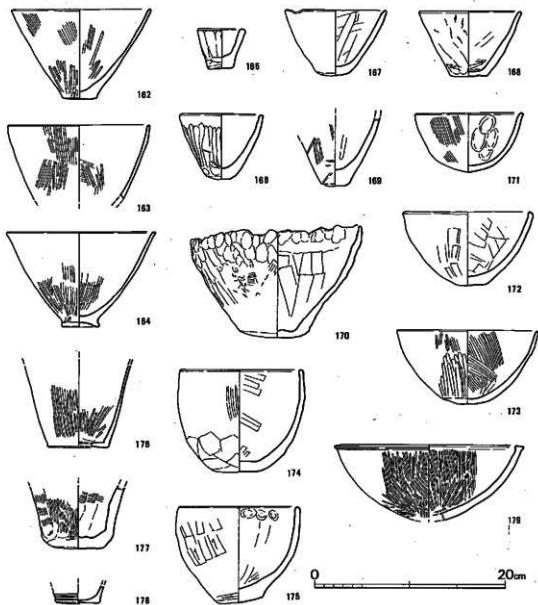


第 328 图 谷部出土弥生土器实测图② (1/4)

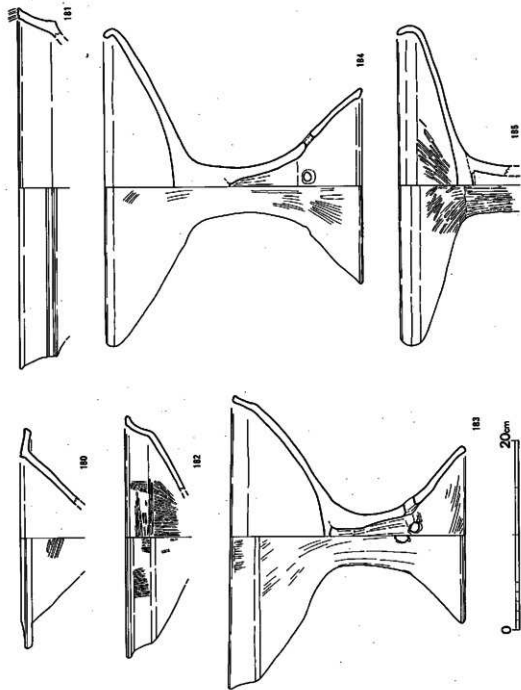


第 329 图 谷部山土弥生土器実測图② (1/4)

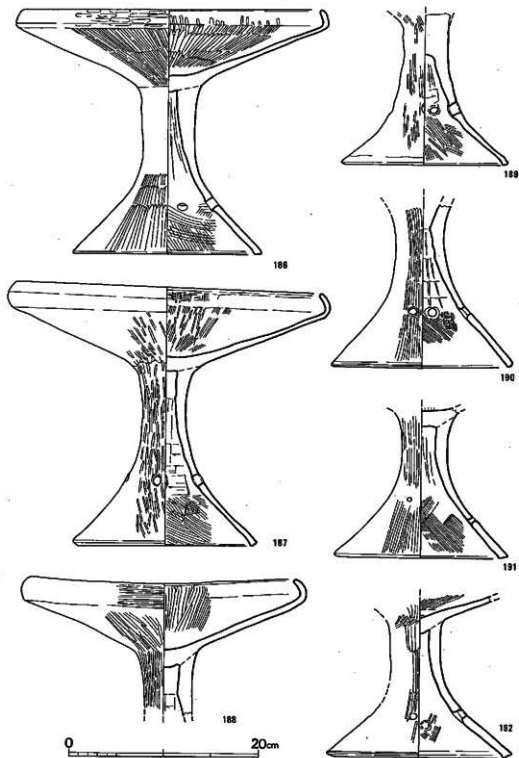
小型変も中型変と調整手法は同様で、胴部内面のへら削り技法が目立っている。また、147・148は他と異なり、内外とも工具ナアにより仕上げた粗雑な作りの変である。113は口径19.3cm、器高30.2cm、144は復原口径14.5cm、器高20.5cm、147は口径14.9cm、器高18.5cmを測る。113・145・147の外面には煤の付着がみられ、112・144・145・147・148は二次加熱を受けて赤変している。



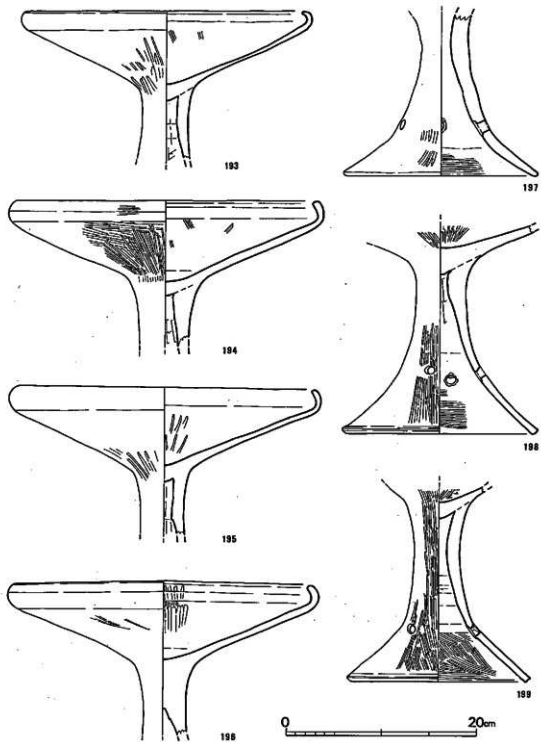
第 330 図 谷部出土弥生土器実測図② (1/4)



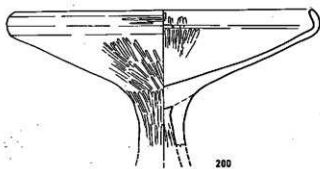
第 331 圖 谷部出土弥生土器类图④ (1/4)



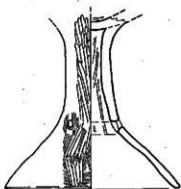
第 332 图 谷部出土弥生土器实测图③ (1/4)



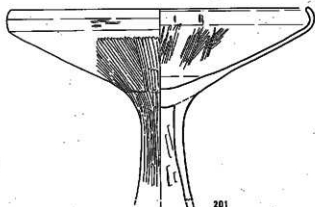
第 333 图 谷部出土弥生土器实测图② (1/4)



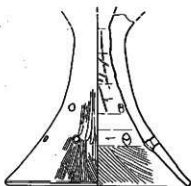
200



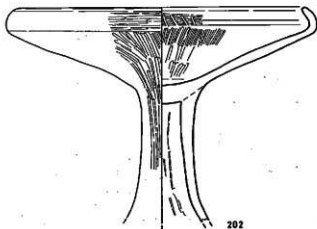
201



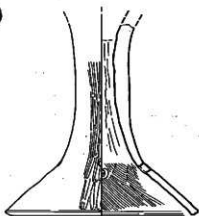
201



204



202



205



第 334 图 谷部出土弥生土器实例图④ (1/4)

152・153の器形は判らないが、姿の脚台部の資料である。150・151は小破片のため形状は知り得ないが、150の肩部に歯状の刺突文、151は竹管文が施されている。

鉢 (154・155) 小型の鉢で、154の底部には小孔が穿たれていて、甑として使用されている。何れも平底で、口縁部の外反は緩やかで、口径は154が15.7cm、155が13.2cm、器高は154が14cm、155が12.4cmを測る。調整手法は154が胴部内外刷毛、155がナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

椀 (156-179) 大きくは手捏れのものや精製のものがある。156・157・165-170が手捏れ土器で、各所に指ナデ痕を残している。156-162・168・170は平底で、171・172は丸底で、体部が直線的に立上がる椀である。174-175は平底で、体部が内湾気味に立上がるタイプである。176-178は平底のコップ状をなす椀で、178の体部下端には3条の平行沈線と刺突文が施されている。

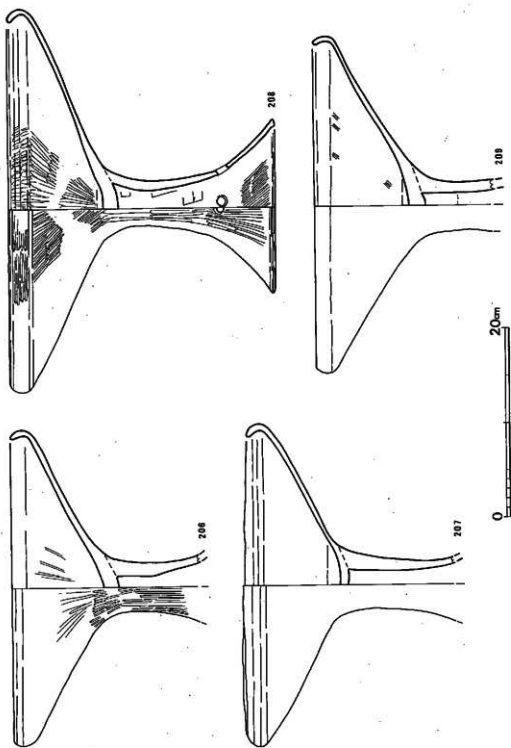
調整手法は手捏れものが指ナデ仕上げ、他は内外とも刷毛のもの(158)、外面刷毛、内面ナデのもの(161・171)、内外ともナデ仕上げのもの(159・172)、外面へら削り、内面ナデのもの(175)、内外ともへら磨きで仕上げたもの(162-164・176)などがある。また、173のように刷毛のあと、外面をへら磨きで仕上げたものや外面下半をへら削りした174のようなものもある。179は浅い坏状をなす土器で、高坏の坏部の可能性もある。復原口径18.2cmを測る。

高坏 (180-231) 大きくは5種類に大別できる。①タイプは鋤先状口縁の中期の高坏(180)、②タイプは坏部外面に屈折線を有し、口縁部の立上りが立ち気味で、短かい坏部を有するもの(181-183)、③タイプは坏部口縁が強く袋状に内湾するもの(184-188・193-196・200-202・206-211)、④タイプは偏球形の体部をもつ無頸壺とも言える坏部を有するもの(213-216・218・219・221)、⑤タイプは底脚のもの(222-231)の5種類である。

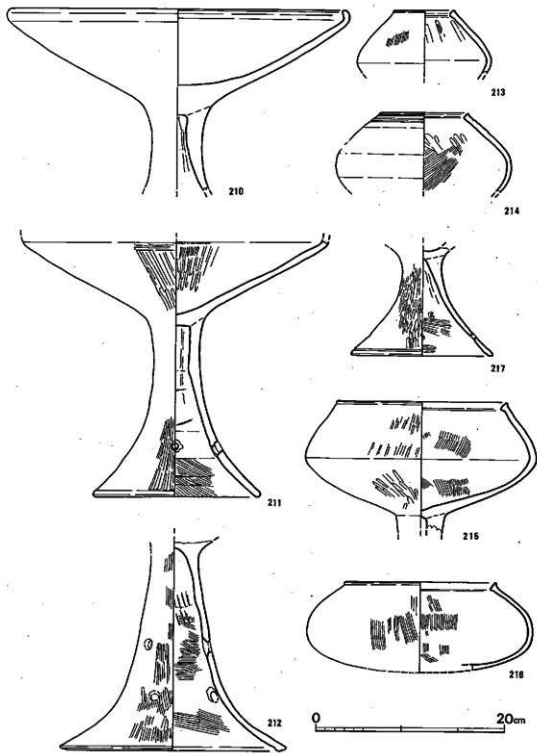
①タイプ(179)は北部九州の中期高坏の典型例で、調整は体部外面へら磨き、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は17.15cmを測る。

②タイプの181・182の口縁端部は平坦で、内外に揃み出し気味に仕上げている。181の端部上面と体部には2条の凹線文が巡っている。所謂、吉備系高坏の糸罫を引くものである。復原口径は180が38.8cm、181が24.2cm、182が31.7cm、器高24.5cm、裾部径20cmを測る。調整手法は180・181が器面の風化が著しく不明であるが、182は内外とも丁寧にへら磨きして仕上げている。

③タイプは短く内湾する口縁を有する豊前地方特有の高坏である。坏部の形状には大差ないが、脚部に若干の差異がみられる。裾部が内湾するもの(184・186・203・204)、直線的なもの(189-192・197-199・204・208・211・212)などである。また、212のように柱状部が僅かに膨み、小門孔が二段に穿たれた特異な脚部もある。調整手法は基本的に坏部内外及び脚部外面は丁寧にへら磨きで仕上げている。柱状部内面はへら削りのもの(183・184・186-189・191-201・203-208・210・211)、シボりのままのもの(191・203・210)があり、裾部内面は刷毛とナデを併用している。大きさにも若干の大小がある。184は坏部復原口径34cm、裾部径20.8cm、器高



第 335 圖 谷部出土弥生土器実測図④ (1/4)

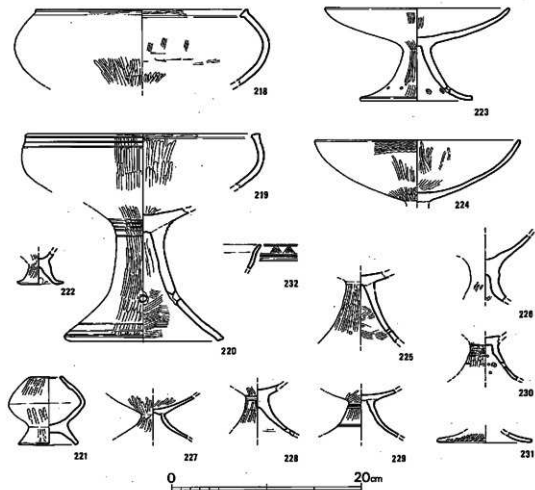


第 336 图 谷部出土弥生土器实测图④ (1/4)

26.8cm, 186は復原口径31.8cm, 裾部径20.3cm, 器高25.5cm, 187は口径32.8cm, 裾部径19.6cm, 器高25.2cm, 208は口径37.7cm, 裾部径17.1cm, 器高28.5cmを測る。193の外表面は二次加熱を受けたためか赤変している。

④タイプは、所謂偏球形の体部を有する無頸壺に脚部が付く豊前地方特有の高坏である。口縁端部は面を有し、内外に挿み出し気味に仕上げている。また、口縁下に1～3条の平行沈線を巡らしたもの(214・218・219)もある。全形を知る資料はないが、217・220などの柱状部が少し短かくラップ状に開く脚部が付くものと思われる。220の脚部は柱状部上端に4条、裾部に3条の平行沈線を巡らした資料である。

調整手法は体部外面を刷毛の後ナデで仕上げたもの(213), 刷毛のあとへラ磨きで仕上げた



第337図 谷部出土弥生土器実測図④(1/4)

もの(215~219)、内面はナデと刷毛を併用したものが多く、218・219のようにへら磨きで仕上げた作りの良い土器もある。脚部は外面へら磨き、内面は刷毛とナデを併用している。大きさにも大小あり、口径は213が6.6cm、215が17.9cm、219が25.6cmを測る。また、221のようにミニチュア化した高坏もある。口径3.4cm、器高6.1cmを測る。

⑤タイプは全形を知り得るものが少ないので、低脚の高坏として一括した。223が全形が判る高坏で、浅い坏部にラッパ状に開く短い脚部が付くものである。224と同様のもので、坏部外面上端には髹描きの波状文が施されている。225~231は脚部の資料で、坏部は223・224のような浅い坏部が付く高坏と思われる。228~230の柱状部には数条の平行沈線が巡り、229・230は上下二段に施されている。231は裾部の小破片で、裾端部には刺突文がみられる。

232も小破片のため明確ではないが、高坏の坏部の資料かも知れない。口縁部外面にはへら磨きの鋸歯文とその下に4条の平行沈線文が巡る土器で、鋸歯文が多用された吉備系土器との係わりが考えられる。223は坏部径19cm、裾部径11.6cm、器高10cmを測る。調整手法は基本的に坏部内外と脚部外面はへら磨きで仕上げている。脚部内面はナデのものが多い。裾部内外はヨコナデ仕上げである。

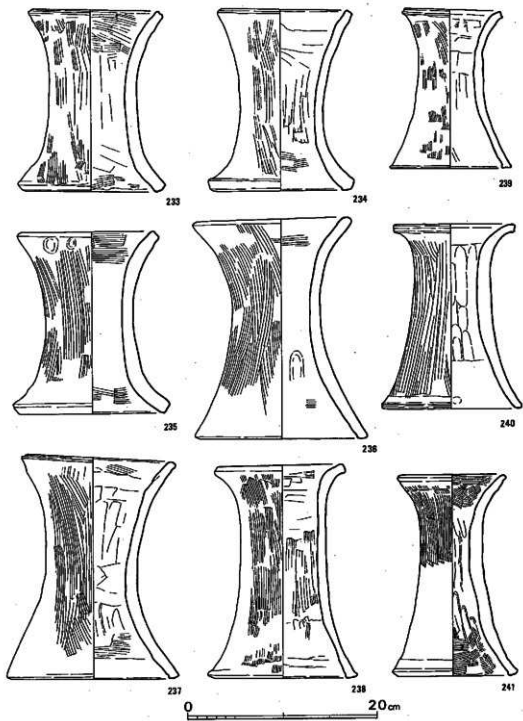
器台(233~256)大きく4種類に大別できる。①タイプの器台は、北部九州で通有の筒状の器台(233~245)、②タイプは器受部にU字状の切込みをもつ器台(246~252)、③タイプは器受端部を肥厚させ、端部外面に竹管文を施した器台(253)、④タイプは器受部口縁が垂下する器台(254・255)など4種類がある。

①タイプの器台には、器受部と裾部がほぼ同じ筒状のもの(233~238)、器受部より裾部が広いもの(239~244)、器受部との裾部が大きく開く特異なもの(245)などがある。調整手法は基本的に外面を刷毛、内面は刷毛とナデの併用が多い。器受部・裾部内外はヨコナデで仕上げている。

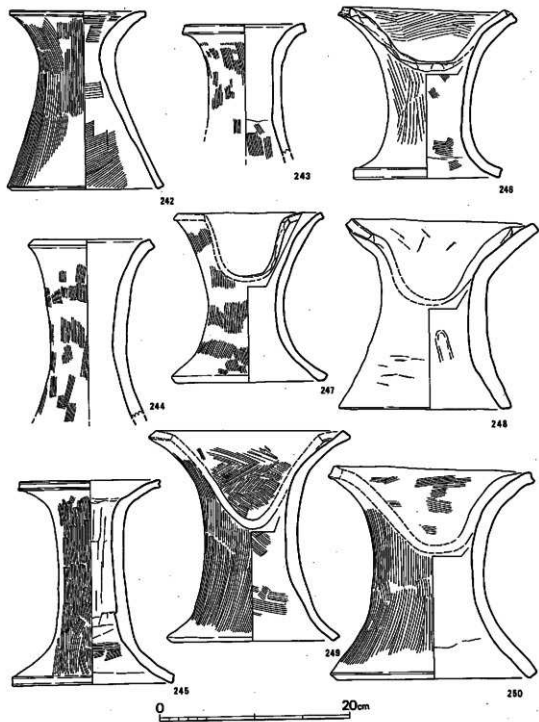
②タイプの器受部にU字状の切込みをもつ器台は、豊前から周防灘沿岸に主に分布するこの地方特有の器台である。大小あり、247は器受部復原径16cm、裾部径16.5cm、器高17.6cm、252は器受部径23cm、裾部径21.1cm、器高24.7cmを測る。調整手法は外面刷毛、内面刷毛とナデの併用、器受部・裾部内外はヨコナデで仕上げている。しかし、248のように内外ともナデで仕上げたものもある。

③タイプの器台は器受部付近の破片のため、全形は知り得ないが、鼓形をなす器台であろう。復原器受部径22cmを測る。

④タイプは器受部口縁外面が垂下したもので、体部中位に4条の沈線文が巡り、体部下半には5個の小円孔が穿たれている。類似する資料としては吉備地方などに求められるかもしれない。調整は体部丁寧なタテへら磨き、内面はナデと刷毛の併用、器受部と裾部は内外ともヨコナデで仕上げている。器受部径21.4cm、裾部径20cm、器高20.7cmを測る。

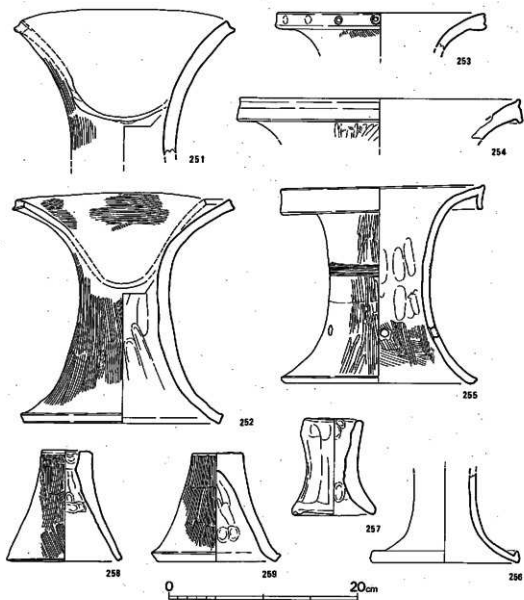


第 338 图 谷部出土弥生土器实测图④ (1/4)



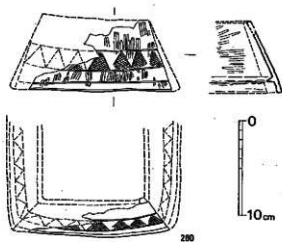
第 339 图 谷部出土弥生土器实测图⑨ (1/4)

支脚 (257~259) 257は筒状の支脚で、内外ともナデで仕上げている。258・259は小型の蓋状を呈する支脚で、258の天井部には円孔が空いている。調整手法は体部外面細かい刷毛、内面は指頭ナデで仕上げている。



第340図 谷部出土弥生土器実測図㊸ (1/4)

特殊土器(260)破片資料であるため、明確なことは言えないが、台形の箱形をなす土器と思われる。内面下端付近には突帯が残っていて、その下端は剝離したような痕跡があり、底板があった可能性もある。上部部は隅付近を僅かに残すだけであるが完結している。体部外面にはへら描きの沈線が3条巡り、上の沈線間には鋸歯文が描かれている。鋸歯文内はへら描きの斜格子文で埋められている。外面は丁寧なへら磨きで仕上げた後に、線刻している。内面は粗い刷毛調整のままである。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。残存する裾部幅15.1cm、器高7.3cmを測る。



第341図 谷部出土弥生土器実測図⑧(1/4)

このような箱状をなす土器については、類例をあまり知らないが、三輪町大竹遺跡出土の芥当箱を思わせる箱形土器が現在知られるものの中で最も近い資料であろう。本資料に底板があったとしても形状は極めて異なり、如何なるものか、ますます判らない。家形土器の一部とも考えられない訳でもないが、一部であるが上部部が完結しているので、屋根等は別個体という不自然なことになってしまう。類例のない現状では不明と目わざるを得ないだろう。

以上、谷部から廃棄されたような状態で多量に出土した土器群をみてきたが、必ずしも一時期のものでないことが明らかになった。古い時期のものとしては、壺(51・52)や高坏(180)などが示す中期後半から、新しい時期のものとしては壺(68・71・73・75)などに示される後期後葉までの土器群が含まれていることになる。しかし、その主体となる時期は、後期前半から後半にかけての時期である。

また、壺や甕の内面へら削り技法の多用、壺や大型甕の口縁端部に施された凹線文、頸部に多条の凹線文を巡らした上東式系壺、二条の凸帯間にS字状貼付文や紐状貼付文を付した壺の胴部破片、口縁端部と体部外面に2条の沈線文を施した高坏、低脚の高坏で、脚部に数条の沈線文を巡らしたもの、沈線と鋸歯文帯で飾った箱形の特殊土器などは、何れも既に触れてきたように吉備地方を中心とした地域との深い係わりの中で、将来されたり、生成されたりした土器群と思われる。このように多くの吉備系ないしは影響を受けた土器群の存在は、瀬戸内海に面した地理的位置にある豊前地方の特性を物語っている。それはまた、その後の畿内文化流入の窓口ともなり、北部九州における重要な拠点基地としての役割を果たしていくのである。(井上)

(9) その他の遺構と遺物

ここでは、その他の遺構として旧河道、ピット及び遺構検出面出土の土器を取り上げる。また、土器以外の遺物は、第3節の「遺物各説」で一括してふれる。

1. 旧河道 (第302・342図)

調査区の北端から北西部にかけて、現在の城井川が往時に氾濫して形成した河道と思われる部分が存した。この基盤は礫層であり、その上に砂層や砂礫層が堆積している。幅は20m程で深さはそれ程ない。ここが確實に河道であったか断言はできないが、特に北西岸などは波打ち際的なり方を示しているのので、ここでは旧河道として報告する。長さ100mを検出している。この旧河道も一時期のものでなく、数回の形成があったようである。

この旧河道の北西岸寄りに形成された灰褐色砂礫層 (①層) の中から多量の土器が出土しており、特に焼塩土器片の多さには目を見張るものがある。他の土器も含めて、これらの遺物を使用していた集落主体は、出土地点よりもやや上流側、西南方にあったと考えたい。

出土土器 (図版169-2, 第343~345図)

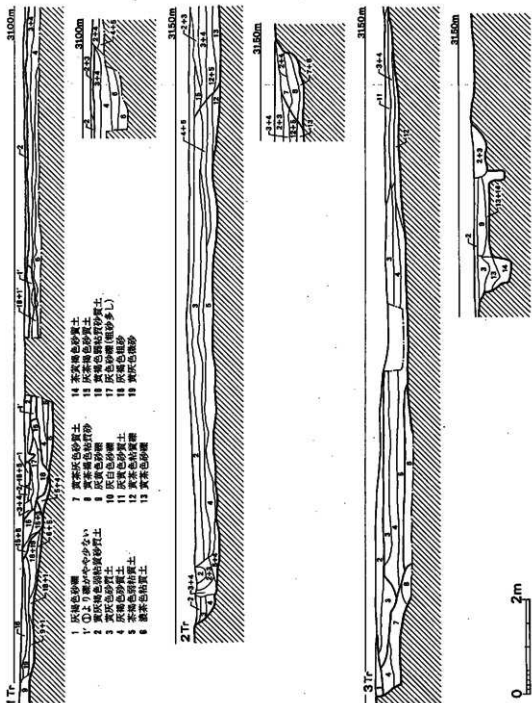
多量にある中で須恵器33点、土師器15点を図示する。緑釉陶器等の特殊なものについては別項にて述べる。時期的にはかなり幅があり、6世紀後半~9世紀後半代または10世紀前半代までという期間の土器がある。その中で主体となるのは、8世紀後半代としてよい。

出土層位は大半が灰褐色砂礫層 (①層) であり、3・16・20が黄灰褐色弱粘質砂質土 (②層)、6・25・40が灰茶褐色砂質土 (⑨層) からの出土である。

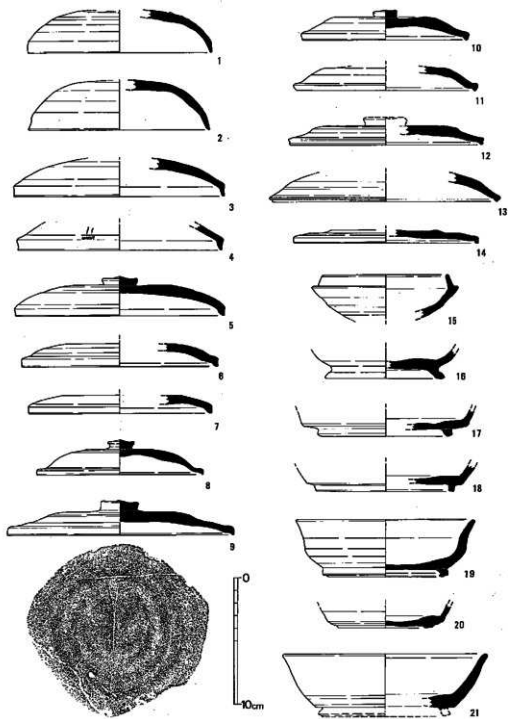
須恵器 (1~33) 蓋・坏・碗・壺・甕がある。1・2は6世紀代の蓋で、2の口径14.3cm。3~14は身を受ける部分の付く蓋である。3・4は復原した口径が異なるけれども同一個体かもしれない。口縁内面が同心円状に灰被りが一周しているのは、この蓋を逆にしてその上に身を倒立で置いて焼いた結果であろう。5の復原口径は16.4cm。

8も3・4と同様の焼成法と思われる。口径は13.1cm。9は完形に近く、口径18cm。内天井部にT字形のへら記号がある。10は2/3を残す破片であるが、その断面には擦り切っている所があり、破損後にも何か使用されたことが判る。12はかなり扁平で、口唇部が沈線状に窪む。14は扁平なうえに口唇部が極めて特徴的である。口径14.4cm。

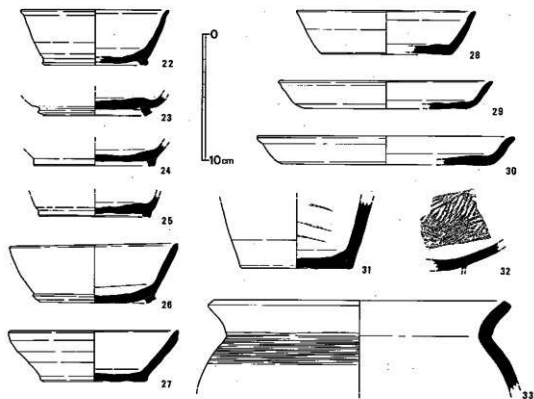
15は6世紀後半代の坏身で、口径10cm。16は高台が高くて外へ踏ん張った形状をなす。17・18は体部が明瞭な稜をもって屈折して立上る器形をなし、特徴的である。17は胎土も通常のも



第 342 図 旧河道土層断面概略図 (1/80)



第 343 图 旧河道出土土器夹河图① (1/3)



第344図 旧河遺出土土器実測図② (1/3)

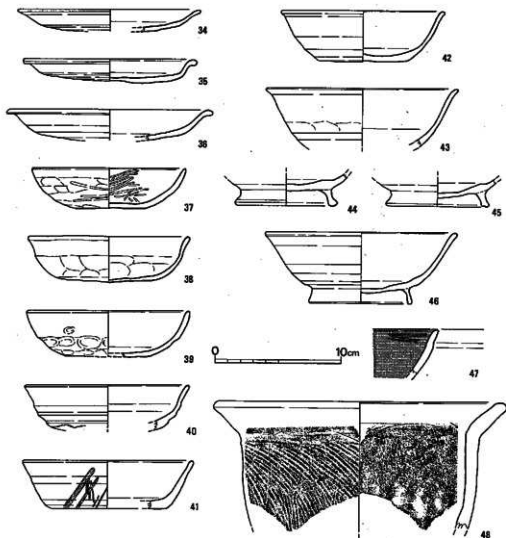
のと異なる。19は体部が丸みをもち、途中で屈折して外反するという特徴をもつ。極めて良質であり、内面は白灰色に黒い小粒子が目立つが、外面は灰黒色で黒光りし、釉を意識して掛けられているようにも見える。灰釉陶器としてよいのかもしれない。口径14cm、底径9.8cm、器高4.5cm。20はかなり低い高台が付く。22の器形はスマートだが粘土は粗い。口径11.8cm。25はやや瓦質に近い焼きである。26は作りも粗いし、焼成も歪みが大きい。

27・28は高台の付かない坏で、27は底部周縁が高台を意識したかのように少し高くなっている。口縁部は少し内湾気味である。口径13.6cm、底径8.4cm、器高4cm。28は口縁内面に浅い段が付く。口径14cm、器高3.5cm。29・30はともに良質の土器で、皿になる。

31は壺だろう。土師質に近い焼成である。二次火熱を受けている。底径8.8cm。32は器形のない土器である。内面には平行タタキの上に布目痕があり、外面は灰披りでよくわからないがナアらしい。外面に突帯状のものがある。33は焼成のややあまい甕で、肩部にカキ日が施される。口径24cm。

土師器 (34~48) 34~36は皿で、共に硬質である。34の内底面にはナアの指紋がみえる。口径14.3cm。35は口縁が玉縁状に丸くなる。口径13.6cm。36も口縁端がかなり外反している。口径16.2cm。

37~42は坏で、これらも共に硬質である。37~39は外面に指頭の痕跡を留める。特に39は著しい。37の口径12.2cm。40は体部に凹凸がある。41の体部外面には蕁の様な植物質の茎等が炭化したものが圧痕風に付着している。これは、この土器を焼成するときに付着したものだらう。



第345図 旧河道出土土器実測図③ (1/3)

口径13.6cm。42の底部と体部下半は回転ヘラケズリである。口径13cm, 底径7cm, 器高4cm。

43~46は椀で、これらも全て硬質である。高台は高く、外へ踏ん張った形状をなす。46の高台は細い。46が口径15.3cm, 高台径8.2cm, 器高5.5cm。

48は甕であり、殆ど張らない胴部にくの字に屈折する口縁が付く。口唇上面には幅5mm程の面をつくり、その内側はかなり窪んでいる。内面の口縁と胴部の境には稜がつく。胴部内面はハケ目の上をナデでいて、ハケ目は殆ど残らない。口縁の外側は少し膨らみがあり、その下の屈折部は強いヨコナデを行なう。胴部外面はタタキと見まがうほどの粗々しいハケ目が右斜め方向に施される。復原口径22.8cm。北九州市勝田遺跡で多数出土している甕と同形態である。

内黒土器 (47) 47の内面は横方向のミガキ、外面は口縁直下に僅かな段がつく。

2. ビット

赤橋森ケ坪遺跡では2000個を越すビットが検出され、幾つかは掘立柱建物跡の柱穴として捉えられるが、大多数はまとまりのないままである。それらビットの中から図化する土器が出土しているので、その一部を図示する。なお、ビット番号をそのまま使用する。

出土土器 (図版169-3・170・171, 第285・346・347図)

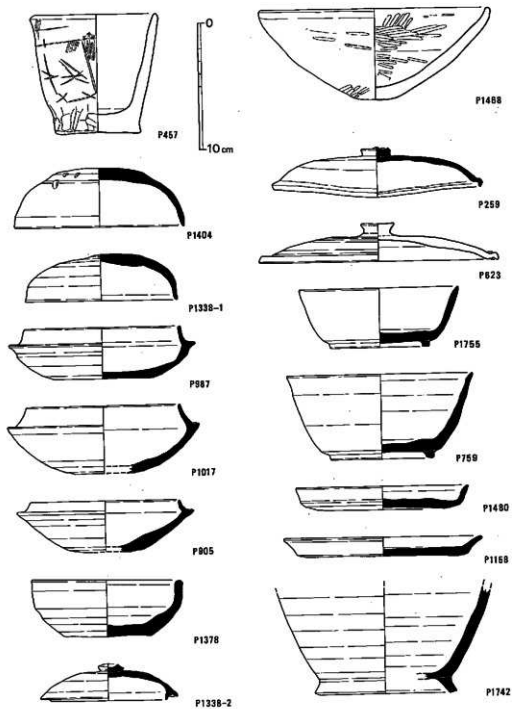
弥生土器 (第285・346図) 第285図P1791は前期後半~末の甕である。口唇外端の刻目はヘラ先にて施される。また、その内面は少し窪んでいて、所謂跳上げ口縁のはしりともいえる形状を示す。肩部の浅い沈線は植物質原体で施している。口径25.4cm。

P457は前期の鉢である。外面にはヘラ先で刻まれた傷跡が多数ある。口径9.5cm, 底径6.6cm, 器高9.2cm。P1468は後期の鉢で、鉄鉢形に近い。外面は平行タタキの上にミガキを施している。内面はミガキとナデである。復原口径17.9cm, 器高7.1cm。

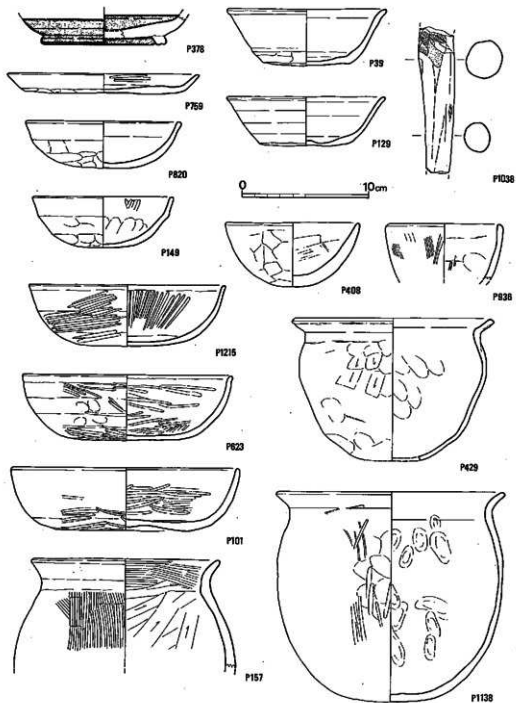
須恵器 (第286・346図) 15点を図示する。6世紀中葉~8世紀末までの坏蓋・坏身・椀・皿・壺がある。以下は、特徴的な点のみ取り挙げることとする。

第286図P1351は肩部に退化した耳を付す壺である。P1404の外天井部には葉の様な植物の茎の圧痕がある。口径13.3cm。P987の坏は底部をヘラケズリによって平らにしている。口唇内面には稜がつく。P1017は深みのある器形をなす。口径12cm。P1378は平底の分厚くて粗々しいつくりの坏である。完形に近い。口径11.8cm。

P259は歪みの著しい壺である。焼成時には裏返しにして椀に蓋をする格好で窯に入れたことが灰被りのあり方によってわかる。内天井部に直径10cm程の灰を被らない部分がある。P1755は見た目はスマートだが、つくりは粗い。口径12.6cm。P1158は体部の外反度が強い。口径15.2cm。P1742は長頸壺であろう。



第346図 ビット出土土器実測図①(1/3)



第 347 図 ビット出土土器実測図② (1/3)

土器（第347図）15点を図示する。こちらは6世紀代から12～13世紀代までのものを含む。P378は須恵器模倣の椀で、内外とも丹塗りである。高台畳付には浅い沈線が入る。復原底径10cm。P759の胎土は良質だがつくりは粗い。口径15cm。P820は完形品で、化粧土をかけているがつくりは粗い。口径12.2cm、器高3.7cm。P149は外面に押えの痕が著しく、シワのようなヒビが入っている。

P39は粗製の坏で、角閃石を多量に含む。P129は精製品である。完形で口径12.5cm、底径7cm、器高3.8cm。少し歪んでいる。P101・623・1215は共に内外ともヘラミガキを施した椀で、精製品である。P101の口径17.6cm。P408の小さな椀のつくりは粗い。P936はあるいは製塩関係の土器かもしれない。口径8.6cm。P1138の甕は角閃石を多量に含むため器表面がキラキラしている口径17.5cm。器高16.5cm。P1038は足釜の脚である。

3. 遺構検出面出土土器（図版172～176、第348～352図）

遺構が密集している所、例えば5～7号竪穴や13～15号住居跡の周辺、あるいは74～79号住居跡等が存する周辺において、個々のプランを確認しようとしている時に、重複した遺構の上面にて出土した場合、または遺構上面でなくとも土器が存した場合に、番号を付けて取り上げておいた。それが1～527の数にも及んでいる。それらの中には、本来どの遺構かに伴っていたものも必ず含まれているはずであるが、ここではそれら全体を遺構検出面の土器として報告する。また、緑釉陶器や焼塩土器、石器等の特殊な製品は別項で説明する。

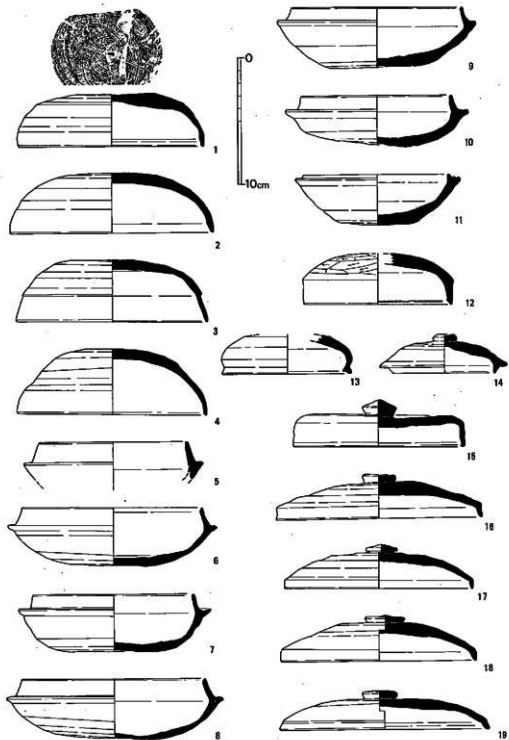
なお、採集した場所については、特別な場合以外には触れない。主に調査区中央付近からと考えて大過ない。

須恵器（1～41）1～4は坏蓋である。1は口唇部内面に緩やかな段を有し、天井部はかなり分厚くなる。外天井部は雄な回転ヘラケズリを施して平坦面をつくり、その上に×印のヘラ記号がある。口径14.7cm。2～4は天井部がかなり高くなる。3は天井部と体部との境に明瞭な段が付く。

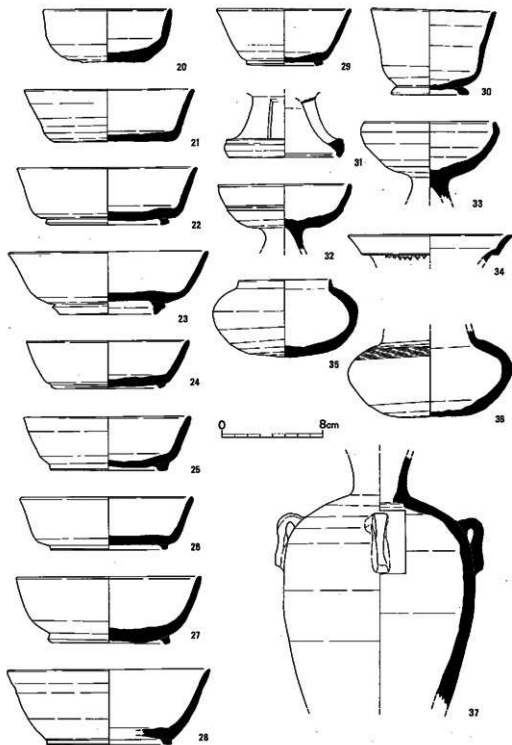
5～11は坏身で、5は小型で、立上りの割と高いものである。6の口唇部内面は斜めに下った所で緩い稜が入る。口径14.4cm。7は筒形に近い形状となるが、立上りはそれ程高くない。8は全体に薄手のつくりで、良質の土器である。口径14.5cm。9には受部に蓋をして焼成した痕跡がある。

10は完形品であるが、口縁端部には打欠きがある。口径12cm。11は焼成不良の製品で、口径11.7cm、器高3.9cm。

12～15は壺・甕等の蓋になろう。12は体部と天井部との境に明瞭な稜が入る。口唇部内面は



第 348 图 蓝釉被出面出土器类图① (1/3)



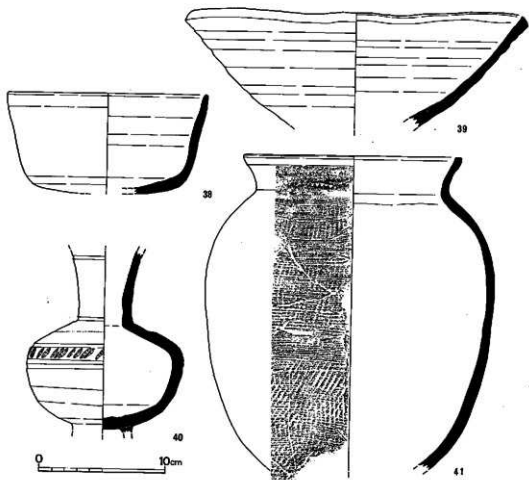
第 349 图 遼陽檢出而出土器実測図② (1/3)

少し窪んで、やはり稜が入る。外天井部は手持ちのヘラケズリを施す。口径11.5cm。13は埴の蓋であろう。口径10.1cm。14は鎌みをもつ壺で、口径8.1cm。15は宝珠形の撮みをもち、身受の立上りが高い蓋である。口径13.6cm。

16~19は高台付柄の壺であり、ほぼよく似た器体となる。16は天井部の器肉が厚い。17は撮みの形状に特色がある。18は外天井部が灰被りとなり、緑灰褐色をなす。口径15.3cm。19は口縁がやや外開きになる。

20・21は坏で、20はつくりが厚ぼったい。外底部はヘラ切り離しの後少しナデたのみである。口径10.2cm。21は口径13.3cm。これに高台が付けば22・26と同じである。

22~30は高台の付く柄である。22は口縁が少し外反するもので、畳付は内端部が接地する。口径14cm。23は体部が大きく外傾するタイプで、高台に最も特色がある。つくりは良い。口径



第350図 遺構検出面出土土器実測図③ (1/3)

15.7cm, 底径7.6cm, 器高5cm。24は高台が低い。口径12.9cm。25の高台はかなり太めである。口径13.1cm。26はスマートな器形をなす。口径13.6cm。27の体部はかなり丸みを持ち、底部の厚さは異常なほどである。ミガキとナデによって器表面を平滑にしている。28は深みのあるタイプで、体部外面には墨と思われる黒いものが付着している(図版179-2下)。口径16cm。29は深みはあるが小さな器体をなす。口径10.5cm, 底径6cm, 器高4.5cm。30はかなりの深さをもつもので、体部中位で緩く屈曲している。口径9.6cm, 底径6cm, 器高6.7cm。

31-33は高坏である。31は3ヶ所に長方形の透孔をもつ脚部で、古式の様相を留めている。裾部径8.8cm。32は体部と口縁部の境に段がつき、口縁は僅かながら内湾するという器形をなす。口径10.5cm。33の坏部は内湾しつつ開き、口縁部に至って内傾するという特異な形態をとる。口径10.5cm。

34はの口縁部で、口唇部上端は僅かに窪んでいる。頸部に波状文が入るが、その上端部しか見えない。口径12.8cm。

35・36は埴である。ともに胴部の張った器形で、35は口径7.4cm, 器高6.1cm。蓋を被せて焼成した痕跡がある。36は肩部にカキ目を持ち、口頸部はやや内傾気味に立上る。35よりも胴部が偏平になる。胴部径13cm。

37は双耳壺である。肩部が少し張った長胴の器体に細長い頸が付く。肩部下位の耳は長さが4.5cmあり、その上半に孔を持つ。この耳は左右対称の位置にはない。胴部径14.8cm。

38は筥形の鉢であり、体部中位で一度緩やかに屈折する。口径16cm。

39は大形の摺鉢の器形をとる鉢である。口縁は肥厚こそしないが断面三角形になり、体部は回転ナデの時の指押えの強弱による凹凸が見られる。内面に跡目はない。2/5程の残存で、そこに片口は見られない。口径27.2cm。

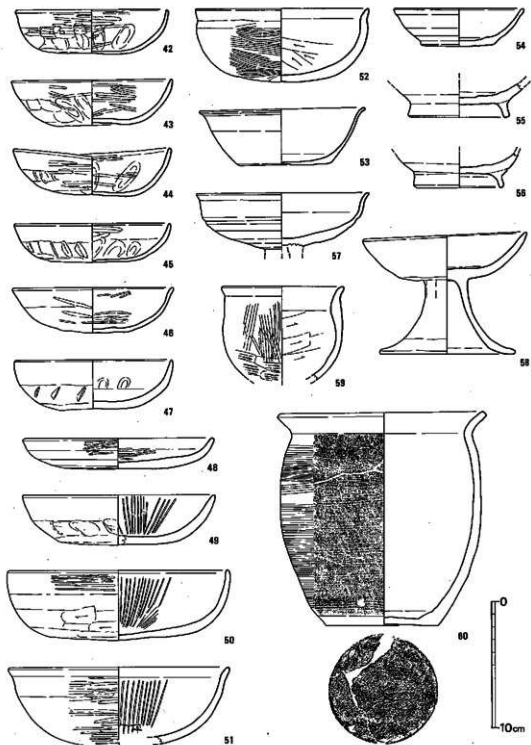
40は脚台の付く長頸壺である。脚台は欠失するが、透孔が三方に入ることは判る。胴部はやや偏平気味で、中央部に浅い沈線が入り、その上に刺突文がある。最大径12.5cm。頸部は5.5cmまで残存するが、もうさほど伸びないだろう。41は長胴の壺形として良いような甕で、胴部外面は平行タタキの後にカキ目を施している。内面は当具痕をナデ消す。口径17.1cm, 胴部径22.7cm。

土師器(42-65) 42-46は薄手のつくりの坏で、基本的に外面はヘラケズリの後ミガキ、内面はナデの後にミガキを施している。42-44は化粧土を掛けている。42は口径12cm, 器高3.3cm。46は外底部に植物繊維の圧痕が多数見られる。

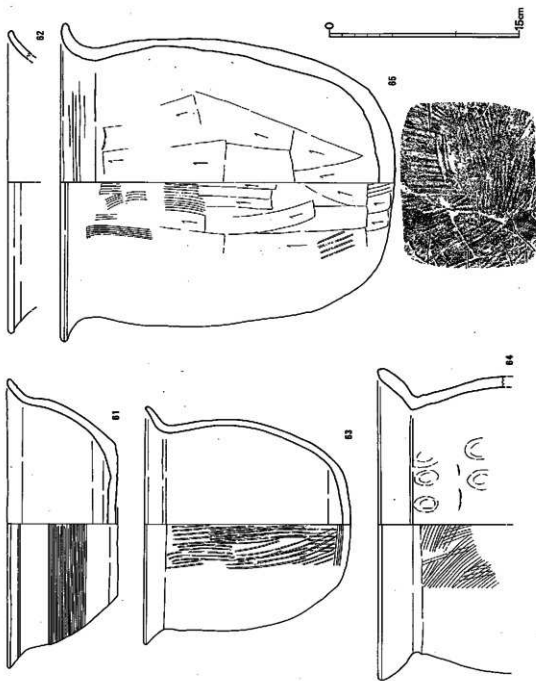
47はやや厚手の坏で、体部外面にはヘラ先でケズリを行った痕が見える。口径12.5cm。

48は皿とすべきもので、外底部は回転ヘラケズリの後ミガキを行い、その他は内外ともにヘラミガキを施す。

49-54のうち51・52については碗とすべきかもしれないが、他は坏でよいだろう。49-51は



第 351 图 遗構検出面出土土器実測図④ (1/3)



第 352 图 道格坎出面出土器类图⑤ (1/3)

内面に放射状のミガキを暗文として施している。49の口径は15.2cm。50は体部が内湾しつつ立上っており、口径17.5cm、器高5.5cm。51は口縁が外反し、外面にケズリは行わない。52は赤褐色粒子を多く含むもので、内面はケズリを行なっている。口径13.6cm、器高5.6cm。

53は極めて薄くスマートなつくりであり、軽量である。内湾気味の体部から口縁のみは外反する。化粧土を掛けている。口径12.9cm、底径7.4cm、器高4.4cm。54は小型の坏で、精製品である。ヘラ切磨しの底部外端は高台風に少し高くなる。口径12.3cm、底径5.8cm、器高3cm。

55・56は高台の付く柄で、55の方がやや外開きに高台を付している。ともに硬質の精良な土器である。55の高台径8cm、56は7cm。

57・58は高坏であるが、坏部の形状は両者異なっている。57は体部と口縁部の境に沈線風の窪みを作って段とし、両者をはっきりと分けている。口縁端部は外反する。精良な土器である。口径13.6cm。58はシンプルな感じの形状であるが、坏部は歪んでいる。坏部は平らな底体部からやや内湾気味に外へ開いただけで、途中の屈折等はない。口径13cm、裾部径10.8cm。

59は小型の甕で、口径9.6cm。60は平底の甕で、底部外面は板目疔痕の上をナデ、体部最下部にヘラケズリを行う。胴部はカキ目である。口径16.3cm、底径8.8cm、器高16.6cm。

61の器形は鉢だが、つくりと調整は60と同一である。砂粒が極めて多く、角閃石を含んでいる。口径22.5cm、底径11.8cm、器高8.7cm。62は口縁部のみの破片だが、胎土・つくりが61と同じであるから同様の器種であろう。

63・64は甕で、63の口唇部は丸くなり、内面に段を有する。体部外面は極めて粗いハケ目を施す。口径18.9cm。64は大型で、内面のケズリは全面に行うものの胴部下半～底部にかけては不十分であって器胎が分厚い。外面は底部周辺は粗いハケ目を残したままで、胴部になると板状の工具による擦過を行っている。口縁は大きなカーブを描きながら外反する。口径24.9cm、器高26.5cm。

65はくの字口縁の甕で、口縁内面は内湾している。胴部外面は極めて粗いハケ目を施す。1/5残の破片で、口径24.8cmに復される。

(伊崎)

註1 宇野慎敏 「仮称勝円式土器小考」『横山浩一先生退官記念論文集I』 1989

3. 遺物各説

前項では土器しかふれなかったが、ここでは、緑釉陶器・灰釉陶器・焼塩土器等の特殊遺物及び土製品・石器・鉄器等の出土遺物を一括して説明する。

緑釉陶器（図版177・178，第353図）

20点が出土した。ただ、緑釉は掛かっていないが、素地の可能性を示すものとして2点があるので、これを加えると22点となる。以下、まず1～20の資料について総体として把握しうる特徴を示し、21・22は後述する。

胎土については微砂粒を含むものの、総じて良質である。但し精選されたという程のものではない。8・14は他と比して砂粒が多く粗い胎土である。胎そのものは白灰色・黄灰色をなす。焼成は例外を除いてやや軟質としてよい。全てが土師質であって須恵質のものはなかった。その中で18のみは胎土の一部が灰褐色に変じており半須恵質と称しうるものである。4と13は他より硬質となっている。

釉は黄緑灰色・黄緑色・緑黄色という大別3種類程の釉調を示しており、淡い薄緑色のものが多い。それらは薄く掛けられていて、剥落したものが大半である。口縁内側に釉溜りをもつ例（4・5・11）もある。1・3はむしろ黄釉としてよいほどに淡い黄緑色をなし、互いによく似る。2・15・16・19は緑色の発色がよく、2・16については同一個体かもしれない。また4と13は内面が緑黄色、外面が黄緑色で、この2点も同一個体の可能性がある。

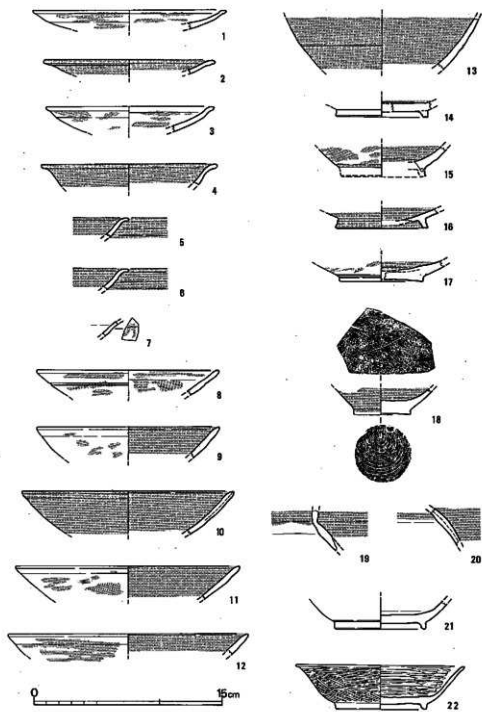
調整については、磨滅したものが多くてよくわからないが、内外にヘラミガキが明瞭に見えるものは確認しえない。むしろナデ、回転ナデが主体のようである。18の外底面は糸切り痕が明瞭であり、内底面には×印のヘラ記号が植物質原体によって施されている。

成形は基本的には巻上げ水ヒキ法と思われるが、10・17・20の断面には薄い粘度板を貼り合せた接ぎ目が見えている。これが特殊であるのか否かわからない。器形としては、皿・碗・壺が認められるが、小破片にて何れとも決し難いものもある。口縁は外反するものと直口のものとがあり、底部は削り出し高台と付け高台のものがある。

18は耳皿になる可能性もある。この18は、内底面に黄色い斑模様も見えるので、或は単彩ではないのかもしれない。

18を除いて全て復原図であるが、小破片であるゆえ、その径などに信頼性の低いものもある。大きめの破片では、口径は1が15.4cm，10が16.6cm，底径は16が7.3cm，17が6.6cmを測る。

出土位置は大半が旧河道の第1層であり（1・5・6・9～12・14・17・20）、遺構検出面でまとめて取上げたものもある（2・3・7・8・16）。その他は、4と13が2号溝、18は37号土壌、15がP1306，19がP714からの出土である。



第 353 圖 綠釉陶器実測圖 (1/3)

21は灰黒褐色の須恵質に近い胎に白色の化粧土を塗り込めて、その上に透明釉が掛かっているような感のある土器である。白色の上に部分的に紫色を呈する所があり、これが本来の釉の変化したものであれば灰釉陶器に見られるそれと近い。器形的には緑釉陶器の碗とあまり変わらないが、微妙な差異はあるようだ。2/3を残す破片にしては重量感がある。高台7.2cm。いまは灰釉陶器（白瓷）の可能性もあるものとしておきたい。北端部④層出土。

22も器形としては緑釉陶器のそれとしてよいが、釉は全く掛かっていない。1～20までの緑釉陶器と比べると、砂粒がかなり目立ち粗い感じがするものの、胎土全体としてはかなり緻密であって硬質の焼成である。また、体部は内外ともに幅の狭い密なミガキが施される。胎土は白く、その上に白い化粧土をかけている。ほぼ完形に近く、口径13.3cm、高台径7.2cm、器高3.5cmを測る。旧河道H区①層の出土。

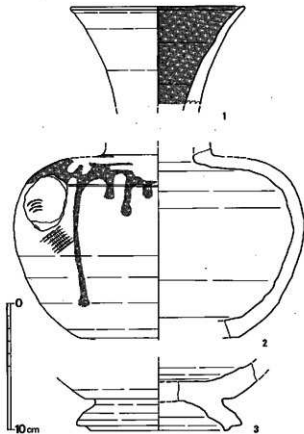
灰釉陶器（図版179-1、第354図）

調査区北端に近く、2・3号竪穴の西北方12m程の所で出土した3点を図示する。この出土位置は、旧河道の東岸に近く、礫層中に掘り込まれたピットのすぐ横であった。

1～3ともに器内の厚い資料で、3点ともに接合はしない。2・3は胎土・調整ともほぼ同じなので同一個体と考えられるが、図上の復原もうまくいかないゆえ別々に掲げる。

1は口頸部片で、淡い紫色を帯びた灰褐色の緻密な胎土をなす。焼成は堅緻。外面は灰褐色の地肌に薄く灰被りの状態だが、内面は緑灰色の釉が掛かる。また、窩体の一部かと思える異物が釉の上面に付着している。1/2残存にて口径は13.8cmに復される。2・3とは別の長頸壺になるものとする。

2は3を底部とする短頸壺になろう。胴部はやや偏平気味の肩の張っ



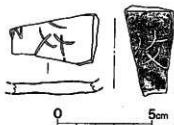
第354図 灰釉陶器実測図(1/3)

た球形をなし、器内の厚い割には重量感がない。肩部に緑黄色釉が掛けられ、その一部は胴下半にまで垂下し、見た目に美的である。肩部の器表面はその釉ごとかなりの部分が剝離しているが、これは意図的になされたものようである。胴部外面には同心円当具痕の見える別個体の破片が融着したままであり、その下位にはおぼろげながらも平行クタクキの痕が窺える。約1/2の残存で、胴部径22.6cmを測る。

3は高台部分で、外側へ大きく踏ん張っている。総体に分厚い。内底面には黄緑色釉が溜っている。胎土は2も同じだが少し粗さのある灰褐色をなす。裾部径は10.5cm。2と3を合せれば総高18.5cmくらいになろう。1～3ともに器表面に黒色微粒子の小さな斑点が多数見える。これは高火度焼成の故に、胎土中の鉱物が溶け出してこのように表出しているものと思われる。

文字資料土器 (図版179-2, 第355図)

6号竪穴、15・23号住居跡、18号土壌と重複して検出されたP76から出土した須恵器の坏か皿の破片である。その内底面にヘラ描きで二文字分が見えている。上の文字は偏がよく判らないが「い」の可能性もある。旁は女であろうが、筆順がくノ一の順になっていない。「い」に女ならば「汝」となる。下の方にも字面の一部が見えているが、「乙」の部分のみであって全体はわからない。



第355図 文字資料土器実測図 (1/2)

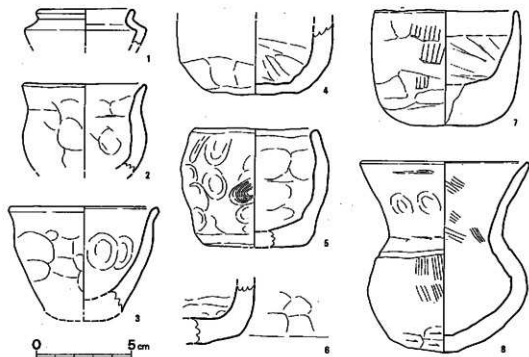
須恵器は胎土良質であるも焼成はややあまく、紫灰色を呈している。残存の内外ともにナデ調整である。8世紀のものとするに異論はなく、その中葉か後半代のものとしておきたい。

小形土器 (第356図)

手捏ねのミニチュア土器とするには大きく、通常の土器とするには小さすぎる形状のものを取上げたが、その判断には恣意的なところもある。とまれ、ミニチュア土器の大型版と捉えるか、全く別の用途のものとするかについては別の機会としたい。

1は旧河道①層の出土で、縄文晩期の浅鉢に見るような屈曲した口縁をもつ土器であり、土師器である。内外とも回転ナデ調整。復原で口径5cm。2はナデ痕を器表面によく留めるもので、変形になる。口径6.2cmに復される。80号住居跡からの出土。3は手捏ねの深鉢形で、口径7.6cm。化粧土を掛けた痕跡がある。遺構検出面採集。

4～7は直口の内湾気味の口縁となる鉢形の土器である。4は外底部に植物繊維の圧痕がある。39号住居跡出土。5は平底に近いもので、内外の指頭によるナデは強く、指紋のはっきり見える所がある。口径5.8cm。器高6.2cm。87号住居跡下層の出土。6は小破片で、外底部には



第356図 小形土器実測図 (1/2)

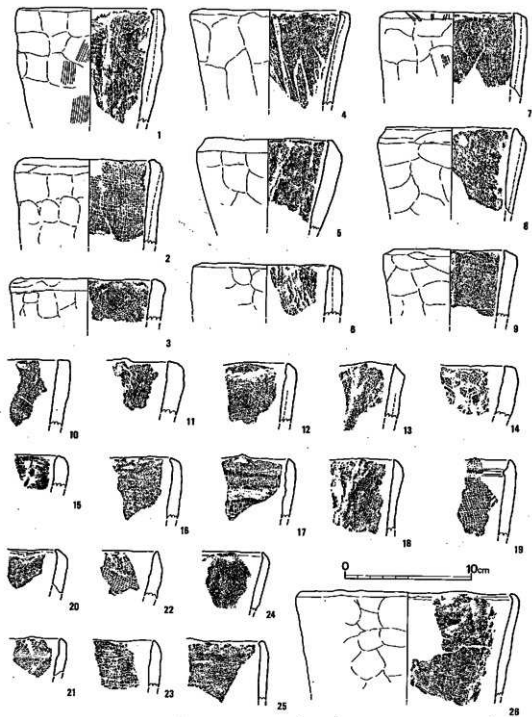
工具痕がある。53号住居跡出土。7は底部が極めて分厚い安定感のある土器で、外面は丹塗りの痕跡をみる。復原口径7.4cm。遺構検出面からの採集。

8は壺形の土師器で、外面に丹塗りの痕跡がある。胴部下半に黒斑があり、また肩部には浅い沈線が巡る。口径9cm、器高10cm。遺構検出面からの採集である。

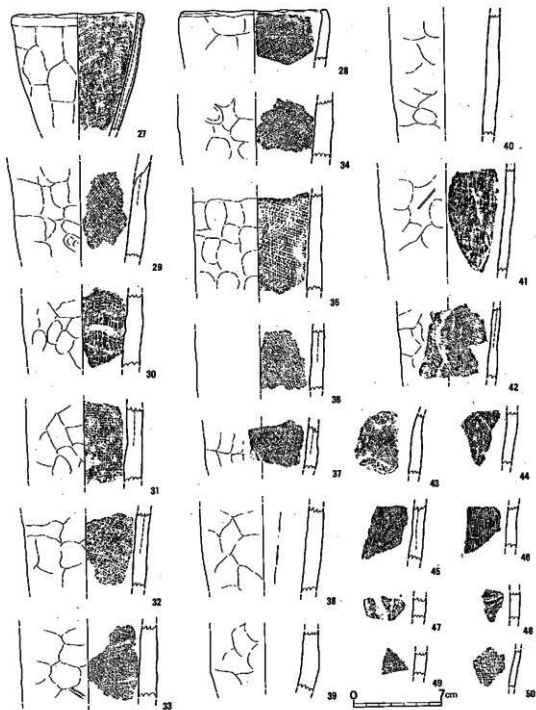
焼塩土器 (図版180～184, 第357～359図)

固形塩を得るための器とされているものである。固形塩の獲得のためのみか否かはさておいて、今次の調査における出土点数は1000点を優に越している。もとより完形品としては出土しにくい器物であるが、破片としての1000点以上はそのまま個体数としても1000点以上としてよいものと思われる。図示可能なものはそれ程多くはないが、75点を掲示する。

出土した位置については、旧河道の①層・灰褐色砂礫層とした層が最も多く、半数近くを占める。住居跡内出土も2割程度を占めている。図示したうちでは、5・44が4号住居跡、18・24・52が7号住居跡、26が46号住居跡、38・46・68が25号住居跡、45が83号住居跡、48・70が3B号住居跡、61が51号住居跡、73が100号住居跡、74は10号住居跡、75は15号住居跡からの出土である。



第 357 图 烧垆土器实验图① (1/3)



第 358 圖 瓮壇土器実測圖② (1/3)

当遺跡出土品は、器形としては大きく3つに分けられる(註1)。3類ともに胎土中に砂粒を多く含み、一見してそれと判るものが多い。また、等しく二次火熱を受けている。

I類(1~59)は、長胴・丸底で直口の形態をなすものである。完形ならば口径9.4~11cm、器高25cm程になるのだろう。器壁の厚み、つくりによって薄手の一群(24~27)とそれ以外とに細分も可能である。26はその薄手の一群の代表格だろう。殆ど全ての個体の内面には布目痕があり、それを見ないもの(38~40・53・55~59)については、磨滅したものとナデ消したものもあるらしい。基本的には土師器と同じ黄褐色で、中には二次火熱で赤桃色に変色したものや、青灰色の須恵質に変化したものがある。須恵質のもの(1・5・6・17・20・30・31・36)のうち特に5・6・31などは全てが青灰色であって、これらは二次火熱のみで変化したとは考え難い程のあり方を示している。

この類の成形の基本は、丸太状の棒のようなものに布を巻きつけ、その上に粘土を貼り付けるといものであるが、円周を8分割した単位で貼っている個体がいくつかあるようだ。また、単位内で二度三度と粘土を貼り合せた痕跡が断面にて窺える個体もある。布目には粗いものと細かいもの両者があり、布の接ぎ目が圧痕として表れている部分もある。

II類は尖底の鉢形をなすもので(60~66)、口縁の形状や調整によって細分ができる。布目をもたないもの(60~63)には、弧状圧痕があるものと、ナデのみのものがある。またこれらは粘土貼り合せの痕跡が窺える。口径は復原に不安定要素もあるが、60が11.6cm、61は9.6cm、62・63は10.8cm、64は10cm、66は10.7cmを測る。

III類は球形胴の碗形を呈する器形で(71~75)、大きさによって細分しうる。基本的に布目痕をもたないようなので、成形法がI・II類とは異なるのかもしれない。口径は71が11.6cm、73は7.8cm、74は3.6cmに復原される。74は球形胴の極めて小さなつくりであり、大きさからみて疑問もあったが、強く二次火熱を受けていること、内面の当具痕のあり方から焼塩用とした。

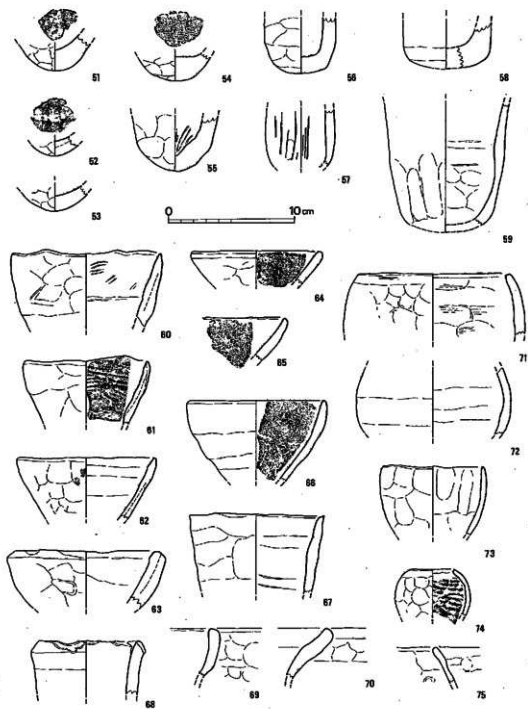
67~70はI・II類に含めて考えることもできるが、今は除外しておく。

註1

福岡県甘木市塔ノ上遺跡の報告の際に、住居跡・溝等から出土した焼塩土器を四類に分類したことがある。そのとき、今回報告のI類にあたるものは出土していない。沿海部と内陸部にある遺跡では土器組成にも異なった面が存するのだろう。森田勉氏の分類されたものも参照して、焼塩土器全般を分類・類型化できそうなので、機会をみて考えてみたい。

伊崎俊秋編 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-9-』 1987 福岡県教育委員会

森田 勉 『焼塩土器』『太宰府古文化論叢』 1983 吉川弘文館

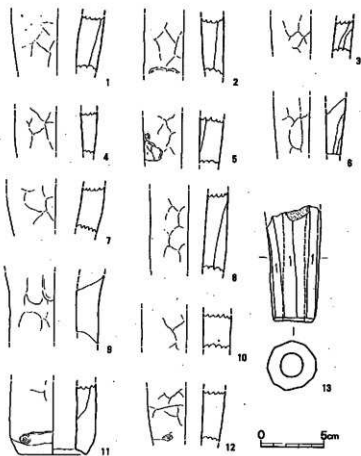


第 359 圖 燒塩土器実測図③ (1/3)

ファイゴ羽口 (図版179-3・184-2, 第360図)

2号鍛冶炉から出土した以外にも、遺構検出面等から出土したものがある。砂粒を多量に含んだ粗々しい胎土をなし、熱を受けた部分は紫灰褐色や灰青褐色に変色するが、もとは橙黄色を呈する。内外ともにナデにて調整しており、外面には押え痕がある。基本的に円筒形であるが、13のみは器表面の調整で削っているため10面体をなす。炉本体に挿入されていた部分には炉内の不純物が融着している。

1~12は外径6~7.8cm, 内径2.6~4cmを測り、大同小異の形態を示す。13は羽口であるか否かにとまどいもあったが、内面が煤けていることから羽口としておく。外径3.2~4.3cm, 内径は1.8cmである。1~6が2号鍛冶炉跡, 7が33号住居跡, 9~13は遺構検出面, 8は旧河道①層から出土した。



第360図 ファイゴ羽口実測図 (1/3)

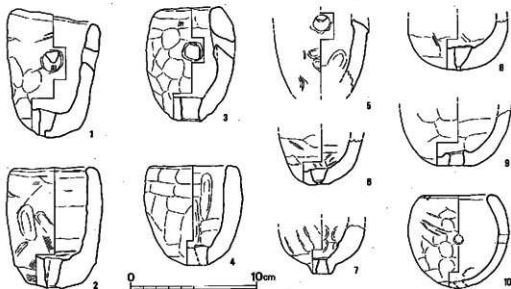
飯給壺 (図版185-1, 第361図)

飯給を捕獲するのに使用されたと考えられる小型の直口壺である。一見して手捏ね風であるが、実際は粘土紐巻上げのようだ。内外にナデの痕跡が著しく、指頭のみによるものと、布か何かを用いてのものとがある。また擦過とした方が妥当な痕跡を示すものもある。

穿孔は口縁下と底部とにあり、口縁下のそれは知りうる3例ともに外下方から内上方へと斜めに穿たれている。底部のそれは、内面から穿たれるもの(1・4・6・8)と外面から穿たれるもの(7・9)とがある。2・4の口縁下の穿孔は残存する破片中に見ないだけである。

器形としては1〜3が長胴形であるのに対し、4は丸みをもっている。この4点の口径の高さに対する比率は、4が最も高いことはいうまでもない。口径と器高は1が6.3cmと8.9~10.1cm, 2が5cmと8.5cm, 3は3.2cmと8.8cm, 4は5.4cmと7.8cm, 10が4.4cmと7.2cmを測る。1〜3については重量感がある。

図示した10点以外にも住居跡や遺構検出面から幾つか出土している。1は8号竪穴, 4は107号住居跡, 5は14号住居跡, 6は3号溝, 7はP327, 8はP129, 9は23号土塚, 10は33号土塚, 2・3は遺構検出面から出土した。

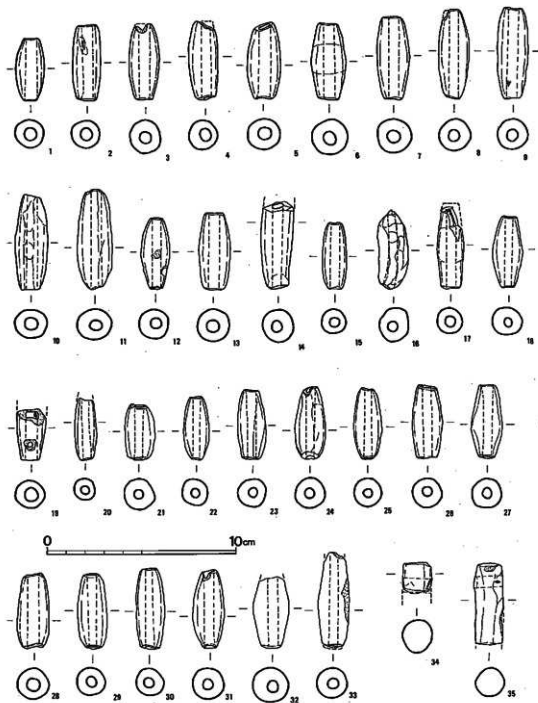


第361図 飯給壺実測図 (1/3)

土 錘 (図版185-2・186, 第362図)

管状土錘が47点, 棒状土錘が2点, 計49点が出土した。そのうち35点を図示する。

管状土錘の33点のうち, 計測可能な29点についてみると, 長さは3.0cmから5.2cmまであり,



第 362 圖 土錘實測圖 (1/2)

最大径は1.1~1.85cm, 重さ6.1~14.7gの範囲に納まり, 平均は長さ4.0cm, 最大径1.55cm, 重さ9.2gとなる。1~11は25号住居跡からまとまって出土したものであり, これの平均をみると長さ4.33cm, 最大径1.62cm, 重さ10.6gという数値が得られる。全体の平均と比べれば25号住居跡出土品は少し大きめであるが, それほど大きな差ではない。長短・大小の差異がありながらも大同小異の類型の中で, 16のみはつくりがやや異なっている。器表面の調整についてはナデのみである。5~7・9~11・13・17・25・31には化粧土をかけた痕跡が窺える。

34・35の棒状の土鏝は2点のみの出土であった。土師質のものである。

12は82号住居跡, 13は10号住居跡, 14は23号土壌, 15は12号竪穴, 16は14号溝, 17は4号溝, 18~20はビット, 24・26・29・32・34は旧河道①層から出土し, それ以外は遺構検出面で採集したものである。

土製横造鏡 (図版187-1, 第363図)

16点が出土している。107号住居跡から3点(1・2, もう1点は小破片のため図示せず), 11号土壌1点(3), 34号土壌3点(5~7), 45号土壌1点(8), 46号土壌は最も多くて7点(9~15), 遺構検出面より1点(4)となる。107号住居跡と46号土壌は隣接し重複しており(同一遺構になる可能性大), ここのみで10点となって過半数が集中していることになる。

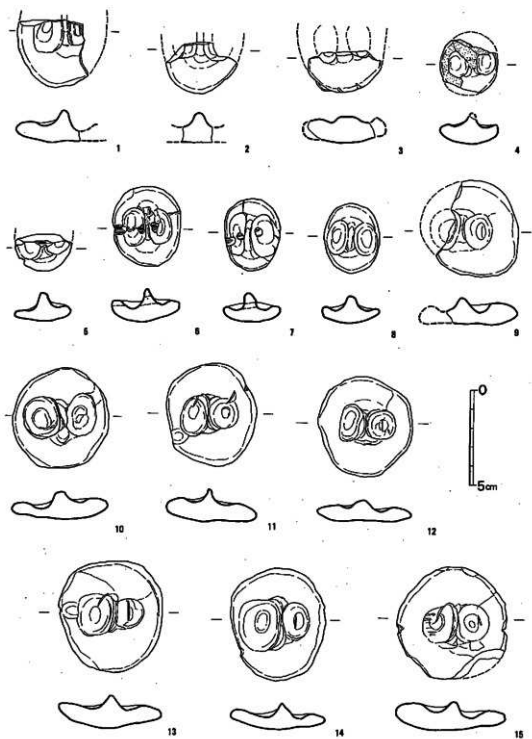
図示した15点は大きさの上から大きく二つに分けられる。大きい方のI類は円形に近い平面ブランのものが多く, 直径が4.0~6.0cmの中に納まるものである。1~3・9~15がそれにあたる。厚さは様々で規格性はない。粘土の塊を掌の中で押し広げ, 土盤状とした後でその中央部に握み(鈕)をつくり出す。握みの作り方は, 右手の親指と人差指を粘土盤の中央に当てがい, 力を入れて押し窪めるとともに両指の間で粘土をつまみあげて握みとする。親指・人差指の爪が粘土に食込んだ痕までも見える。窪みの大きさからすれば, 指はそれなりの大きさを必要とするので, 男が作ったものとも考えうる。

小さい方のII類は平面形が楕円形を呈し, 短軸2.9~3.6cm, 長軸3.6~4.2cmの範囲内にある。4~8の5点があり, その内の5~7は34号土壌出土品である。これらも基本的にはI類と同様の整形法をとるが, 7のみは握みを作る時に左手の親指・人差指を使っていると思われる。また, 5~7の3点には鈕孔までも穿たれている。

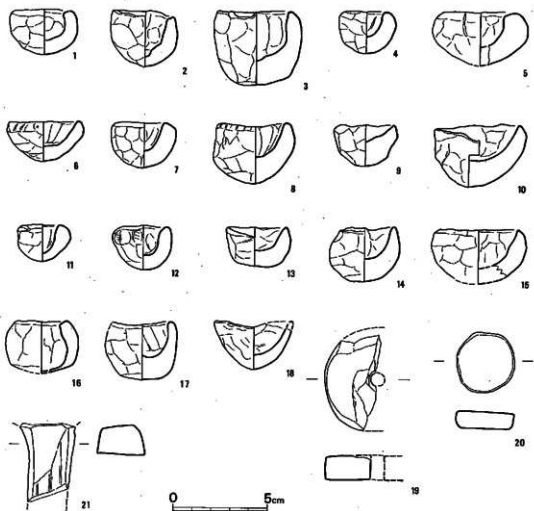
全体を通じてナデにて調整されている。7・12~14は化粧土をかけているらしい。

手摺土器 (図版187-2, 第364図)

18個体が出土した。いわゆる, ミニチュア土器である。器形としては平らに近い底部を持つ鉢もしくは壺形のもの, 丸底あるいは尖底の碗形をなすものなどに大別されるが, 分類したとしてもあまり意味をなさないだろう。内外ともに器表面には指頭圧痕が顕著である。



第 363 图 土製模造鏡壳測圖 (1/2)



第 364 図 土製品実測図 (1/2)

法量としては、口径が最小1.8cmから最大4cmまでで、平均すれば2.74cm。高さ2～3.9cmの間にあって平均2.66cmとなる。

18点の中で特別に異種とするものはないが、気付いた点のみ記しておく。1は器表に指紋がよく残っている。3は口縁の一ヶ所を棒状のもので押さえて片口風の窪みを作っている。5は二次火熱を受けているようだ。10も片口風につくる。18は手捏にしてはスマートなつくりである。4・6・7・11の内面については布のような“道具”を使ってナデあげているように見える。8・10・13・14・17・18は化粧土をかけているらしい。

1～3は10号住居跡、4は14号溝、5はP151、6は90号住居跡、7は99号住居跡、8は2号竪穴から

出土した。それ以外は遺構検出面での採集である。

土製模造鏡と併せての出土例はなかったが、ともに祭祀に関連するものと考えられる。

土製品 (図版179-3, 第364図)

手捏ねのミニチュア、模造鏡、土鍾以外の土製品というのはごく少ない。

19はP509出土の紡錘車で、半分以上の残存しかない。復原すれば直径5.5cmくらいになろう。厚さは1.25cm。表裏ともにナデにて調整しているようだ。P509は96号住居跡の上面にあったピットである。

20は土師器の破片を利用して円形に整形した土盤である。周縁は擦って面取りをしている。直径3~3.2cm、厚さ0.9cm。調査区南端に近い所で採集されたものである。なお、その他にも土器片を利用して土盤としているように見えるものが幾つかあったが、どれも周縁が打欠いたままであって、面取りしているものがなかったため除外している。

21は断面が台形を呈する棒状品である。足釜の脚になろうかとも考えたが、底辺が平らになる台形の断面をなすことから無理がある。平らな面を下にして平面的に使用する“道具”であろう。そうとすれば、三又か十字形の平面プランと思われる。現存長4cm。ナデにて調整し、平らな面には指紋が付いている。84・85号住居跡上面からの出土である。(伊崎)

石 器 (図版188・189, 第365~368図)

石器には、石鎌・石斧・砥石・石庵丁・紡錘車及び石帯・管玉・小玉等の装身具があり、住居跡・竪穴・土坑・包含層より出土した。

石 鎌 (1) 先端部を欠き、残存長1.0cm、現存重量0.5gを測る。チャート製か。E-15区の出土。

白 玉 (2) 滑石製で、径0.75cm、厚さ0.15cm、重さ0.15gを測る。95号住居跡北側の出土。

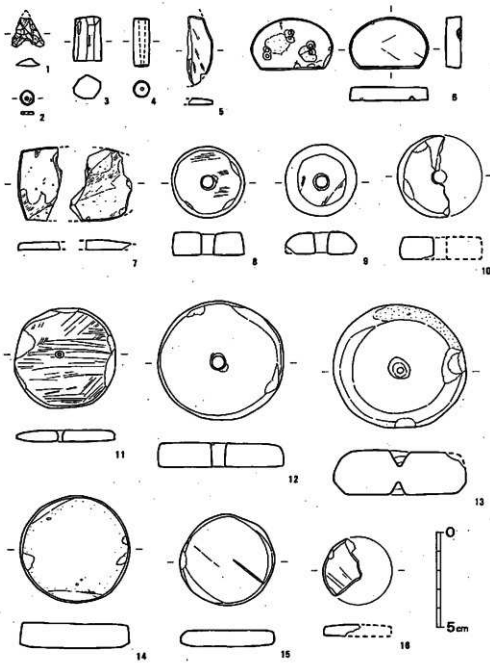
管 玉 (4) 碧玉製で、長さ2.5cm、幅0.9cm、重さ3.2gを測る。83号住居跡の出土。

石 帯 (6) 暗緑色を呈する粘板岩製の丸鞘で、長さ4.2cm、幅2.7cm、厚さ0.7cm、重さ16.3gを測る。表面は鏡面状に平滑で、裏面には紐掛かりの穴を3箇所に穿つ。P434の出土。

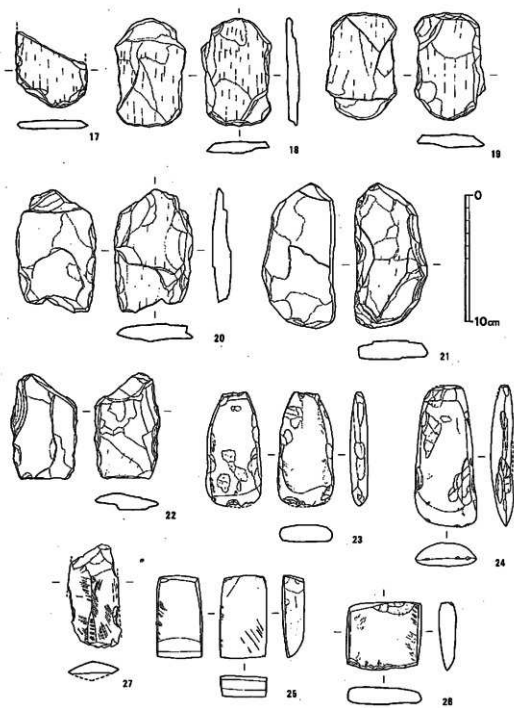
紡錘車 (8~10・12・13) 8は50号住居跡床面出土で、径3.7cm、厚さ1.2cm、孔径0.7cm、重さ32.3g。9は3号溝出土で、径3.9cm、厚さ1.2cm、孔径0.8cm、重さ27.3g。10はP1440出土の半欠品で、径4.3cm、厚さ1.2cm、孔径0.65cmを測る。何れも滑石製。

12はI-6区出土で、径5.3cm、厚さ1.3cm、孔径0.8cm、重さ70g。13は53号住居跡床面出土で、径6.5cm、厚さ2.4cm、重さ145g。表裏面には未貫通の円孔がある。共に凝灰岩製。

有孔円盤 (11) 11は2号竪穴出土で、径5.3cm、厚さ0.6cm、重さ40g。表裏面は線刻状の擦痕がある。また、孔は小さく、中心からずれており、紡錘車ではなく有孔円盤とした。滑石製。



第 365 图 石器实测图① (1/2)



第 366 图 石器实测图② (1/3)

円盤 (14-16) 14・15は円孔を穿ておらず、紡錘車の未製品であろうか。14はL-15区出土で、径5.6cm、厚さ1.3cm、重さ60g。15はP1511出土で、径4.8cm、厚さ0.9cm、重さ30g。16は1/4程の破片。14・15は凝灰岩製、16は滑石製である。

石斧 (17-26) 17-22は打製、23-26が磨製。17は欠損品であるが、先端・側縁を調整剝離する。23号住居跡床面の出土。18は長さ8.5cm、幅5.6cm、重さ65gを測る。19は長さ8.5cm、幅5.6cm、重さ65gを測り、共に36号住居跡の出土。20は長さ9.7cm、幅6.2cm、重さ120gで、5号整穴上層の出土。21は長さ11.5cm、幅5.6cm、重さ175gで、側縁を調整剝離している。L-14区の出土。22は長さ8.3cm、幅5.1cm、重さ55gで、両側縁を調整剝離している。F-14区谷部④層の出土。17は緑泥片岩、他は何れも緑簾片岩製であろう。

25は偏平刃石斧で、長さ6.5cm、幅3.6cm、厚さ1.65cm、重さ85gを測る。F-14区谷部④層の出土で、粘板岩製か。26は幅広の偏平片刃石斧で、長さ5.3cm、幅5.9cm、厚さ1.35cm、重さ90gを測る。刃部は刃こぼれが著しい。蛇文岩製であり、69号住居跡(弥生期)の出土。

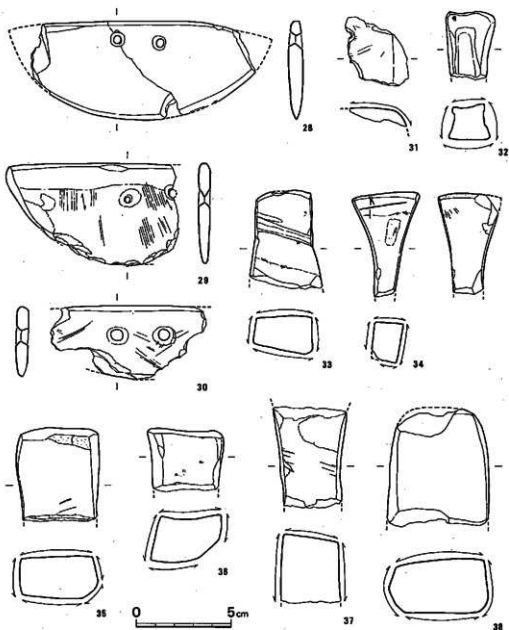
石剣 (27) 石剣の刃部破片で、両端部を欠く。輝緑凝灰岩製で、北端谷部の出土。

石庵丁 (28-30) 28は半月形の石庵丁で、両端部を欠く。背部寄りに孔径0.7cmの二孔を穿つ。F-14区谷部④層の出土で、緑泥片岩製か。29は26号土壙出土の半欠品で、刃部は折損が著しい。輝緑凝灰岩製。30は円孔付近の破片で、I-13区の出土。輝緑凝灰岩製であろう。

砥石 (32-47) 32は38号住居跡出土で、大半を欠く。残存長3.5cm、幅2.5cm。33は中央に深い砥痕を残す。残存長5.2cm、最大幅3.7cm。34も欠損品で、4面を砥面とする。残存長5.6cm、先端幅3.6cm、中央で細くなり、幅1.2cm。26号土壙の出土。35は側縁全てを砥面として使用している。残存長4.9cm、幅4.4cm。K-13区の出土。36はF-8区出土の仕上げ砥石で、大半を欠く。残存長3.6cm、最大幅4.0cm。37はI-13区出土の仕上げ砥石で、これも大半を欠く。残存長5.3cm、最大幅3.8cm。38はN-19区の出土で、欠損部は加熱を受け黒化している。残存長6.1cm、幅5.3cm。

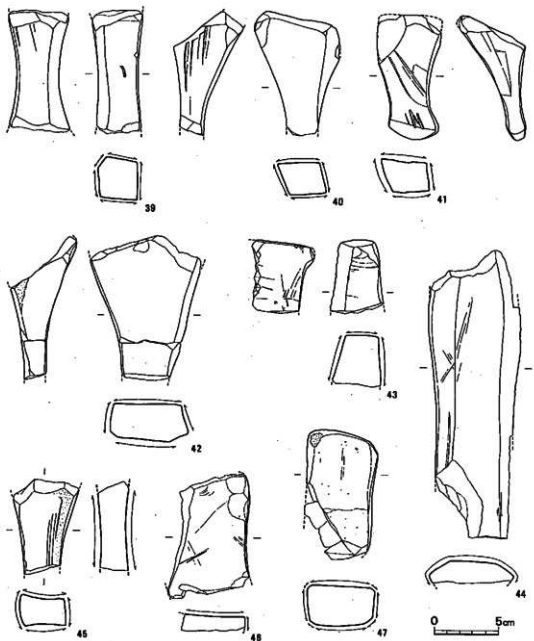
39は柱状の砥石で、5面使用している。39号住居跡の出土。残存長9.7cm、中央幅3.3cm。40は中央が極端に細くなっている。残存長11.3cm、中央幅3.7cmで、56号住居跡床面の出土。41は先端部が細くなっている。長さ9.9cm、先端幅4.0cm。42も半欠品で、残存長11.5cm、中央幅3.7cm。43は端部が一段高くなっている。残存長5.7cm、幅4.2cmで101号住居跡の出土。44は磨当形の長い砥石で、本来6面を有していたか。残存長22.7cm、最大幅7.2cmで、107号住居跡の出土。45は両端部を欠く。上面には細い擦過痕がある。残存長7.6cm、幅3.0cm。12号整穴の出土。46も大半を欠く。調査区北東端部の出土。47は長方形の砥石で、四周には砥痕がみられる。残存長10.2cm、幅5.2cmで、中央集石土壙群の北側の出土。

石材は32・36・37・39・47が灰白色の砂岩で、35・38・43・44・46は目の詰まった砂岩、40・41・45は軽石質の目の粗い砂岩、33・42は両者の中間の砂岩であろう。



第 367 図 石器実測図③ (1/2)

不明品 (3・5・7・31) 3は滑石製品で、周囲を11面面取りし、上下端は平滑にする。長さ2.3cm、幅1.5cm、重さ8.4gを測る。29号土壌から出土した。5も滑石製で、半欠品。側縁を



第368図 石器実測図④ (1/3)

丸くする。7はサヌカイト製品で、側縁を面取りしている。表裏面は雑な研磨を施す。C-17区
の出土。31は滑石製で、加熱を受けている。42号住居跡の出土。

鉄・器 (図版190・191-1, 第369~372図)

鉄・刀子・短刀・鎌・鉈・紡錘車・円盤・釘・鋸等があり、住居跡・竪穴・土塙・鍛冶炉跡・ピット・包含層からの出土である。

鉄 鎌 (第369図~39) 1は脇扶柳葉式鎌で、全長11.0cm, 身の長さ3.9cm, 重さ15.5g。2は大型品で、脇扶がみられる。身の長さは6.8cm程になろう。3も脇扶がみられるが、その度合は弱い。身の長さ4.2cm。5・6は鎌身が三角形をなすもの。7は鎌身の破片で、鑿箭式。身の長さ2.9cm。

8は圭頭広根鑿箭式で、身と茎の区別は不明瞭である。身の幅2.7cm。9は鋒破片で、10は鋒を欠くが、圭頭広根式鎌になるか。11は円頭広根斧箭式鎌の鎌身部破片で、身の長さ5.9cm, 鋒幅2.5cmを測る。12の鋒は11程広からない。13・14は圭頭細根斧箭式で、身の長さは13が3.7cm, 14は3.5cm。15も圭頭斧箭式鎌になるか。16~20は片刃箭式鎌で、16の身の長さ3.9cm, 18は3.5cm, 21は刺股形の鎌で、身の長さ3.0cm。

22~39は茎の破片で、22の残存長11.1cm, 23は14.0cm。

刀 子 (第370図1~28) 1は鋒を欠く。全長16.0cm程になろう。2は両端部を欠く。3は全長13.3cm, 4は12.0cm; 5は鋒を欠く。6は茎先端部を欠く。身と茎との境に輪状の鐙が付き、基部には木質の柄が遺存している。7は全長9.3cmで輪状の鐙が付く。8は鋒先端部を欠くが、鐙を有する。9・13~16は鋒を欠き、19~23は刃部破片, 11・18・25~28は茎の破片。

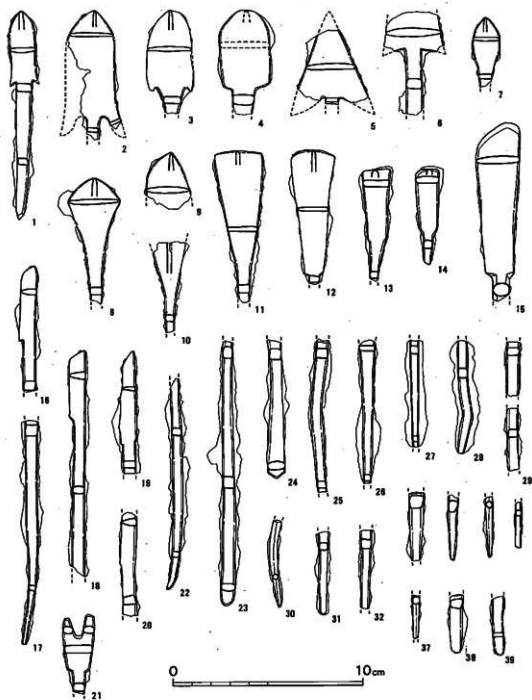
短 刀 (第370図30) 錆膨れが著しいが、全長32.7cm, 身の長さ24.6cm, 幅3.1cmを測る。29は鉄刀の身部破片。

鎌 (第371図1~9) 1は背が外反した鎌で、長さ16.6cmを測る。16号住居跡カマド前面の出土。2はP634の出土で、長さ18.0cm, 先端はJ字形に屈曲する。3は基部の破片で、K-15区の出土。4は先端部の破片で、J-12区の出土。5は先端部, 6~8は基部の破片で、5はM-7区, 6はP137, 7はK14区, 8はK-15区の出土。9は小型であるが、研ぎ減りによるものか。長さ10.2cm, K-15区の出土。

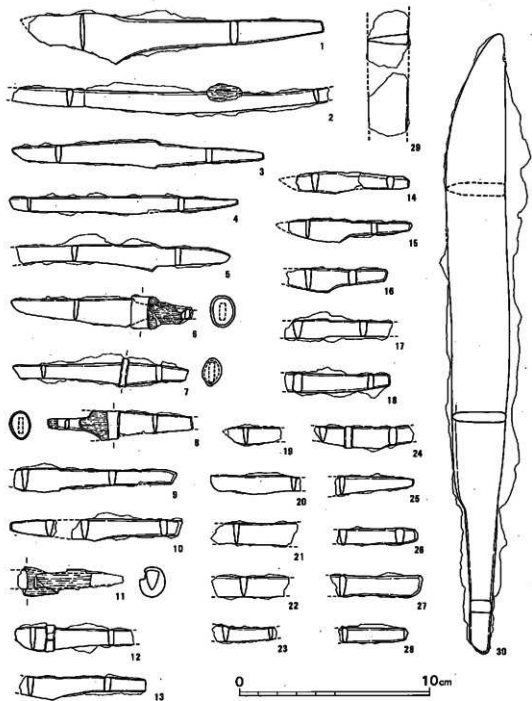
鎌 (第371図10) 10は基部の破片であるが、茎が「く」字形に屈曲することから鋸になるか。

表8 鉄・刀子出土地一覧表

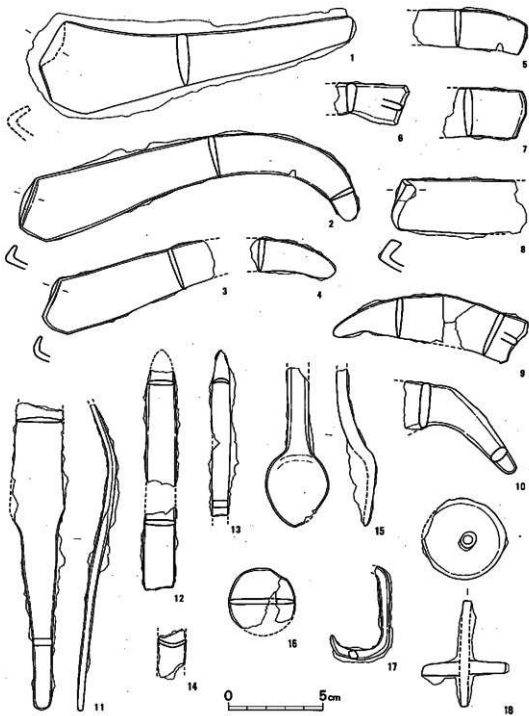
No	鉄出土地	刀子出土地
1	包含層	D23
2	包含層	D 1
3	住60	住83床面
4	M-15区	L-4区
5	P999	D46
6	住107	包含層
7	D 4	G-9区
8	壘24	住55
9	I-13区	L-10区
10	N-14区	住83
11	G-8区	住83
12	住71	L-15区
13	住59	P1527
14	住51	G-8区
15	K-5区	I-7区
16	D 4	住25
17	D 4	住83床面
18	D46	L-4区
19	L-15区	住58
20	L-14区	G-13区
21	I-9区	P32
22	P1300	住51
23	住82上層	D46
24	P1381	G-8区
25	I-14区	K-14区
26	D46	P102
27	L-15区	M-15区
28	住25	P728
29	住36	
30	K-14区	
31	住51	
32	L-15区	
33	住25	
34	L-14区	
35	L-15区	
36	住100	
37	住55	
38	住37	
39	住22	



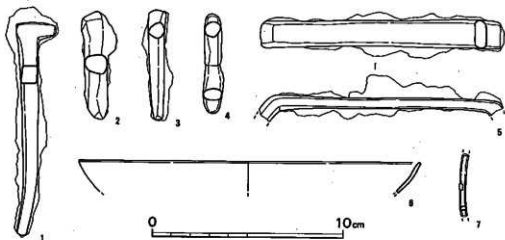
第 369 图 铁镞尖列图 (1/2)



第370图 刀子·短刀类测图(1/2)



第 371 图 铁剑·铁·铁铤车钩尖测图 (1/2)



第372図 鉄器・銅製品実測図(1/2)

鏝(第371図11~14) 11は先端部がスプーン状に屈曲するが、鈍になるか。残存長16.2cmで、24号土塚の出土。12はK-14・15区の出土。13は1号鍛冶炉跡出土で、残存長8.8cm、幅1.0cmを測る。14はF-14区谷部④層の出土。

匙(第371図15) 15はスプーン形を呈し、匙になるか。残存長8.4cm、幅3.3cm、K-4区出土。

円盤(第371図16) 16は円形を呈し、径3.5cm、厚さ0.3cmを測る。残存部位に孔はみられず、或は模造鏡になるか。L-4区の出土。

紡錘車(第371図18) 径4.4cm、厚さ0.7cm、心棒は5.5cm残存する。本体と心棒が一体の作りであるかは不明。L-15区の出土。

釘(第372図1~4) 1は太めの釘で、長さ11.3cm、頭部幅2.0cm。41号土塚の出土。2~4は釘の破片であろうか。2の長さは5.7cmで、2はG-8区、3は51号住居跡、4は104号住居跡の出土。

鏝(第372図5) 5は両端部が屈曲することから鋸になろう。残存長12.8cm、中央部幅1.3cmで、H-7区の出土。

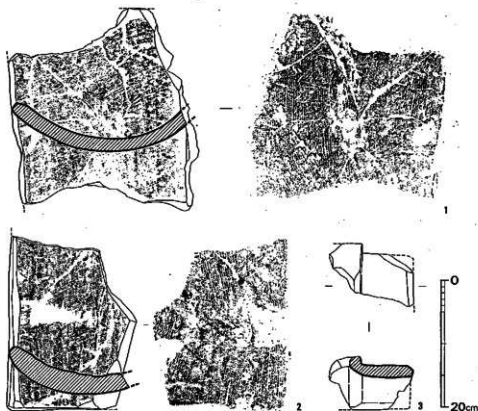
不明品(第371図16) 17はC字形を呈する棒状品で、25号住居跡の出土。

銅製品(第372図)

銅製品として銅椀・棒状品がある。

銅椀(6) 6はK-15区出土の銅椀で、口径18.0cm、残高1.6cmを測る。口唇部はシャープである。器壁は2mmと薄い。

棒状品(7) 7は棒状品で、残存長3.3cm、厚さ0.3cmを測る。M-6区の出土。



第 373 図 瓦尖測図 (1/6)

瓦 (図版191-2・192, 第373図)

13号竪穴・土壇・11~14号集石土壇等から30点程出土しており、特に13号竪穴・集石土壇からの出土は多い。

平瓦(1・2) 1・2は13号竪穴出土の平瓦片で、1は残存長32.8cm, 残存幅28.2cm, 厚さ2.3cmを測る。側縁はへらにより2面而取りしている。表面布目痕, 裏面縄目タタキ痕を留める。焼成はやや軟質である。2は残存長28.3cm, 厚さは1に比して厚く, 3.3cmを測る。1同様, 表面布目痕, 裏面縄目タタキ痕を留める。

丸瓦(3) 3は玉縁を有する丸瓦片で、二分割成形による。頸の長さは8.1cm。12号竪穴のすぐ東側の出土。瓦類は平安期に属しよう。(小田)

4. 自然科学的分析

赤幡森ヶ坪遺跡鍛冶関連遺物の調査結果と遺構の検討

新日本製鉄 大澤 正己

概要

奈良～平安時代に比定される赤幡森ヶ坪遺跡の2基の鍛冶炉から出土した4点の椀形状鉄滓を調査して次の事が明らかになった。

①：1号鍛冶炉では、チタン (Ti) 分の高い塩基性砂鉄を始発原料とした荒鉄 (製鉄炉で生産された直後の不純物の多い鉄塊系遺物) の成分調整を目的とした精錬鍛冶を行なっている。出土鉄滓は、鍛冶炉の炉底に堆積成長した大型椀形滓である。初期形成精錬鍛冶滓とも呼べるものでチタン (Ti) 濃度が高い。

②：1号鍛冶炉は、鍛冶工房としての作業空間配置利用を図った踏施設内に納まると推定された。すなわち、火窯型鍛冶炉と金床石、これに先手(鍛冶鍛打作業で大槌を振る立位の弟子)と横座(作業の主導管理する鉄錐をもつ親方)が対峙する作業位置と検出遺構の関係が推定された。

③：2号鍛冶炉周辺から出土した小型椀形鍛冶滓は、1号鍛冶炉の次作業レベルで排出された可能性をもつ後期精錬鍛冶滓であった。鍛冶炉は、礫石が集中散布位置に設置されていた。礫石散布地に鍛冶炉を設けた例として印象に残るのは、韓国慶州市所在の陸城洞遺跡I-a-16号鍛冶炉らが挙げられる(註1)。

(1) いきさつ

赤幡森ヶ坪遺跡は、福岡県築上部築城町大字赤幡字森ヶ坪に所在する。当遺跡は、弥生時代から平安時代まで断続する複合遺跡である。このうち、奈良時代から平安時代にかけての鍛冶炉内及び、その周辺から出土した椀形鍛冶滓の調査依頼を福岡県教育委員会より要請されたので、遺構の性格を見極める目的の調査を行なった。

なお、1990年に同町所在、城井川中流の左岸台地上の松丸製鉄遺跡が調査された。7世紀中頃から8世紀頃の箱形製鉄炉と6基の補助燃焼孔(横口)付炭窯が検出された。ここでは、塩基性砂鉄を始発原料とする製鉄滓が確認されている(註2)。

(2) 調査方法

1. 供試材

表9に示す。供試材は鉄滓4点である。

表9 供試材一覧表

符号	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目			
				大きさ (mm)	重量 (g)	顕微鏡 組織	ピッカース 断面硬度	CMA 調査	化学 組成
FK5	楕形鉄滓	1号鍛冶炉周辺	奈良～平安	70×105×25	285	○			○
FK6	#	1号鍛冶炉周辺	#	80×100×20	330	○	○	○	○
FK7	#	2号鍛冶炉周辺	#	50×40×30	76	○	○		○
FK8	#	#	#	60×55×30	150	○	○		○

2. 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) ピッカース断面硬度
- (3) CMA (Computer Aided X-ray Micro Analyzer) 調査
- (4) 化学組成—容量法, 燃焼容量法, 燃焼赤外吸収法, ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer), 誘導結合プラズマ発光分光分析

(3) 調査結果

1. 1号鍛冶炉関連遺物

① 1号炉内出土楕形鉄滓 (FK5)

肉眼観察

表皮側は茶褐色を呈し, 粗鬆な肌にも炭痕を残す。裏面は反応痕と木炭痕を有し, 色調は表皮と同じである。破面は黒色で局部的に干渉色を発す。気泡が散在するが緻密質。

顕微鏡組織

図版193-①②に示す。鉱物組成は白色粒状ウスタイト (Wüstite:FeO) と淡褐色多角形状のウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂), 淡灰色長柱状のファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂), それに基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。なお, ウスタイト粒内には, 淡褐色微小鉱物のウルボスピネルが析出する。精錬鍛冶滓の晶癖である。

化学組成

表10に示す。全鉄分 (Total Fe) は52.7%と多く, このうち, 酸化第1鉄 (FeO) が32.48

%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)が25.55%の割合である。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は、鍛冶滓としては高目の22.50%である。砂鉄系荒鉄を表わす二酸化チタン(TiO_2)は、3.92%、バナジウム(V)0.11%と両成分とも多い。他の随伴微量元素らは、製錬滓レベルよりは低減傾向を示す。塩基性砂鉄の精錬鍛冶滓組成である。

②1号炉周辺出土橢形鉄滓(FK6)

肉眼観察

先述したFK5鉄滓に近似してやや大ぶりの鉄滓である。裏面には炉材粘土が高温で青灰色に変色して付着する。

顕微鏡組織

図版193-③~⑦に示す。鉱物組成はFK5と同じ構成である。ウスタイト主体で、ウルボスピネル、ファイヤライトらが認められる。

ピッカース断面硬度

図版193-③に示す。ウスタイトの結晶の同定のための硬度値測定である。硬度値は、488~498 Hvであった。ウスタイトの文献硬度値が450~500 Hvであるので矛盾ない値と考えられる(註3)。

CMA調査

表11は図版195のSE(2次電子像)に示したウスタイト(Wüstite:FeO)、ファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、ガラス質スラグの分析結果である。ウスタイト粒内には、多くの微小ウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)含む。検出元素は、鉱物組成に見合ったものである。珪素(Si)・鉄(Fe)・チタン(Ti)らを主成分とする。

次に、図版195に高速定性分析の検出元素を視覚化した特性X線像を示す。分析元素の存在は、白色斑点の集中度の強弱で表される。例えば、ウスタイトの結晶は、鉄(Fe)で最も強く、粒内折出ウルボスピネルは、チタン(Ti)で白く検出される。当鉄滓は、鍛冶滓ながら、チタン(Ti)が強く検出されるのは鍛冶原料の荒鉄に、まだチタン(Ti)分が多く含まれるためである。精錬鍛冶滓に分類される。

化学組成

表10に示す。成分構成は前述したFK5と、ほぼ同じである。この鉄分が53.0%多く、二酸化チタン(TiO_2)4.68%、バナジウム(V)0.13%レベルは、精錬鍛冶滓の典型的成分系といえる。

2. 2号鍛冶炉関連遺物

①2号炉周辺出土橢形鍛冶滓(FK7・8)

肉眼観察

FK7：表皮は黄色を呈し、粗鬆肌に木炭痕を残す。裏面は赤色で反応痕と木炭痕が認められる。破面は気泡散在。楕形鍛冶滓欠損品。先述したFK5・6より小型化する。

FK8：上面は茶褐色で平坦面を有し、小気泡を露出する。裏面は反応痕と木炭痕が認められる。破面は黒褐色で気泡が散在する。これも楕形状の鉄滓である。

顕微鏡組織

図版194-①-⑥に示す。FK7・8共に鉱物組成は、ヴスタイト (Wüstite:FeO) の凝集した組織で覆われている。鉄分が増加して精錬鍛冶も最終段階の滓である。

ピッカース断面硬度

図版194-①④に硬度測定の写真を示す。FK7・8の硬度値は、433~488Hvである。ヴスタイトの範囲に入る。

化学組成

表10に示す。FK7・8ともに大差ない成分系である。全鉄分 (Total Fe) は53.8~56.6%、ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は19.0~23.8%、砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) は、FK5・6より減少して1.46~1.67%、バナジウム (V) 0.030~0.040%となる。精錬鍛冶の数回の繰返しの最終段階の排出滓となる。

(4) まとめ

赤幡森ヶ坪遺跡からは、2基の鍛冶炉が検出されて、鍛冶一連作業が行なわれたと推定された。ただし調査鉄滓は、荒鉄成分調査の初期精錬鍛冶滓 (1号炉) と最終段階 (2号炉) のものであった。

1・2号鍛冶炉は、塩基性砂鉄を原料とした荒鉄に加熱鍛打を繰返し、鉄素材までに鍛錬したことだろう。1号鍛冶炉内から検出された楕形鍛冶滓と炉周辺から出土した鉄滓は、同系組成であった。

この1号鍛冶炉の周辺には、幾つかの土壌と鉄床石が遺存する。第374図は鍛冶作業時の空間利用の人員配置を想定したものである。手前の楕円形状土壌は、鍛冶作業で大槌を振る工人の位置である。この工人を先手と呼ぶ。先手は、大槌を振る。この時大槌の槌先が天井に当らぬ様に床面が掘り下げられた作業面をもつ。これに対峙して、横座という先手に作業指示を与え、作業の主導管理する観方がある。横座は座位をとり、鉄錐で赤熱鉄材を挟み、鍛打を受ける。更に鍛冶炉にも加熱のための出し入れをする。横座は炉に手が届く位置を占める。横座は右利き、左利きで占地位置が変わるであろう。この相対する2名の工人の他に櫓 (皮櫓、箱櫓は気密性の保てるカンナの出現まで待たねばならぬ) 操作の人員も必要だったと考えられる。

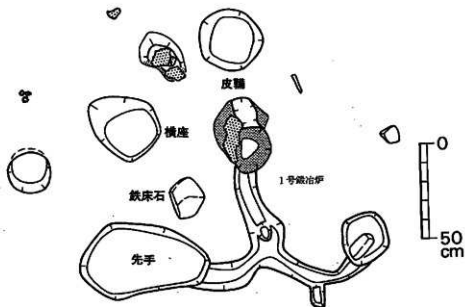
この工房内には、鉄床石上で赤熱鉄材に鍛打を加えるので、表面酸化被膜の剥落物である鍛

造刺片が飛散し、粒状滓の湯玉が走ったことであろう。今回の調査では残念ながら、この鍛冶証明遺物までの採取はなされていないが、25~50cmメッシュを刻み、排土を洗滌すると、これらの遺物が採集されたはずである。これの分布状態をおさえると鍛冶工房空間利用は、より明確となる。鍛冶刺片の分布と鍛冶工房の空間利用については、1991年度に福岡県教育委員会の中間研志氏編集の前原町所在、奈良尾遺跡で触れている(註4)。参考までに、これをfig1-2に示す。また、「職人尽絵」「鍛冶師」(喜多院)も鍛冶工房空間利用を考察する上で参考になろう。

大平村の土佐井遺跡でも先手土壌と鍛冶炉及び移動した鉄床石が確認され、鍛冶刺片が採取された(註5)。同じく鍛冶工房空間利用例としては、栃木県に1例(註6)、福島県で2例(註7)が確認されている。平安時代以降の鍛冶工房では、赤幡森ヶ坪遺跡の1号鍛冶炉周辺で検出された空間利用は広く採用された形跡がある。

一方、2号鍛冶炉の礎石に設けた問題である。理由付けが今一步不鮮明である。慶州市所在、陰城洞遺跡の4~5世紀の1~16号鍛冶炉でも認められたが、占地の必要性が判らない。今後の研究課題としておきたい。

最後に、赤幡森ヶ坪遺跡からは、石帯や緑釉陶器が検出されて都衙役所に関連する遺跡ではないかと考えられている。そうすると、鍛冶作業も官営が関与している可能性が強い。このような類例が九州では、福岡市柏原遺跡、熊本県所在曲野遺跡らで検出され、全国的にみると、十数例にのぼる。官営鍛冶については別稿で述べる事にする。



第374図 森ヶ坪遺跡鍛冶工房空間利用図

- 註1 陸城洞遺跡発掘調査団 『慶州陸城洞遺跡第1次発掘調査概報』 1990 国立慶州博物館
大澤正己 「韓国の鉄生産」（慶州市所在，陸城洞遺跡概報に寄せて）『古代学評論第3号』
1992 古代を考える会（印刷準備中）
- 註2 伊崎俊秋編 『松丸遺跡』（築城町文化財調査報告書第2集） 1992 築上町教育委員会
大澤正己 「松丸製鉄遺跡出土鉄滓の金属学的調査」同上所収
- 註3 日刊工業新聞社 『焼結鉱組織写真および識別法』 1968

硬度測定対象物	硬度実測値	文献硬度値※1
Fayalite (2 FeO-SiO ₂) ※2	560,588	600~700Hv
磁鉄鉱 ※2	513,506	530~600Hv
マルテンサイト ※2	641	633~653Hv
Wustite (FeO) ※3	481,471	450~500Hv
Magnetite (Fe ₃ O ₄) ※4	616,623	500~600Hv
白鉄 ※5	563,506	458~613Hv
亜共析鋼 (c : 0.4%) ※6	175	160~213Hv

- ※1 日刊工業新聞社 『焼結鉱組織写真御呼び識別法』 1968他。
- ※2 滋賀県草津市野路小野山遺跡出土遺物 7c末~8c初
- ※3 兵庫県川西市小戸遺跡出土鍛冶滓 4c後半
- ※4 新潟県豊栄市新五兵衛山遺跡出土砂鉄製練滓 Ulvöspitel 平安時代
- ※5 大阪府東大阪市西之辻16次調査出土鑄造鉄弁 古墳時代前期
- ※6 埼玉県大宮市御蔵山中遺跡鉄塊 5c中頃
- 註4 中間研志編 『奈良尾遺跡』（今宿ハイパス関係埋蔵文化財調査報告第13集） 1991 福岡県教育委員会
大澤正己 「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」同上収録
- 註5 高橋 章編 『土佐井地区遺跡』（太平村文化財調査報告書第5集） 1990
大澤正己 「築上郡土佐井遺跡出土梳形滓と鍛造剥片の金属学的調査」同上所収
- 註6 栃木県教育委員会 「5. 東野田遺跡」 『一般国道4号（新4号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第95集） 1988
小林広治 「奈良・平安時代の鍛冶の復元的考察」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊15集』
哲学・史学編 1988
- 註7 大澤正己 「岩田遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」 『岩田遺跡』（福島市埋蔵文化財報告書第91集） 1991
- 註8 大澤正己 「南塚原遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」 『南塚原遺跡』（福島市埋蔵文化財調査報告書） 1992

表 10 鉄滓・鍛造切片の化学組成

試料番号	産地名	出土位置	類別	年代	成分 (%)										Total P (ppm)	Total Fe (ppm)	Total P (ppm)	Total Fe (ppm)								
					Fe	Si	Mn	P	S	Ca	Mg	Al	C	N					O							
A-101	松丸	1号炉出土層	鍛造切片	IC	29.49	0.30	22.49	25.95	24.38	7.35	4.36	5.46	1.29	0.20	1.21	17.76	0.698	0.619	0.487	0.61	0.137	0.002	43.100	1.466	0.604	1
A-102					20.45	0.12	21.77	24.93	19.77	6.43	3.96	4.34	0.797	0.152	2.57	20.47	0.674	0.498	0.32	0.158	0.002	37.460	1.219	0.485		
A-103					20.58	0.20	20.41	25.81	20.32	6.34	5.27	6.46	1.004	1.00	19.30	0.603	0.607	0.26	0.161	0.002	39.215	1.330	0.575			
A-104		1号炉	(炉内)鍛造切片		9.46	0.14	2.87	2.37	37.63	16.66	1.69	1.86	2.365	0.249	0.37	4.95	0.609	0.604	0.254	0.22	0.605	0.002	10.754	0.306	0.832	
FK5	赤松	1号炉	鍛造切片	新井一平	53.7	0.07	47.4	23.6	13.8	5.87	1.14	1.12	0.41	0.15	3.32	0.024	0.027	0.22	0.11	0.11	0.002	22.10	0.427	0.074		
FK6					33.0	0.10	39.3	19.6	13.3	4.56	1.42	1.20	0.66	0.23	4.59	0.022	0.029	0.28	0.22	0.13	0.002	21.87	0.412	0.068		
FK7					56.6	0.10	32.8	22.2	11.4	4.27	2.08	0.72	0.35	0.28	3.23	1.46	0.025	0.025	0.31	0.17	0.006	19.40	0.336	0.026		
FK8					33.8	0.10	34.0	16.9	12.8	4.76	3.02	0.87	1.19	0.26	3.19	1.07	0.021	0.028	0.26	0.11	0.040	22.00	0.442	0.031		
T-101A	土佐	土著(原出)	鍛造切片	IC	40.3	-	47.1	5.21	14.22	5.32	1.65	2.30	-	-	0.76	22.43	0.27	0.029	0.27	0.14	0.28	0.029	34.19	0.610	0.207	2
B					56.4	-	39.9	34.5	9.84	3.49	0.38	0.43	-	-	0.70	0.98	0.40	0.641	0.59	0.41	0.027	34.13	0.520	0.018		
C					65.4	-	39.7	4.47	22.50	8.89	1.38	0.67	-	-	0.21	0.59	0.42	0.021	0.23	0.18	0.006	0.042	34.44	0.759	0.013	
D					17.67	-	7.45	17.08	11.25	0.59	0.35	-	-	-	0.07	0.66	0.41	0.017	0.16	0.08	0.022	0.020	71.10	4.024	0.027	
E					71.5	-	53.0	43.1	4.66	0.79	0.23	0.12	-	-	0.07	0.19	0.43	0.028	0.12	0.18	0.004	0.024	2.40	0.039	0.003	
T-101A		土著(原出)	鍛造切片		58.7	-	43.7	22.39	7.88	3.33	0.43	0.45	-	-	0.19	1.08	0.84	0.037	0.57	0.26	0.11	0.030	11.84	0.213	0.100	
B					55.9	-	51.9	22.21	7.80	3.56	0.72	0.52	-	-	0.11	1.22	0.62	0.031	0.30	0.54	0.025	0.033	12.50	0.231	0.022	
C					53.3	-	48.9	11.38	15.15	6.04	1.28	0.13	-	-	0.00	1.19	0.42	0.027	0.42	0.25	0.028	0.004	34.29	0.073	0.023	
D					79.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.00	0.39	0.64	0.009	0.14	0.28	0.007	0.005	3.70	0.032	0.004	
FK15	豊後	豊後(原出)	鍛造切片	古井一舟	43.1	0.14	23.3	26.5	21.0	6.03	2.32	0.65	0.79	0.28	0.36	0.34	0.029	0.067	0.22	0.20	0.021	0.010	32.11	0.745	0.012	2
17					51.1	0.21	51.3	15.5	22.0	4.56	3.12	1.70	0.82	0.36	0.41	0.95	0.15	0.035	0.40	0.11	0.15	0.004	22.35	0.437	0.136	

注

- 1 大澤正己「松丸鍛造跡出土鉄滓の金属学的調査」、『松丸遺跡』(築城町歴史文化財調査報告書第2集) 1992 築城町教育委員会
- 2 大澤正己「築上郡土佐井遺跡出土銅形滓と鍛造切片の金属学的調査」、『土佐井地区遺跡』(太平村文化財調査報告書第5集) 1990 太平村教育委員会
- 3 大澤正己「広幡遺跡出土鉄滓の金属学的調査」、『権田バイパス関係歴史文化財調査報告書一9一』 1992 福岡県教育委員会

表 11 赤峰鉄ヶ野遺跡出土青銅織治滓 (FK 6) のコンピュータプログラムによる高速走査性分析結果

POS. NO. 3		COMMENT : FK 6		ACCEL. VOLT. (KV): 15		PROBE CURRENT : 5.000E-08(A)		STAGE POS. : X 4000 Y 4000 Z 11000		10-APR-90			
CH (ID) TAP		INTENSITY (LOG)		CH (ID) PBT		INTENSITY (LOG)		EL		WL COUNT		INTENSITY (LOG)	
EL	WL COUNT	INTENSITY (LOG)	EL	WL COUNT	INTENSITY (LOG)	EL	WL COUNT	INTENSITY (LOG)	EL	WL COUNT	INTENSITY (LOG)	EL	WL COUNT
Y -1	6.45	202	OTI-k	2.25	1850	PT-1	1.18	59	PT-1	1.18	59	PT-1	1.18
SR-1	6.96	181	BA-k	2.70	90	BA-k	1.33	58	IR-1	1.33	58	IR-1	1.33
WR-m	6.96	178	CA-k	3.36	810	SR-1	1.44	48	ZN-k	1.44	48	ZN-k	1.44
QS1-k	7.13	698	SB-k	3.44	71	SN-1	1.54	33	CU-k	1.54	33	CU-k	1.54
RS-1	7.32	136	SN-1	3.60	45	OK-k	3.74	411	NI-k	1.66	31	NI-k	1.66
QAL-k	8.34	1458	OK-k	3.74	411	CD-1	3.96	30	CO-k	1.79	33	CO-k	1.79
RR-1	8.37	182	CD-1	3.96	30	CL-k	4.73	22	OMN-k	1.84	569	OMN-k	1.84
AS-1	9.67	38	CL-k	4.73	22	S -k	5.37	14	OMN-k	2.10	52	OMN-k	2.10
OMG-k	9.89	52	S -k	5.37	14	MO-1	5.41	11	CR-k	2.20	18	CR-k	2.20
GE-1	10.44	19	MO-1	5.41	11	NR-1	5.72	7	V -k	2.50	18	V -k	2.50
GA-1	11.29	34	NR-1	5.72	7	ZR-1	6.07	7	CF-1	2.56	7	CF-1	2.56
ONA-k	11.91	52	ZR-1	6.07	7	P -k	6.16	16	IA-1	2.67	7	IA-1	2.67
F -k	15.32	5	P -k	6.16	16								

RESULTS:
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
 NA MG AI SI K CA TI MN FE
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
 SB

Photo. 3 に示したSE (2次電子像) のヴスタイト (Wüstite:FeO) とファイヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂)、基地のガラス質スラグの分析結果である検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。雑素 (Si) 6698、鉄 (Fe) 5669、アルミ (Al) 1456、チタン (Ti) 1050、カルシウム (Ca) 818、マグネシウム (Mg) 582、カリウム (K) 411、ナトリウム (Na)、マンガン (Mn) 共に52となる。ヴスタイト粒内にウルボスピネルを含むのでチタン (Ti) 分が多い。砂鉄系鉄素材の織治排化物と判る。鉱物組成に見合った検出元素である。

5. 小 結

(1) はじめに

赤幡森ヶ坪遺跡では、竪穴式住居跡110軒・掘立柱建物跡38棟・竪穴25基・土壇46基・集石土壇18基・鍛冶炉跡2基・溝16条・旧河道・谷状遺構等が検出された。

出土遺物には、弥生土器・須恵器・土師器等の日常容器を始めとして、鉄器・フイゴ羽口・鉄滓及び焼塩土器等の製鉄・製塩関連遺物、それに特殊遺物として石帯・銅椀・緑釉陶器・灰釉陶器・ヘラ描き土器・墨書土器等があり、これらの問題点に若干ふれてまとめたい。

(2) 森ヶ坪遺跡の集落について

1. 住居跡の形態

住居跡の時期は、大略弥生後期及び古墳後期・奈良～平安前期にかけてであり、ここでは古墳後期・奈良～平安時代の竪穴式住居跡についてみていこう。また、住居跡の中には竪穴と区別の付け難いものもあり、さらに検討を要しよう。

住居跡の平面形は、方形ないしは長方形を呈し、主として4本の柱穴が配される。住居跡はその規模（竪穴部の面積）により3類に大別できる。

I 類……面積が20㎡前後のもの（10・23・26～28・32・34・48・58・61・67・71・87・89・90・91・93・94・99・103・106号）。

II 類……面積が15㎡前後のもの（1・5・8・17・22・35・36・39・40～42・47・51～53・55・57・60・63・72・74・75・77・86・95・101・103号）

III 類……面積が10㎡前後のもの（2・3・11・18～21・33・45・46・49・54・73・81・84・97・104号）

中には、89号住居跡のように25.5㎡もの面積を擁する住居跡がみられる。

2. カマドについて

カマドの形態は、住居壁に袖部を直接貼付した作り付け型もしくは、住居壁を掘り込む突出型を主体とし、細部の形状により4類に大別し、更に袖部の状況によりa・bに細分した。

I 類……住居壁に袖部を直接貼付した作り付け型のもの。

II 類……作り付け型と突出型の中間形態をなすもの。

III 類……住居壁を掘り込み、袖部を貼付するもの。

IV 類……住居壁のコーナー部にカマドを構築するもの。

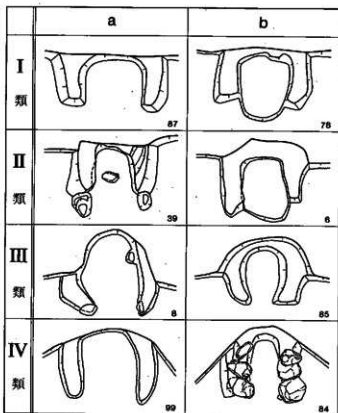
また、支脚・袖部の先端及び天井部に河原石を使用しているカマドが多い。これは、地山が砂礫層であるため石はすぐさま入手できるという事に起因するものであろう。

当遺跡において特筆される事象の一つとして、住居壁のコーナー部にカマドを付設している住居跡が多いという点である。C群においては2軒、F群においては8軒の住居跡がコーナー部にカマドを付設していた。

県下の類例としては、塚堂遺跡(註1)・外之隈遺跡(註2)などで調査されているものの、その数量は僅かであり一般的ではない。また、関東・東北地方においては、その数量はさして多くはないが、見受けられる(註3)。

先ず、コーナー部にカマドを有する住居跡は、総体的に柱配置が判然としない点を指摘できる。その中でも49・52・54号住居跡は、4本の主柱穴を有する。しかし、柱穴配置は住居壁に対して平行ではなく、菱形状に配される。仮に住居壁と平行に柱が4本配置されたとすると、どうしても1本がカマドの前面に位置することになり、柱が邪魔になってしまう。このための住居跡に関しては、竪穴部と上部構造及び入口部を考慮に入れた柱配置を検討する必要がある。

他のコーナー部にカマドを有する住居跡をみていくと、塚堂遺跡D地区5号住居跡は、北西コーナー部に作り付け型のカマドを付設した住居跡であるが、主柱穴は判然としない(註4)。また、岩手県青久保遺跡CII01住居跡は、南西コーナー部に作り付け型のカマドを構築した例であり、床面中央に小ピットが2個存在するが、柱穴とみなすには疑問がある(註5)。青森県弥栄平(4)遺跡103号住居跡は、南壁コーナー部に作り付け型のカマドを構築した住居跡で、床面には2個のピットが存在するものの柱穴とは考え難い(註6)。



第375図 カマド模式図 (1/40)

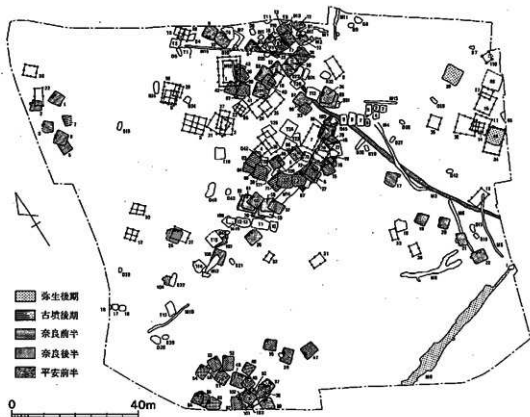
次に、胴部内面にタタキ目を有する土師器長胴甕は、コーナー部にカマドを有する住居跡からの出土が多いという点を挙げる事ができる。54・56・81号住居跡の例は、カマド内の出土であり、通常の住居跡とは様相が若干異なる。

何故、住居壁のコーナー部にカマドを設けるかについての明確な回答を見だし得ないが、大略5～9世紀代を通して断続的ではあるが、広域的にみられることから時期的・地域的側面に起因するものではないといえる。

3. 住居跡の時期

住居跡の時期は、弥生時代後期・古墳時代後期・奈良時代・平安時代の大きく4時期に大別できる(第376図)。

これらを時期毎にみていくと、弥生後期の住居跡は調査区東縁部において2軒しか検出していないが、東接する十双遺跡に連続するものと考えられ、十双遺跡の弥生後期～古墳初頭期の



第376図 住居跡変遷模式図 (1/1,200)

集落がこの範囲まで広がっていたものと解せよう。つまり、十双遺跡と森ヶ坪遺跡とは一連の遺跡とみなせる。しかし、十双遺跡においては、古墳後期及び奈良・平安時代の住居跡は築造されておらず、同時期の住居跡は森ヶ坪遺跡に集中する。

また、森ヶ坪遺跡の住居跡群をA～Fの6群に分けたが、各群の中においても住居跡の変遷が窺える。これには、地山が砂礫層であるという地理的側面が強く介在しているものと思われる。その理由として、竪穴式住居跡は礫層を避けて築造されているが、柱穴を掘るだけの掘立柱建物跡は礫層中にも構築されているからである。礫層中に竪穴を掘り込むことは、骨のおれる作業であり、仮に住居築造に際して強い規制が働いていたとするとともに礫層中に竪穴式住居跡が築造されていてもよいものと考えられる。

4. 建物跡の時期

調査時点においては16棟の建物跡を確認していただけてあったが、1/20平面図の検討の結果、38棟に増加した。建物跡に直接共存する遺物は乏しく、時期決定に事欠くが、唯一16号建物跡を除いて竪穴式住居跡に後出する。また、B～D群においては、建物跡相互に切合い関係を有し、方向性においても7方向程あり、数次に及ぶ建替えがなされたもの考えられる。

奈良時代後半の住居跡を切る1・6・18・19号建物跡は、平安期に属するものと考えて大過ないものと思われる。

(3) 森ヶ坪遺跡の生産遺構について

森ヶ坪遺跡では、製鉄遺構として鍛冶炉跡2基及び製鉄関連の遺物として鉄器・フイゴ羽口・鉄滓等の出土がある。製塩関連の遺物としては、焼塩土器が出土している。

表12は鍛冶炉跡を除いた鉄滓の出土地であるが、住居跡出土の鉄滓は、時期的に奈良時代後半から平安時代にかけてである。また、F群住居跡出土がとりわけ多い。地区名でいくと、H-10～14区が圧倒的に多い。これは、27・31号住居跡に該当し、製鉄遺構が存在していた可能性が高い。

焼塩土器は、旧河道を主体とし、3B・4・7・10・15・25・46・51・83・100号住居跡から出土している。

以上の事から森ヶ坪遺跡は、製鉄・製塩に従事した遺跡であったといえる。

表12 鉄滓出土地一覧表

住居跡	土 質	溝	ピット	地区名
25号	33号	3号	P 33	G-9区
27号			P 36	G-10区
31号			P 365	H-10区
33号			P 493	H-11区
40号			P 700	H-13区
49号			P 1411	H-14区
51号			P 1450	I-10区
81号				J-13区
82号				J-14区
			L-15区	
			M-6区	

(4) おわりに

森ヶ坪遺跡は、110軒の住居跡からなる大集落跡で、主体となる時期は古墳時代後期～奈良・平安前期にかけてである。当遺跡では、製鉄・製塩がなされ、飯蛸壺・土甕の出土から漁撈もなされていたと考えられる。

また、農業を主体とする一般的な集落からは通常出土し得ない石帯・銅椀・緑釉陶器・灰釉陶器・ヘラ描き土器・墨書土器等の特殊遺物が出土した点は特筆される。更に、出土鉄器の大半を鉄鋸・鉄刀子が占めていることも注目されよう。これらの特殊遺物から上層階級の存在が浮かび上がってくるが、検出した住居跡・建物跡は通常のもので大差なく、製鉄・製塩専業集団の集落とそれらを管理・統括していた役人層の居宅跡と推定できまいか。

森ヶ坪遺跡とは城井川を挟んで左岸丘陵に立地する安武・深田遺跡からは、8世紀代と推定されている木簡・墨書土器・製塩土器が出土しているが、遺跡自体は8世紀前半で終了し、森ヶ坪遺跡に集約されていくものと推定されている(註7)。森ヶ坪遺跡の北方には、「築城駅」が想定されており、それは豊前国府へと続く。时期的・地理的及び遺跡の内容からみて森ヶ坪遺跡は豊前国府と密接に関係していたものと捉えられよう。

今回、森ヶ坪遺跡の報告書をまとめるにあたり、遺構・遺物の数量及び内容ともに大規模かつ重要な遺跡であったため到底筆舌に尽くし難く、筆者の力量不足を改めて認識した次第であります。

最後となりましたが、発掘調査に従事して頂いた地元作業員の皆様方を始めとして整理・復原作業に従事した文化課製図室・復原室・甘木事務所の方々、本書の印刷・製本に携わった赤坂印刷株式会社の皆様方には深く感謝致します。(小田)

註1 馬田弘穂編 『塚堂遺跡Ⅳ』 D地区(浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集) 1985 福岡県教育委員会

註2 福岡県教育委員会が昭和63年度に発掘調査を実施した。

註3 弥栄平(4)遺跡(青森県)・宮沢遺跡(宮城県)・青ノ久保遺跡(岩手県)・田端遺跡(群馬県)等がある。

註4 註1と同じ

註5 中村良一編 『青ノ久保遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第118集) 1987 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(財)

註6 青森県教育委員会 『弥栄平(4)(5)遺跡』(青森県埋蔵文化財調査報告書第106集) 1986

註7 木下修・水ノ江和同編 『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報-4-』 1991 福岡県教育委員会

圖 版



赤幡森ヶ坪遺跡・十双遺跡周辺航空写真 (国土地理院撮影)

- 1 安武深田・土井の内遺跡 2 番ノ神遺跡 3 赤幡森ヶ坪遺跡 4 十双遺跡
5 広末・安永遺跡 6 広幡城跡 7 山崎遺跡



(1) 赤幡森ヶ坪遺跡遠景（辛山から）



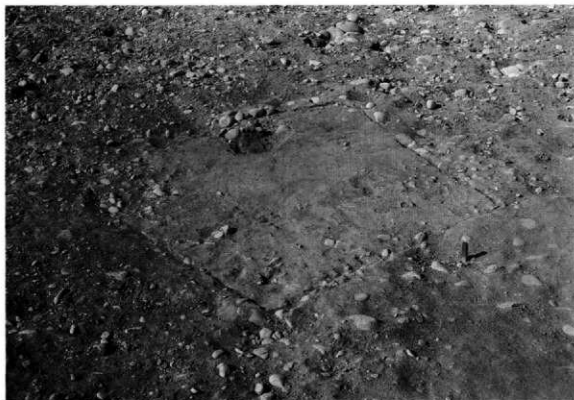
(2) 塞ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡・十双遺跡航空写真（南東上空から）



(1) 赤幡森ヶ坪遺跡空中写真（南から）



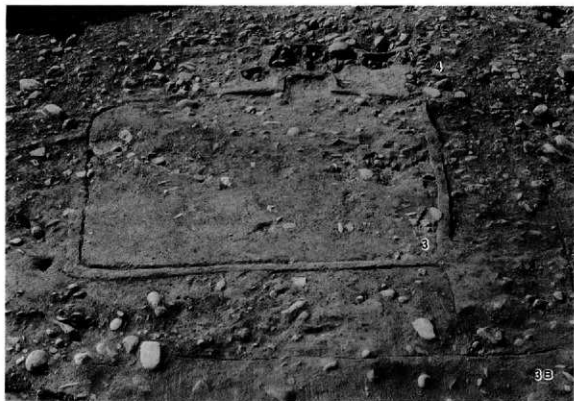
(2) 赤幡森ヶ坪遺跡空中写真（南東から）



(1) 1号住居跡 (南から)



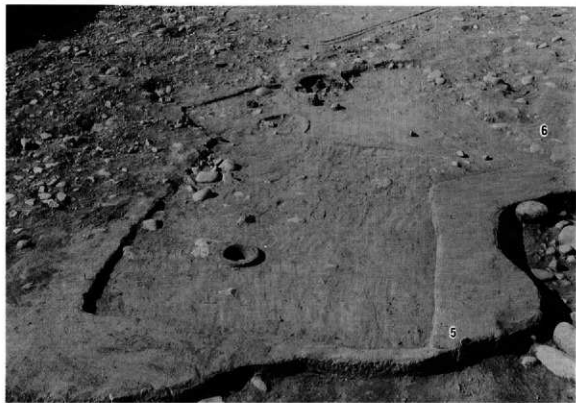
(2) 3・4号住居跡検出状況 (南東から)



(1) 3・4号住居跡（南東から）



(2) 3号住居跡カマド、4号住居跡内焼土塊（南東から）



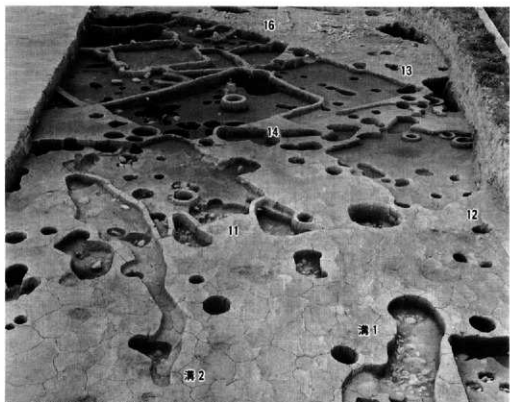
(1) 5・6号住居跡 (南から)



(2) 6号住居跡カマド (南東から)



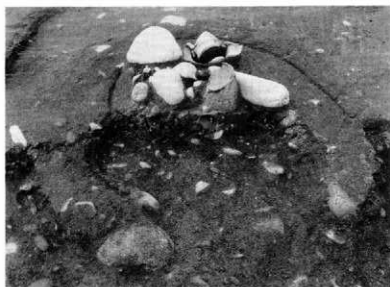
(1) 北端側道部分住居跡群 (北西から)



(2) 北端側道部分住居跡群 (南東から)



(1) 8号住居跡
(南東から)



(2) 8号住居跡カマド
(北東から)



(3) カマド完掘状況
(北東から)



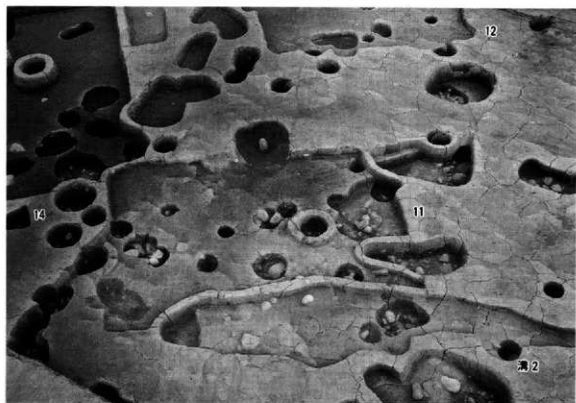
(1) 9号住居跡
(南から)



(2) 10号住居跡
(南西から)



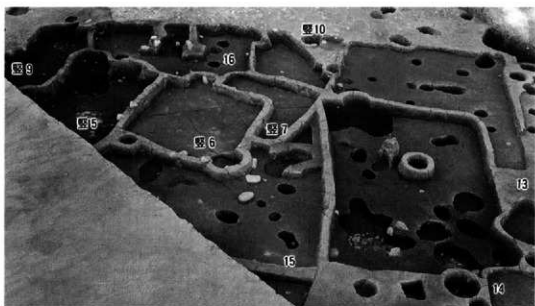
(3) 10号住居跡カマド
(南から)



(1) 11号住居跡, 2号溝 (南から)



(2) 11号住居跡カマド (南から)



(1) 13～16号住居跡、5～7・9・10号竪穴（南から）



(2) 15号住居跡カマド
（南西から）



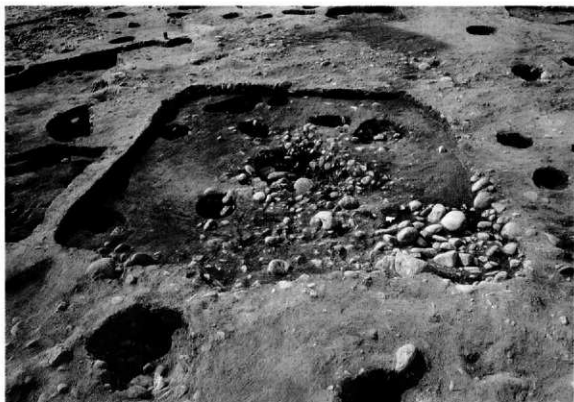
(3) 16号住居跡カマド
（南から）



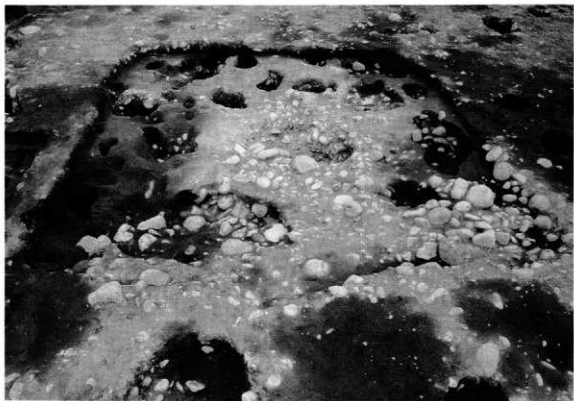
(1) 17号住居跡 (南西から)



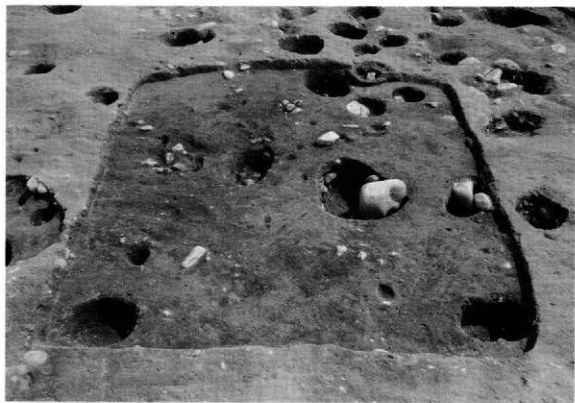
(2) 18号住居跡 (南から)



(1) 19号住居跡 (南東から)



(2) 19号住居跡貼床下部 (南東から)



(1) 20号住居跡 (南西から)



(2) 20号住居跡貼床下部 (南東から)



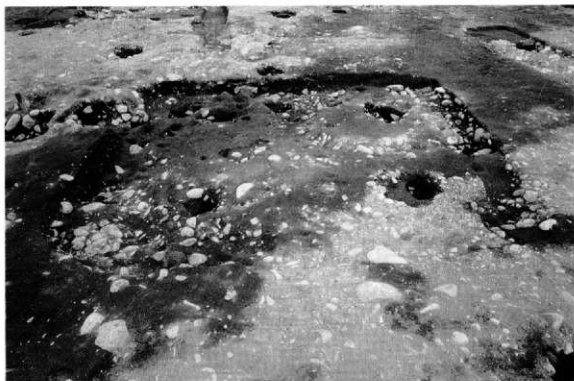
(1) 21号住居跡
(北から)



(2) 22号住居跡
(南から)



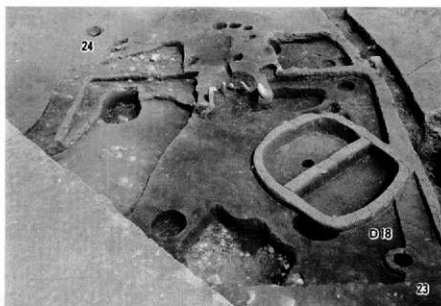
(3) 22号住居跡カマド (南から)



(1) 22号住居跡貼床下部 (南から)



(2) 23・24号住居跡周辺 (南から)



(1) 23・24号住居跡，
18号土壇（南から）



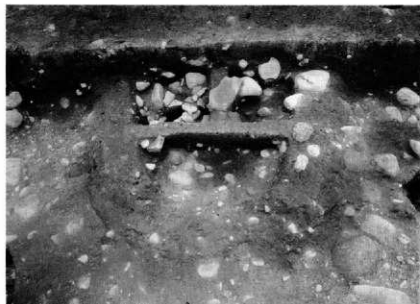
(2) 23号住居跡カマド（南から）



(3) 24号住居跡カマド（南から）



(1) 25号住居跡 (南西から)



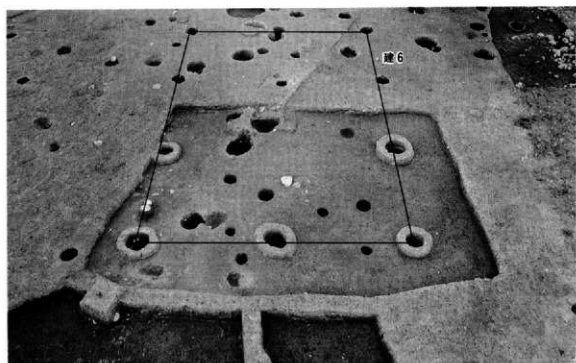
(2) 25号住居跡カマド (南西から)



(1) 26号住居跡 (南から)



(2) 26号住居跡カマド (南から)



(1) 27号住居跡、6号建物跡（西から）



(2) 27号住居跡カマド（西から）



(3) 遺物出土状況（南から）



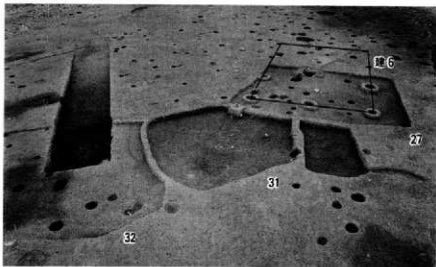
(1) 28号住居跡 (北東から)



(2) 29号住居跡 (北東から)



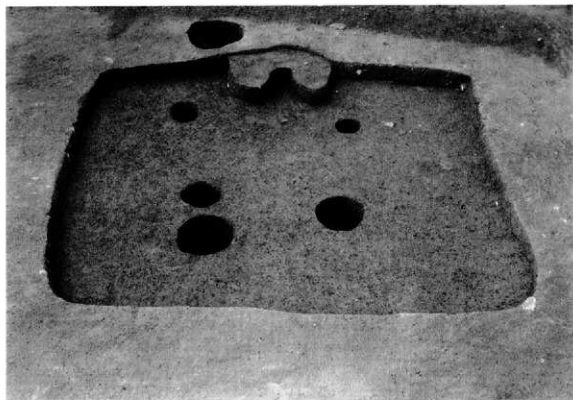
(1) 30号住居跡カマド (南西から)



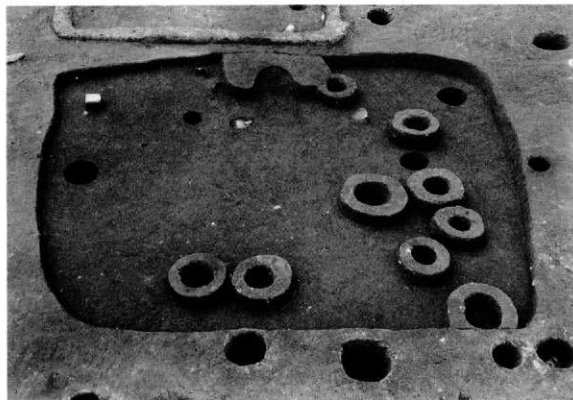
(2) 27・31・32号住居跡、
6号建物跡 (南西から)



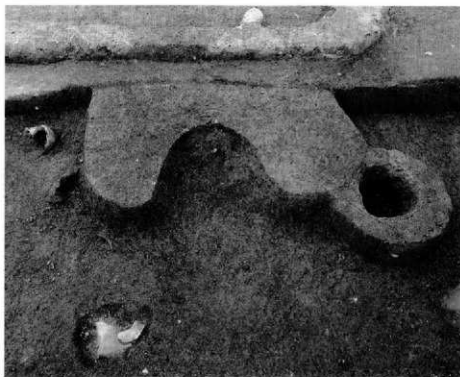
(3) 32号住居跡 (南西から)



(1) 33号住居跡 (南から)



(2) 34号住居跡 (南東から)



(1) 34号住居跡カマド (南東から)



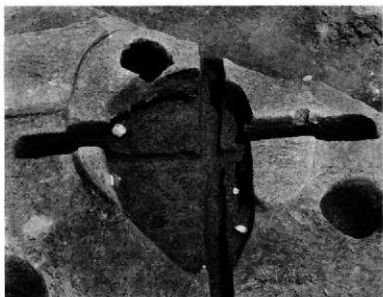
(2) カマド断ち割り状況 (南東から)



(1) 35号住居跡
(南から)



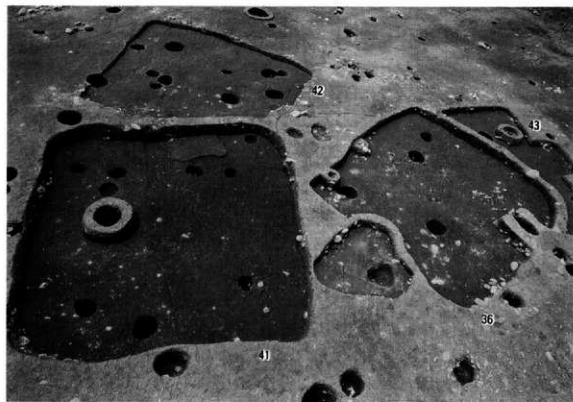
(2) 35号住居跡カマド (南から)



(3) カマド断ち割り状況 (南から)



(1) 36・41～43号住居跡（北東から）



(2) 36・41～43号住居跡（南東から）



(1) 36・43号住居跡 (西から)



(2) 36号住居跡 (西から)



(1) 調査区南西端住居跡群 (東から)



(2) 調査区南西端住居跡群 (東から)



(1) 37・38号住居跡 (南西から)



(2) 37・38・45号住居跡 (東から)



(1) 39号住居跡 (南東から)



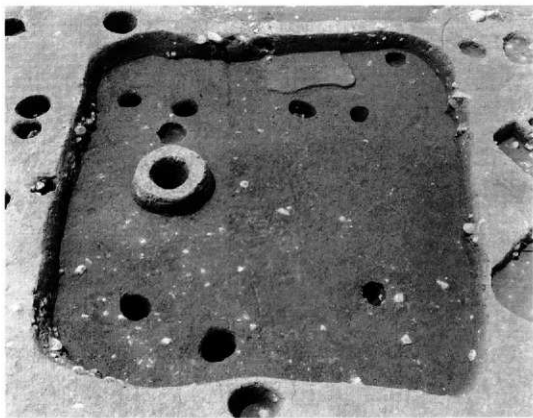
(2) カマド検出状況 (南東から)



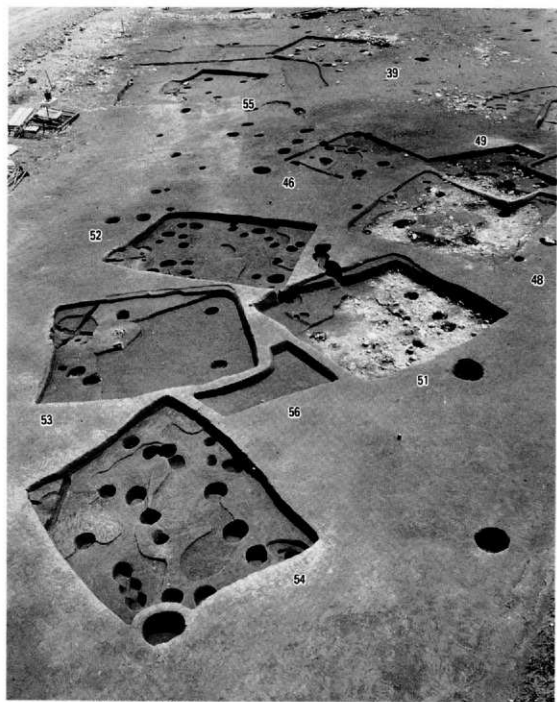
(3) カマド完掘状況 (南東から)



(1) 40号住居跡 (東から)



(2) 41号住居跡 (南東から)



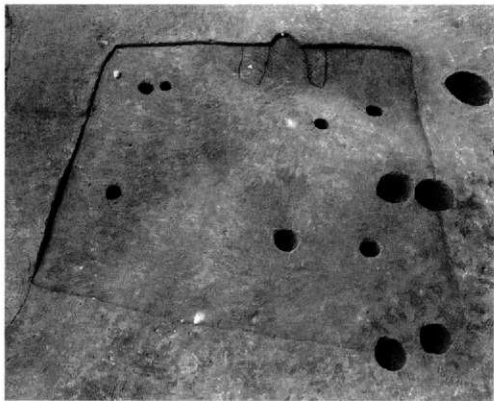
46～49・51～56号住居跡（北西から）



(1) 45号住居跡 (南から)



(2) 37・38・46・55・80・85号住居跡 (東から)



(1) 46号住居跡 (南から)



(2) 46号住居跡貼床下部 (南から)



(1) 47号住居跡 (東から)



(2) 47号住居跡カマド (東から)



(1) 48・49号住居跡 (北東から)



(2) 48号住居跡貼床下部 (南西から)



(3) 48号住居跡カマド (南西から)

(1) 49号住居跡 (東から)

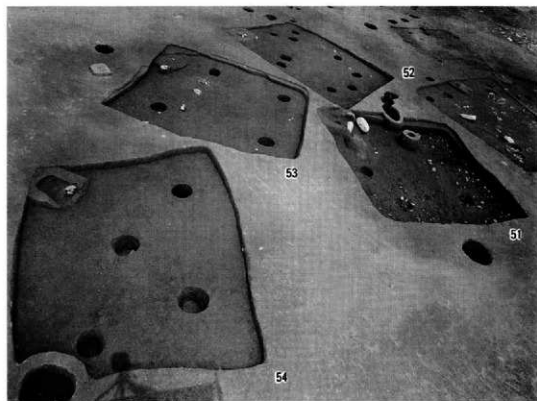


(2) 49号住居跡貼床下部
(南西から)



(3) 49号住居跡カマド (南から)





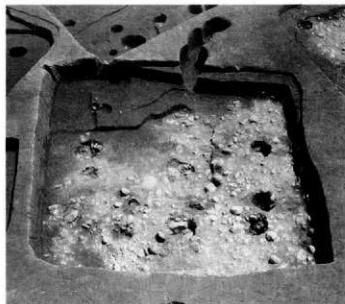
(1) 51~54号住居跡 (西から)



(2) 51~53・56号住居跡貼床下部 (西から)



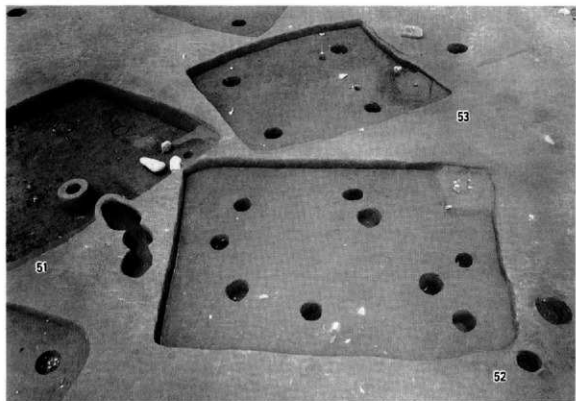
(1) 51号住居跡 (南西から)



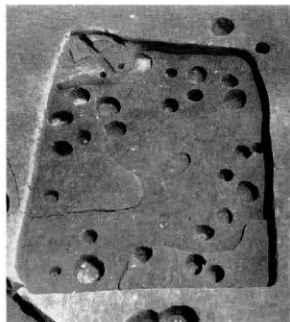
(2) 51号住居跡貼床下部 (南西から)



(3) 51号住居跡カマド (南から)



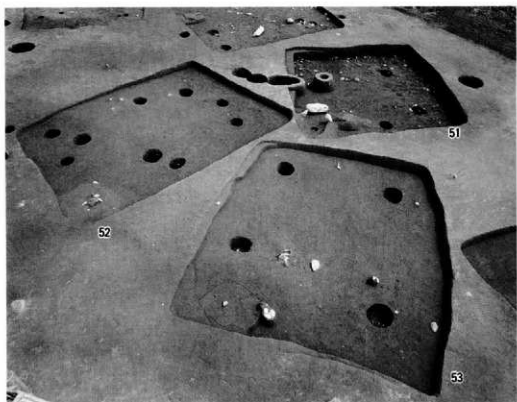
(1) 52・53号住居跡 (南東から)



(2) 52号住居跡貼床下部 (南西から)



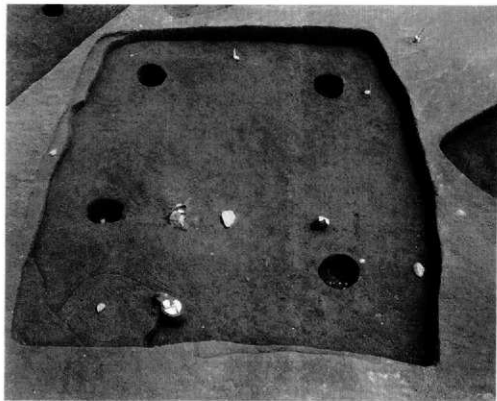
(3) カマド断ち割り状況 (南から)



(1) 51-53号住居跡 (北から)



(2) 53・54号住居跡 (西から)



(1) 53号住居跡（北から）



(2) カマド検出状況（南から）



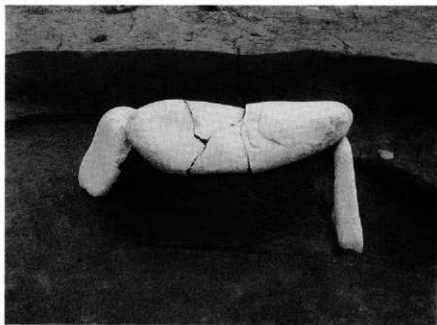
(1) 54号住居跡 (南西から)



(2) 54号住居跡カマド (南から)

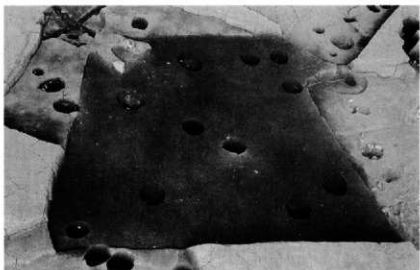


(1) 55号住居跡 (南西から)

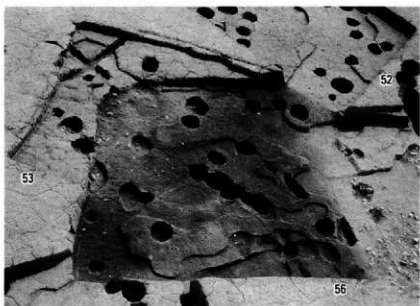


(2) 55号住居跡カマド (南から)

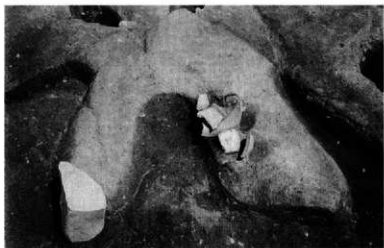
(1) 56号住居跡 (西から)

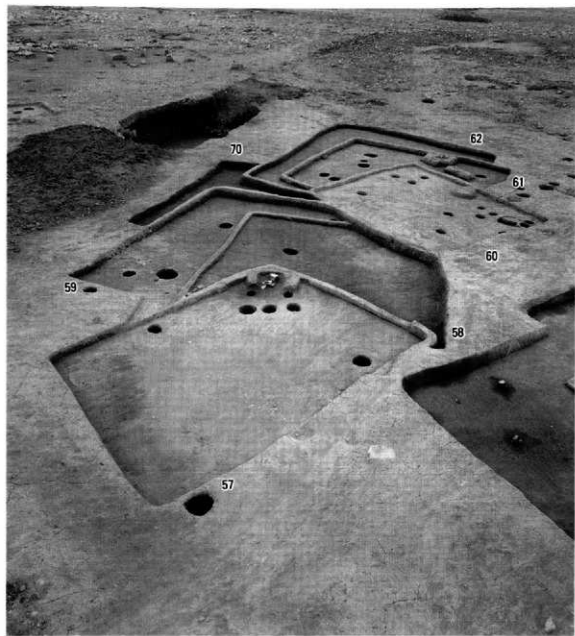


(2) 56号住居跡貼床下部
(西から)

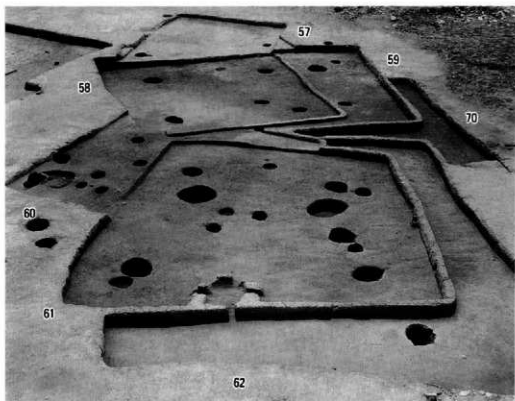


(3) 56号住居跡カマド (南から)





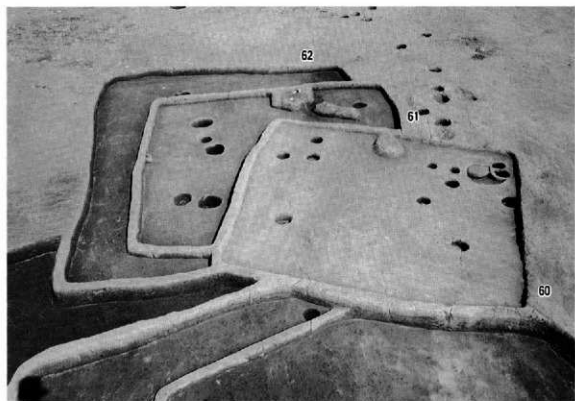
57-62・70号住居跡 (東から)



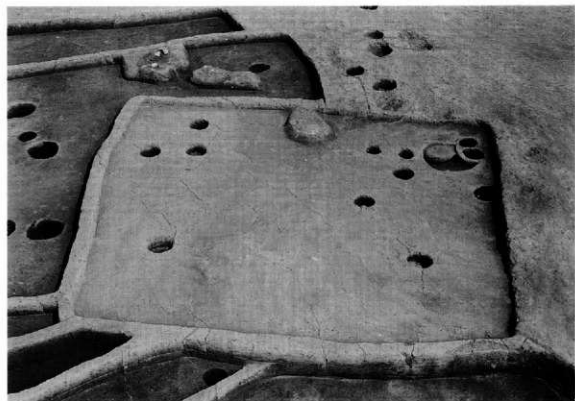
(1) 57～62・70号住居跡（北西から）



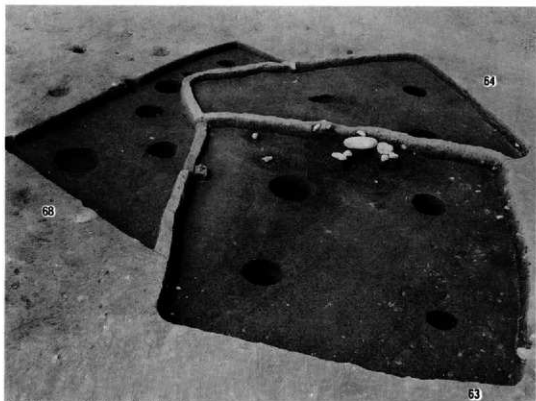
(2) 57号住居跡カマド（東から）



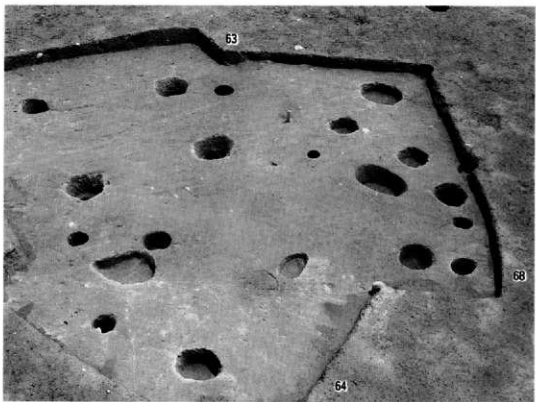
(1) 60～62号住居跡 (南から)



(2) 60号住居跡 (南から)



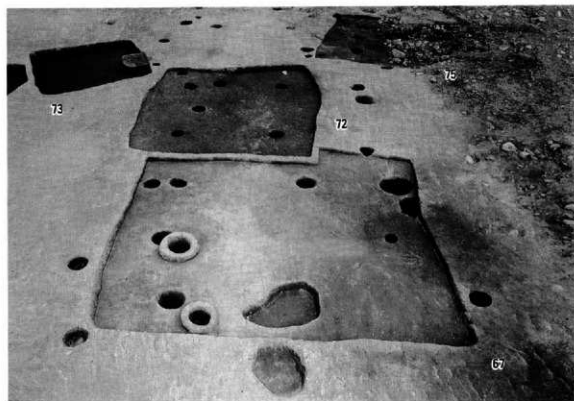
(1) 63・64・68号住居跡（東から）



(2) 63・64・68号住居跡貼床下部（西から）



(1) 66号住居跡 (南西から)



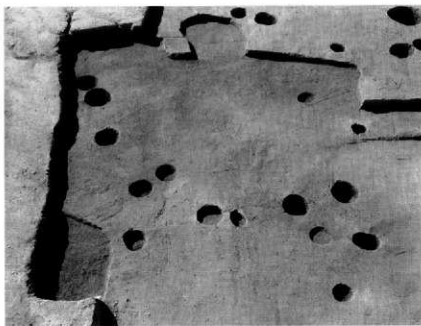
(2) 67・72号住居跡 (西から)



(1) 69号住居跡 (南西から)



(2) 碇石出土状況 (北から)



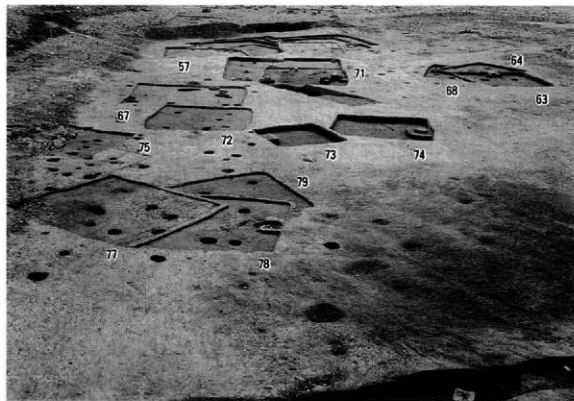
(1) 70号住居跡 (南東から)



(2) 71号住居跡 (南から)



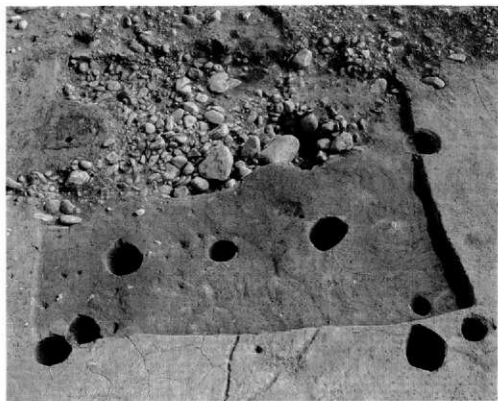
(3) 71号住居跡カマド (南から)



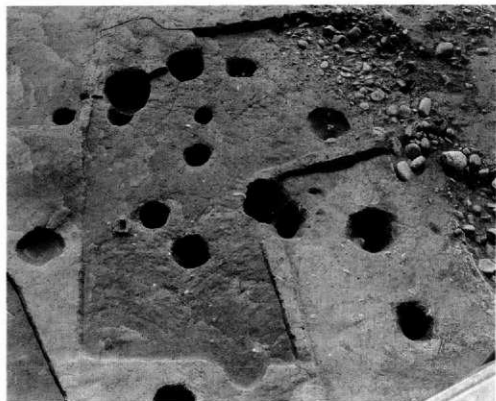
(1) 中央部下層住居跡群 (東から)



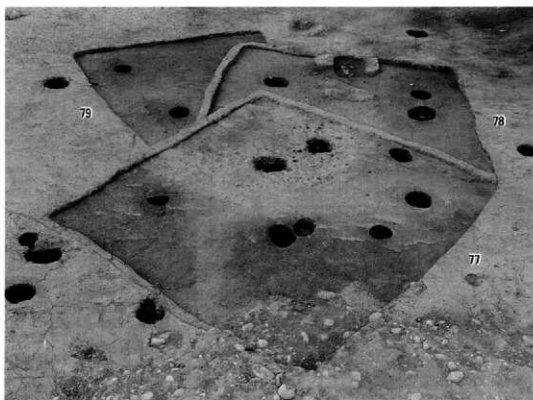
(2) 75-79号住居跡, 18号壟穴 (北から)



(1) 75号住居跡 (北から)



(2) 76号住居跡 (西から)



(1) 77～79号住居跡（南から）



(2) 78号住居跡カマド（南から）



37・38・50・60・81～82号住居跡（北東から）



(1) 80号住居跡 (東から)



(2) 80号住居跡カマド (南から)



(1) 調査区南西端住居跡群 (北西から)



(2) 50・81号住居跡 (北西から)



(1) 81号住居跡（北西から）



(2) カマド検出状況（南西から）



(3) カマド断ち割り状況（南西から）



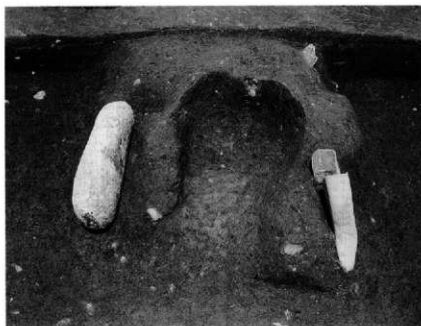
(1) 82号住居跡 (北東から)



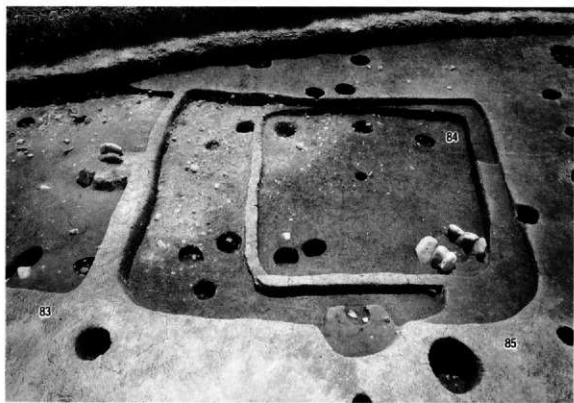
(2) 82号住居跡カマド (西から)



(1) 83号住居跡 (北東から)



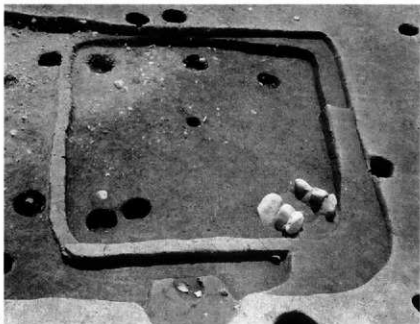
(2) 83号住居跡カマド (南東から)



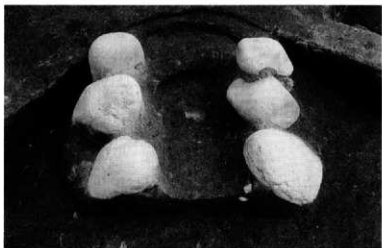
(1) 84・85号住居跡（北東から）



(2) 84・85号住居跡貼床下部（北東から）



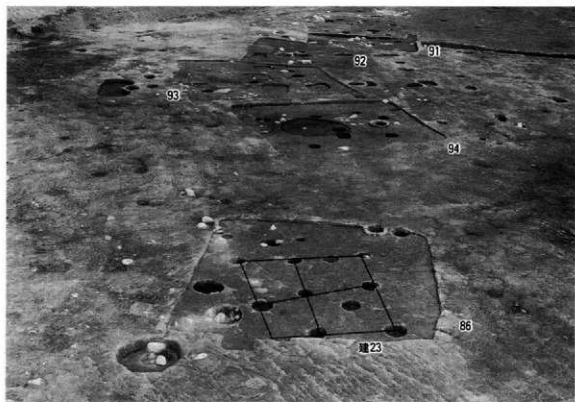
(1) 84号住居跡(北東から)



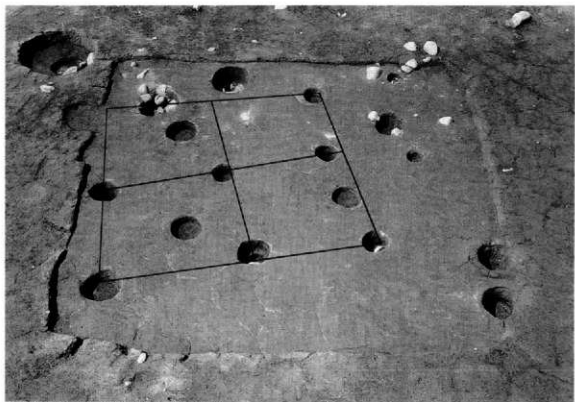
(2) 84号住居跡カマド(南から)



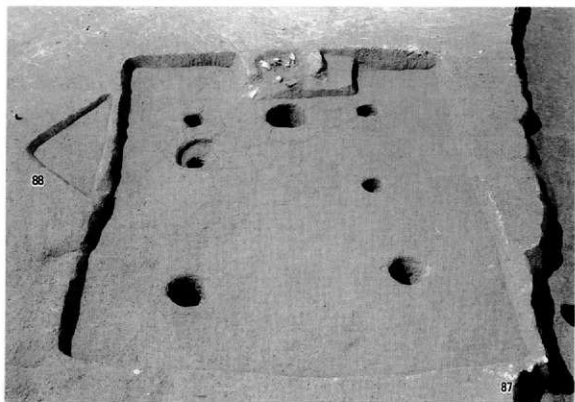
(3) 85号住居跡カマド(南西から)



(1) 86・91～94号住居跡, 23号建物跡 (西から)



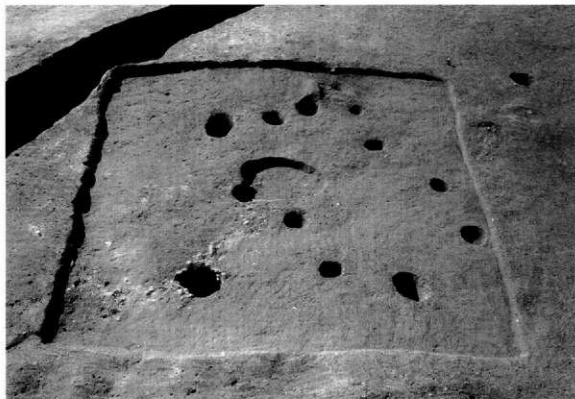
(2) 86号住居跡, 23号建物跡 (南から)



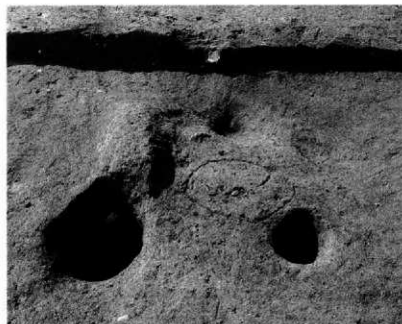
(1) 87・88号住居跡 (南東から)



(2) 87号住居跡カマド (南東から)



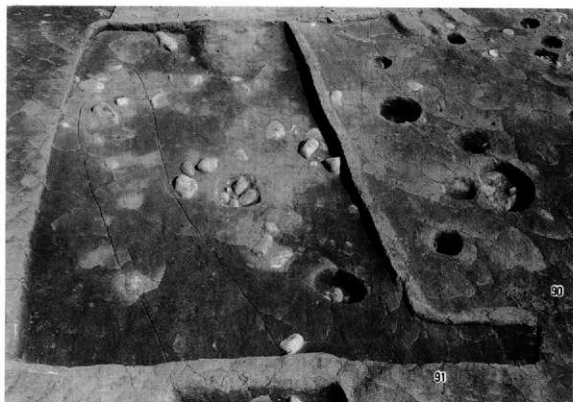
(1) 89号住居跡 (南東から)



(2) 89号住居跡カマド (南東から)



(1) 90号住居跡 (南から)



(2) 91号住居跡 (南から)



(1) 92号住居跡 (南から)



(2) カマド遺存状況 (南から)



(1) 93号住居跡 (南東から)



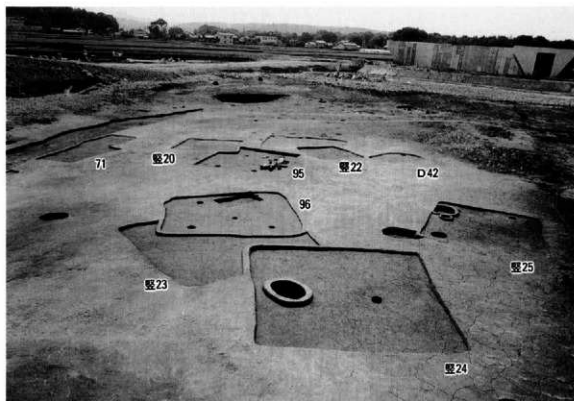
(2) 94号住居跡 (南東から)



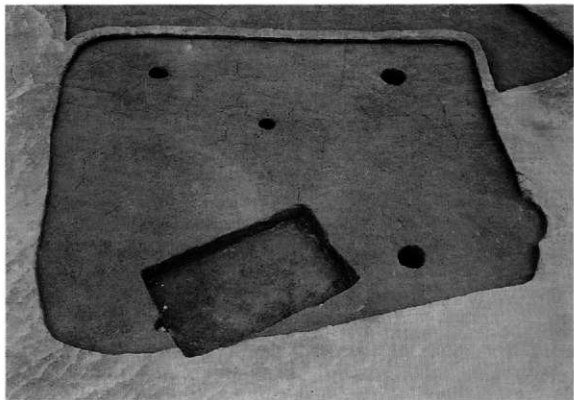
(1) 中央部下層住居跡群 (東から)



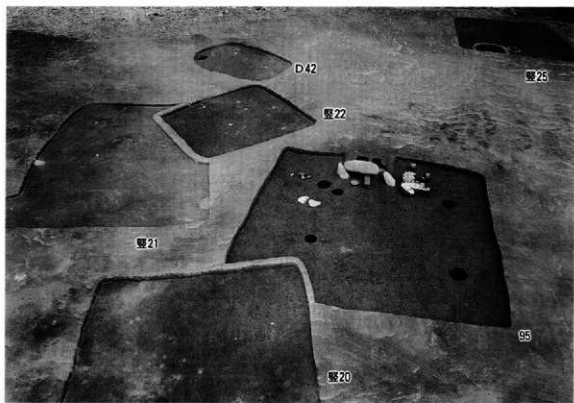
(2) 中央部下層住居跡群 (南から)



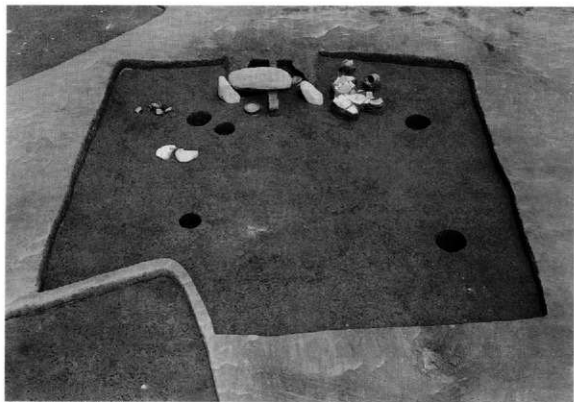
(1) 95・96号住居跡，22～25号竪穴（東から）



(2) 96号住居跡（西から）



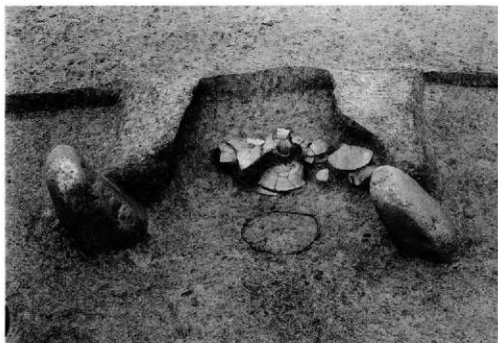
(1) 95号住居跡, 20~22・25号竪穴, 42号土壇 (南から)



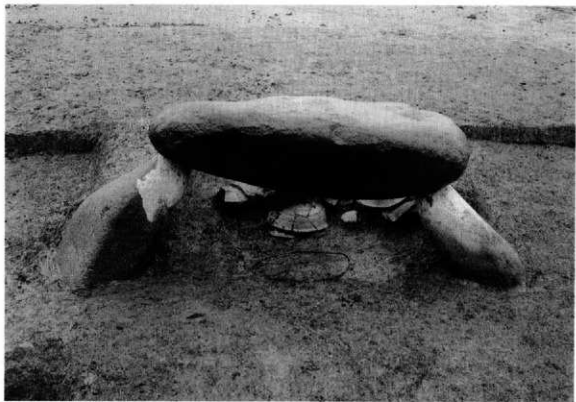
(2) 95号住居跡 (南から)



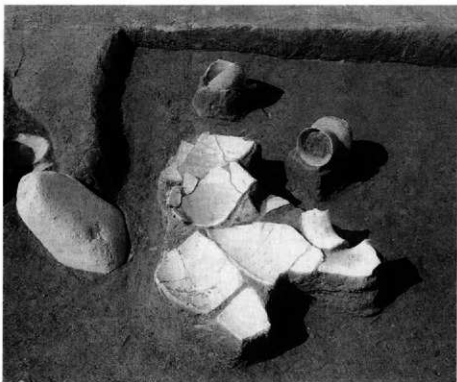
(1) 95号住居跡カマド (南から)



(2) 天井石除去状況 (南から)



(1) カマド復原状況 (南から)



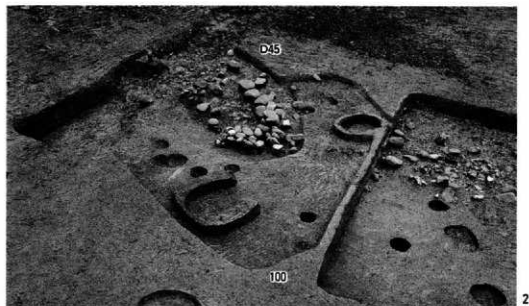
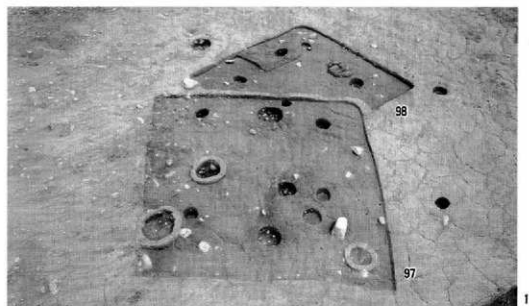
(2) 遺物出土状況 (南から)



(1) 99号住居跡 (北西から)



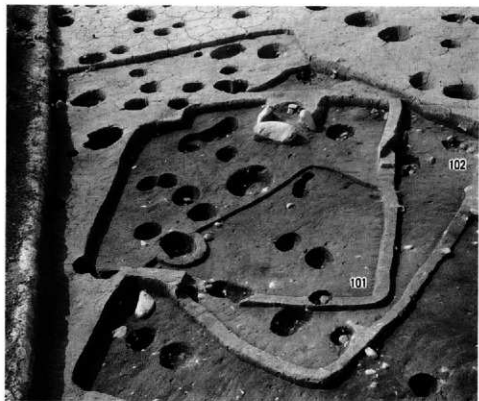
(2) 遺物出土状況 (北から)



- (1) 97・98号住居跡 (南西から)
- (2) 100号住居跡, 45号土坑 (北西から)
- (3) 100号住居跡カマド (南から)



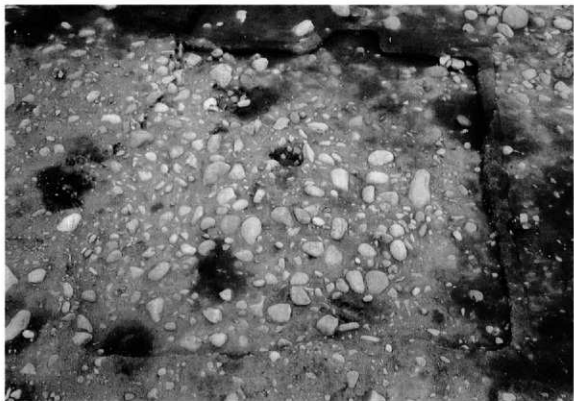
80～82・101～103号住居跡（南東から）



(1) 101・102号住居跡 (南東から)



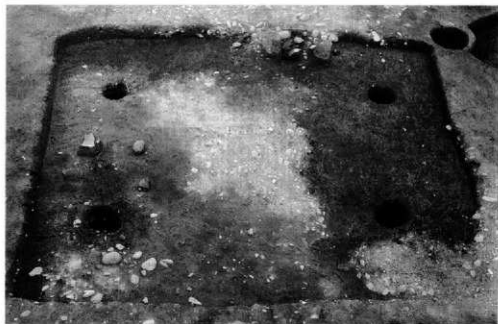
(2) 101号住居跡カマド (南から)



(1) 104号住居跡 (南東から)



(2) 104号住居跡カマド (南東から)



(1) 106号住居跡
(南東から)



(2) 106号住居跡カマド
(南東から)



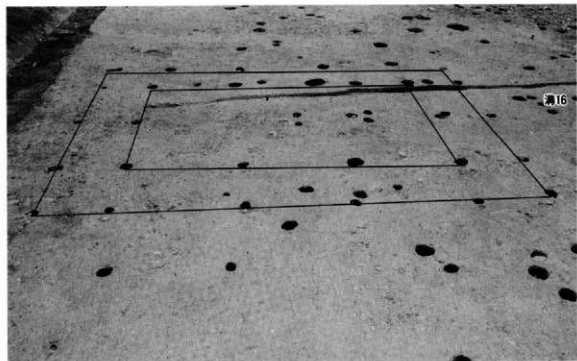
(3) 支脚出土状況 (南東から)



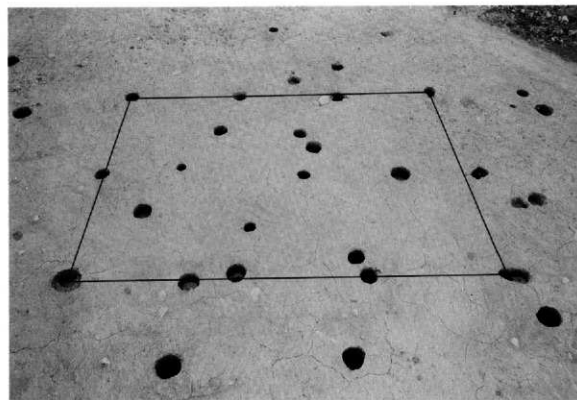
(1) 107号住居跡, 46号土壇 (東から)



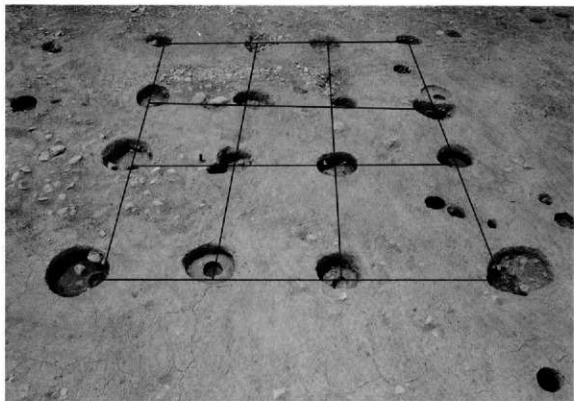
(2) 遺物出土状況 (西から)



(1) 1号建物跡 (北西から)



(2) 2号建物跡 (北西から)



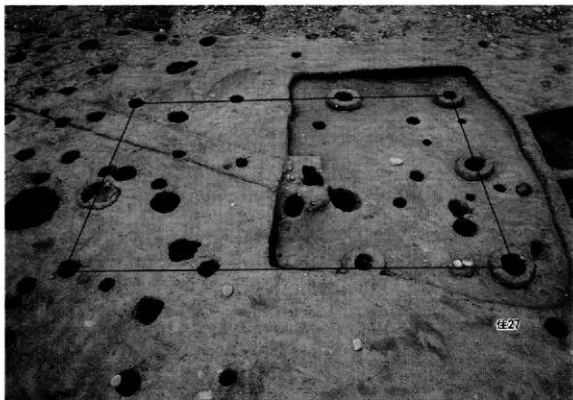
(1) 3号建物跡 (南東から)



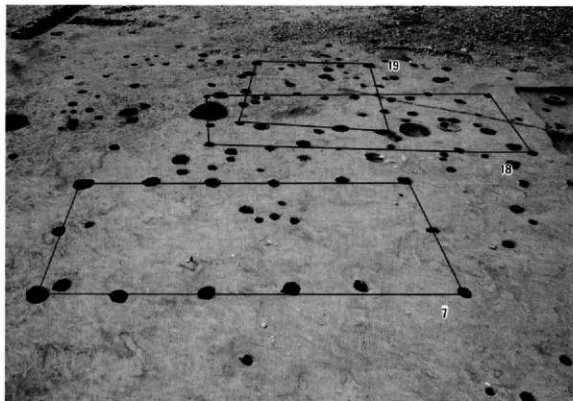
(2) 4号建物跡 (北から)



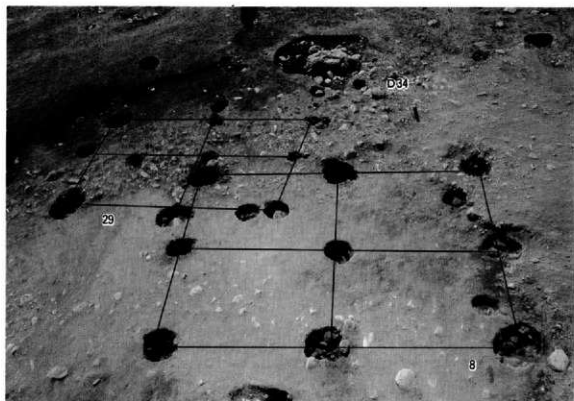
(1) 5号建物跡 (北から)



(2) 6号建物跡, 27号住居跡 (北から)



(1) 7・18・19号建物跡 (北西から)



(2) 8・29号建物跡 (北西から)



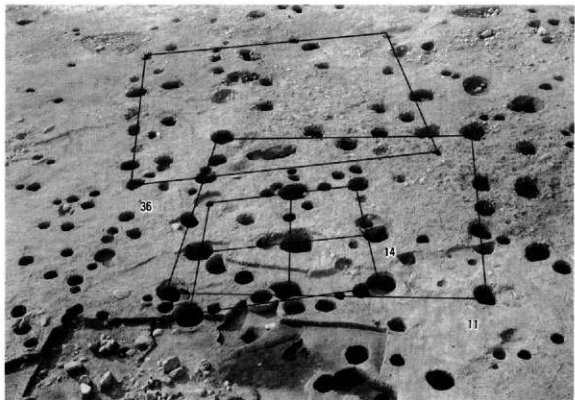
(1) 9号建物跡 (西から)



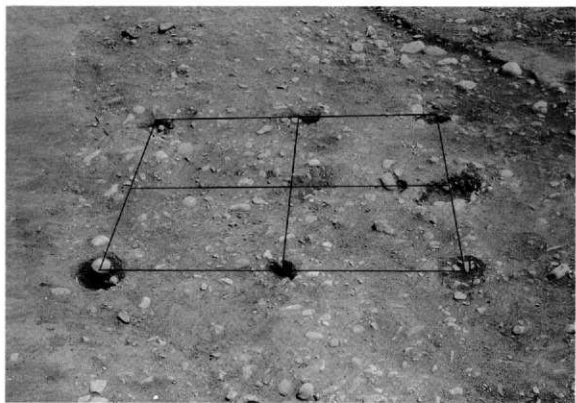
(2) 8・10・29号建物跡 (北西から)



(1) 11・14・15・17・36号建物跡 (南東から)



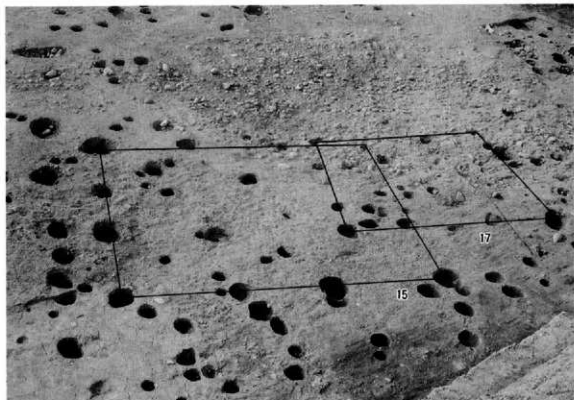
(2) 11・14・36号建物跡 (南東から)



(1) 12号建物跡 (南西から)



(2) 13号建物跡 (北から)



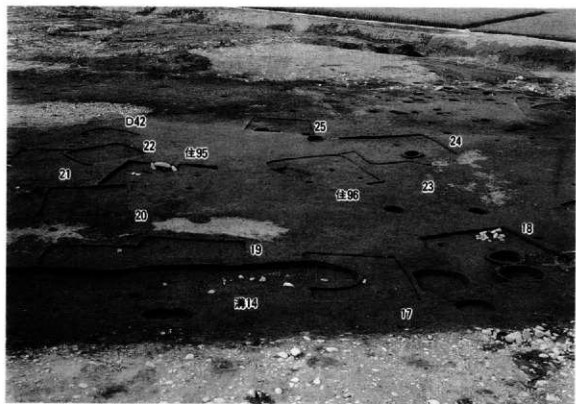
(1) 15・17号建物跡 (南東から)



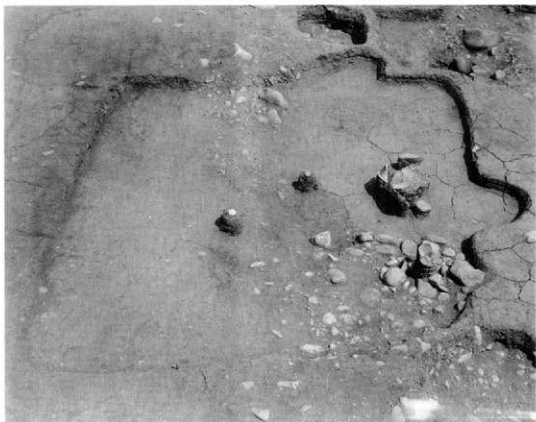
(2) 16号建物跡 (南東から)



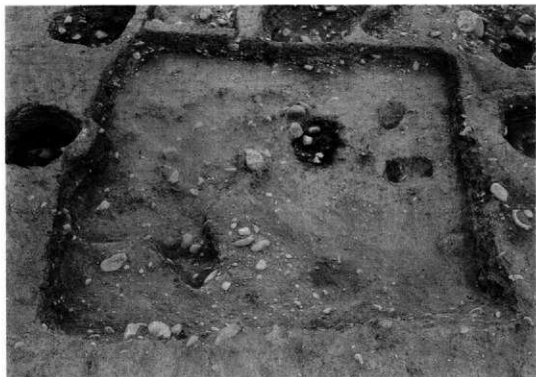
(1) 1～3号竪穴, 4・5号土壘 (南から)



(2) 17～25号竪穴 (南から)



(1) 2号竪穴 (南西から)



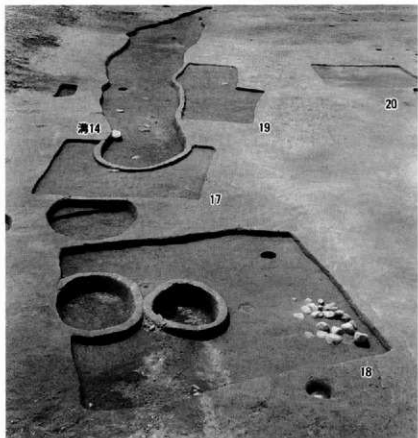
(2) 3号竪穴 (北西から)



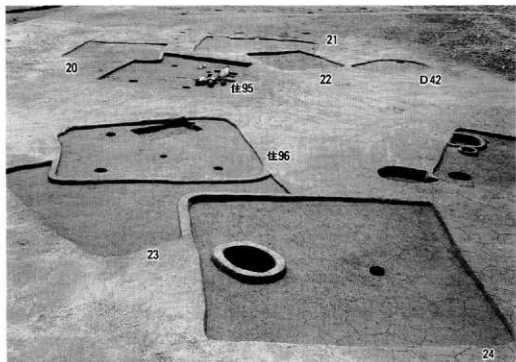
(1) 8号竪穴 (南西から)



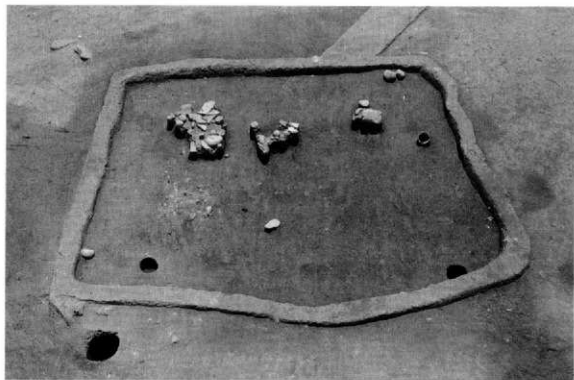
(2) 飯蛸壺出土状況 (南から)



(1) 17-20号竪穴, 14号溝 (北東から)



(2) 20-24号竪穴 (北東から)



(1) 13号竪穴（北東から）



(2) 遺物出土状況（南東から）



(3) 遺物出土状況（北東から）



(1) 14号竪穴 (南から)



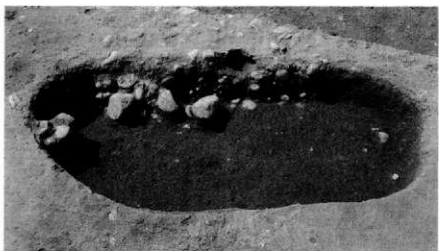
(2) 15号竪穴 (東から)



(1) 1号土壙 (南東から)



(2) 2号土壙 (東から)



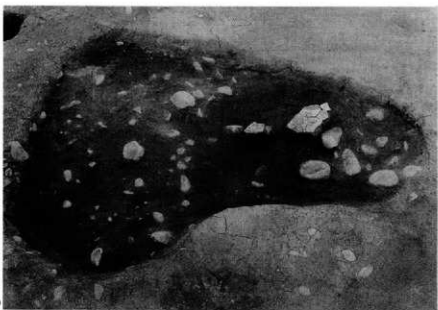
(3) 3号土壙 (東から)



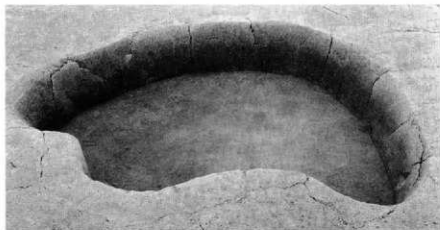
(1) 4号土壙(南東から)



(2) 4号土壙遺物
出土状況(東から)



(3) 7号土壙(北東から)



(1) 8号土壇 (北東から)



(2) 9号土壇 (東から)



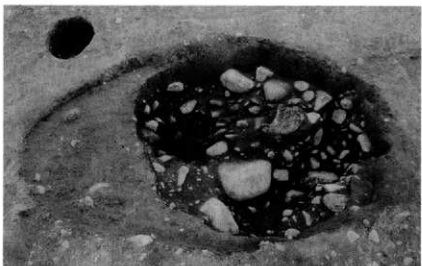
(3) 10号土壇 (南東から)



(1) 12号土壙 (南東から)



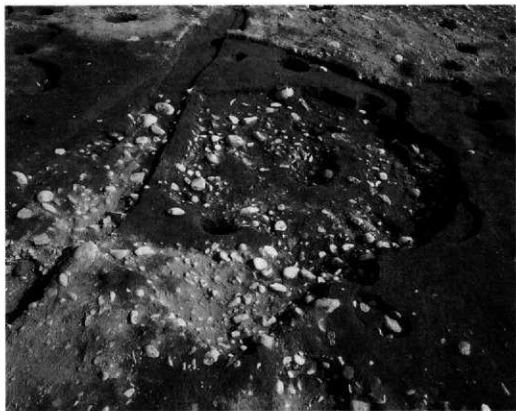
(2) 15号土壙 (南東から)



(3) 16号土壙 (東から)



1



2

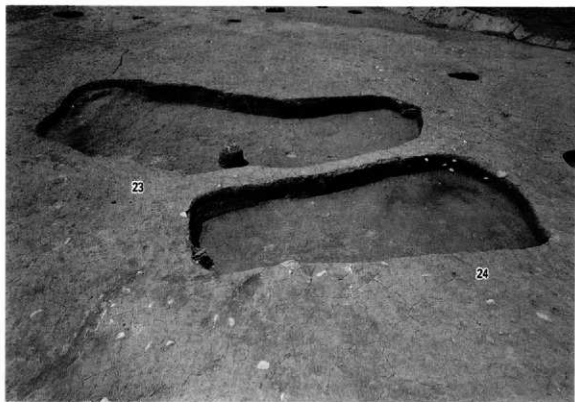


3

- (1) 18号土壙 (北東から)
- (2) 19号土壙 (北から)
- (3) 19号土壙遺物出土状況 (北から)



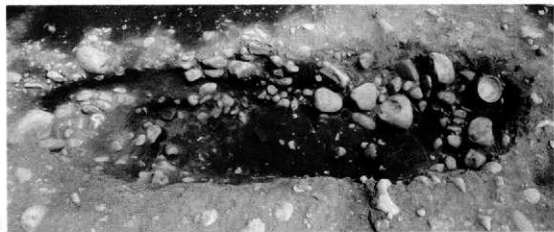
(1) 20号土壙 (北東から) (2) 21号土壙 (西から) (3) 22号土壙 (南東から)



(1) 23・24号土坑 (南から)



(2) 26号土坑 (東から)



1

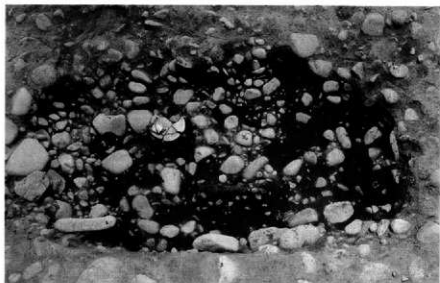


2

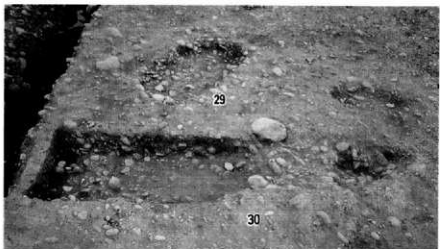


3

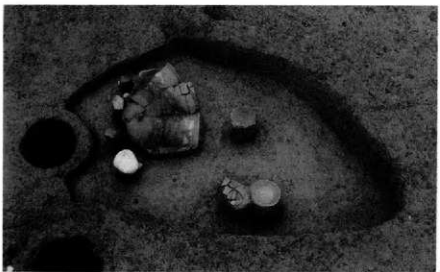
- (1) 27号土壇（北から）
 (2) 28号土壇（南から）
 (3) 28号土壇土層（東から）



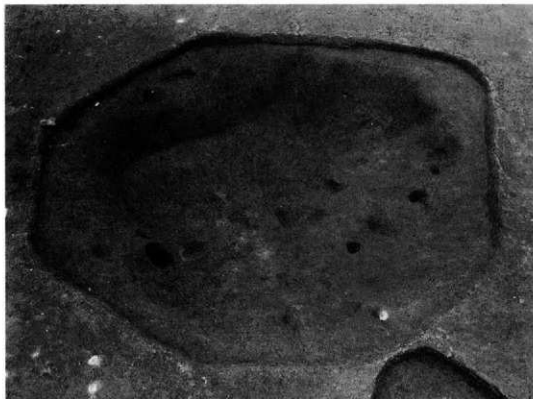
(1) 29号土壙 (北西から)



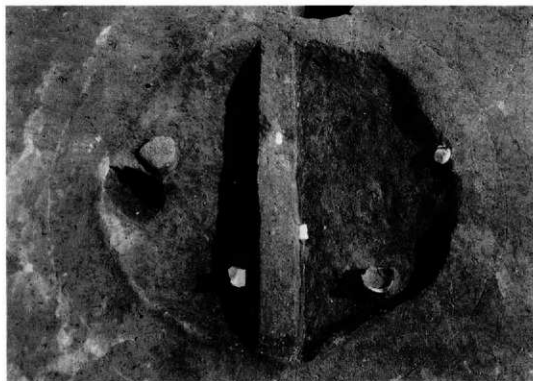
(2) 29・30号土壙 (北から)



(3) 31号土壙 (南西から)



(1) 32号土壙 (北東から)



(2) 33号土壙 (北から)



(1) 34号土壙 (東から)



(2) 35号土壙 (西から)



(1) 36号土壙 (南東から)



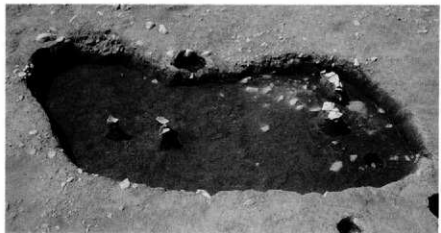
(2) 37号土壙 (北西から)



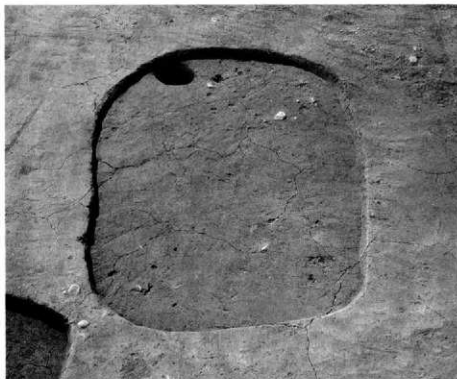
(1) 38号土坑 (西から)



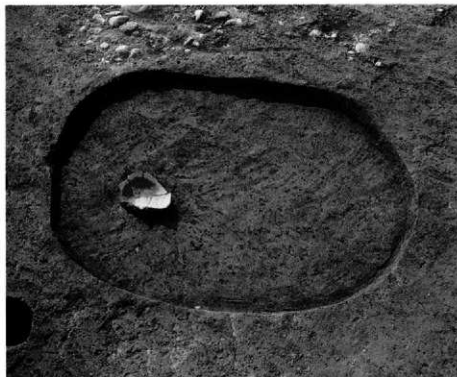
(2) 39号土坑 (北東から)



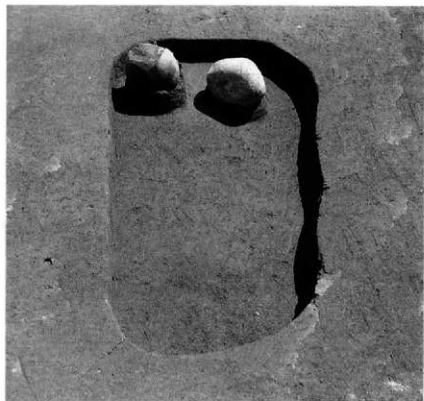
(3) 40号土坑 (南東から)



(1) 42号土坑 (南東から)



(2) 43号土坑 (南東から)



(1) 44号土壙 (西から)



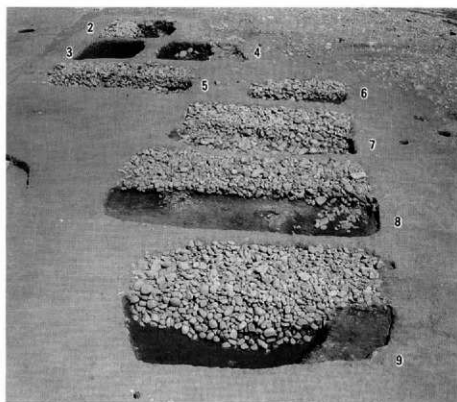
(2) 45号土壙 (北から)



(1) 東群 (2～9号) 集石土塼 (南東から)



(2) 東群 (2～9号) 集石土塼 (南西から)



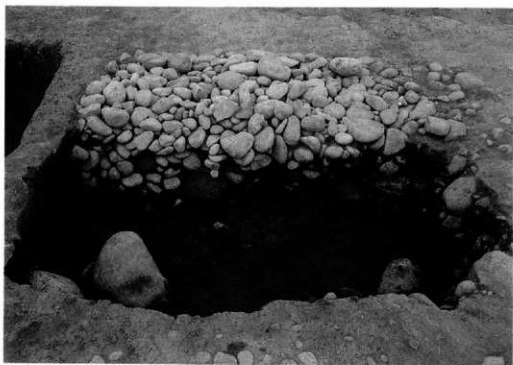
(1) 2～9号集石土壇半裁状況（北西から）



(2) 2～9号集石土壇完掘状況（北西から）



(1) 1号集石土壇 (南から)



(2) 2号集石土壇 (南西から)



(1) 3号集石土壙半截状况(南東から)



(2) 3号集石土壙完掘状况(北西から)



(1) 4号集石土壇 (南東から)



(2) 4号集石土壇完掘状況 (南東から)



(1) 7～9号集石土壇（北西から）



(2) 6～8号集石土壇完掘状況（北西から）



中央群 (10~15号) 集石土溝 (北西から)



(1) 10号集石土壌半掘状況 (南東から)



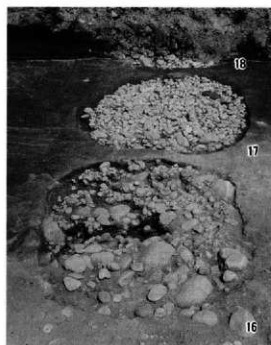
(2) 10号集石土壌完掘状況 (南東から)



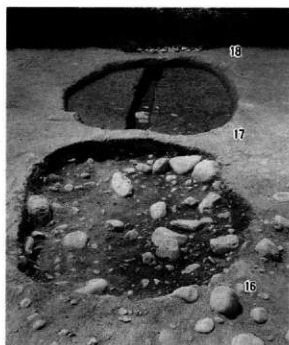
(1) 11号集石土塙半截状況 (北東から)



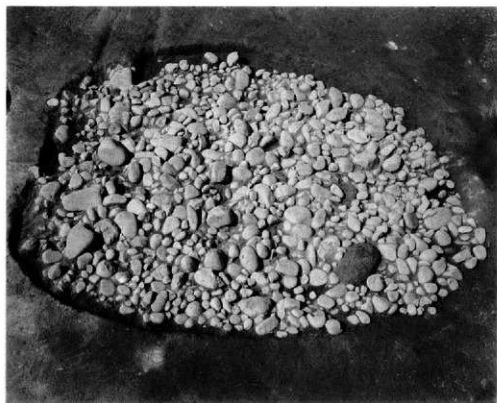
(2) 12・13号集石土塙半截状況 (北東から)



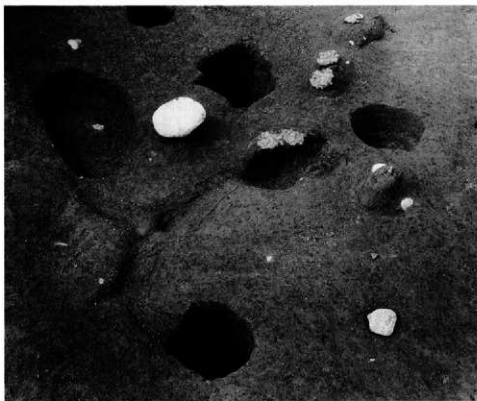
(1) 西群 (16~18号) 集石土壇 (南東から)



(2) 完掘状況 (南東から)



(3) 17号集石土壇 (北東から)



(1) 1号鍛冶炉跡 (南から)



(2) 1号鍛冶炉跡 (西から)

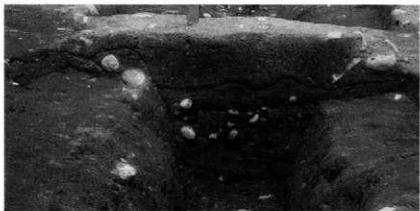


(1) 2号鍛冶炉跡 (南から)

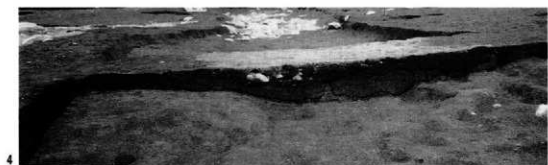


(2) 2号鍛冶炉跡 (南から)

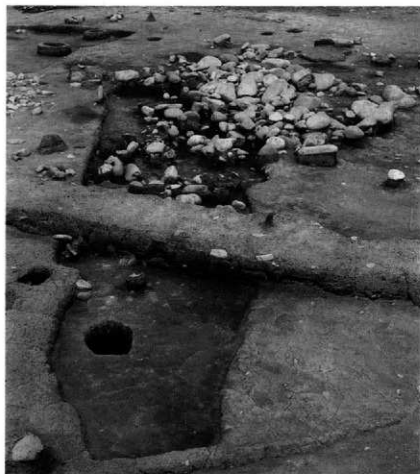
(1) 3号溝土層断面
(南から)



(2) 3号溝遺物出土状況
(南から)



(3) 9号溝土層断面 (西から) (4) 9号溝土層断面 (西から)



(1) 12号溝 (南西から)



(2) 調査区南東壁土層断面 (西から)



(1) 下層谷状遺構 (南西から)



(2) 谷部土層断面 (南東から)



(1) 遺物出土状況（北から）



(2) 長頸壺出土状況（北から）



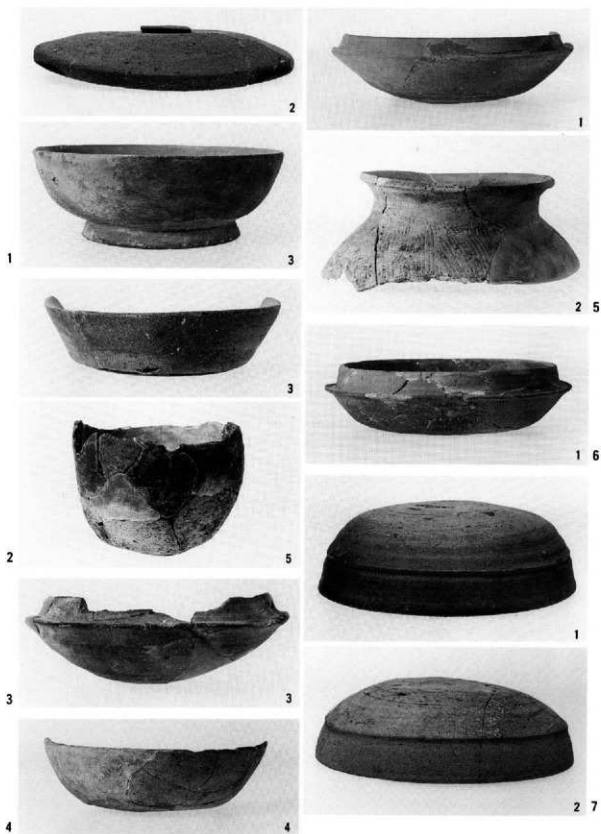
(3) 石斧出土状況（北から）



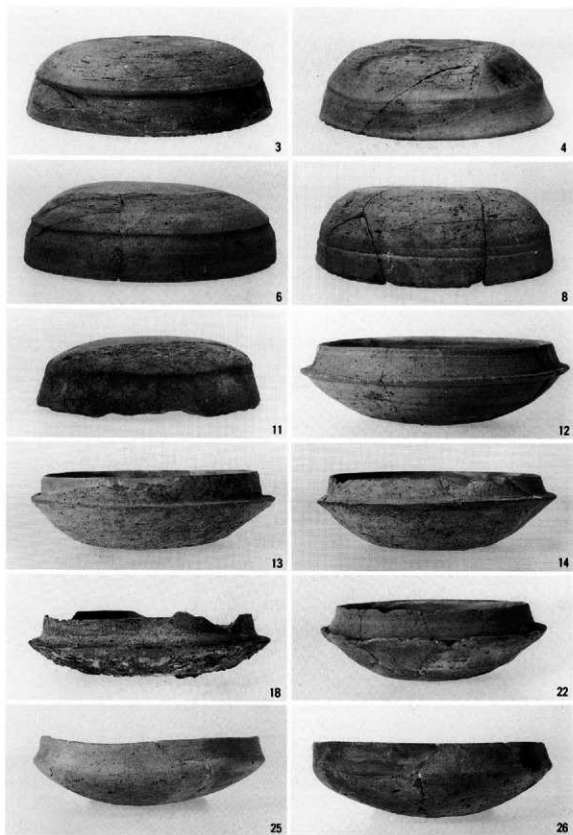
(1) 工事に追われる発掘調査



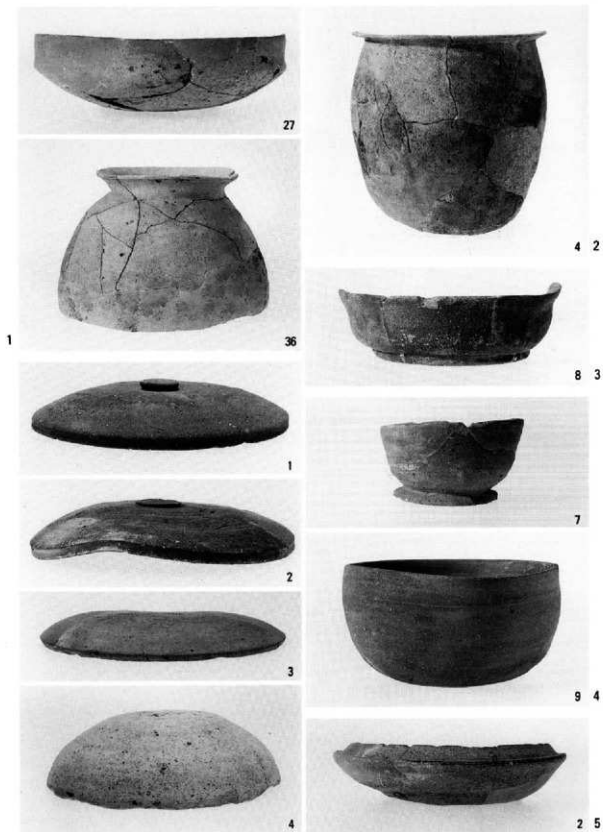
(2) 料金徴収所建設後



(1) 1号住居跡出土土器 (2) 3号住居跡出土土器 (3) 5号住居跡出土土器 (4) 6号住居跡出土土器
 (5) 8号住居跡出土土器 (6) 9号住居跡出土土器 (7) 10号住居跡出土土器①



10号住居跡出土土器②



(1) 10号住居跡出土土器③ (2) 11号住居跡出土土器 (3) 15号住居跡出土土器 (4) 16号住居跡出土土器
(5) 19号住居跡出土土器



1



3



4 1



1



6 3



2



3



6



5



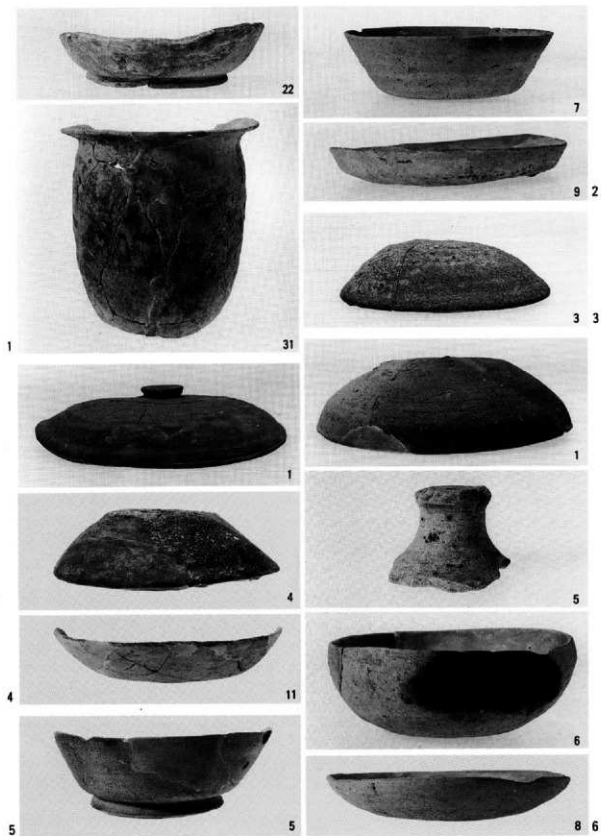
10



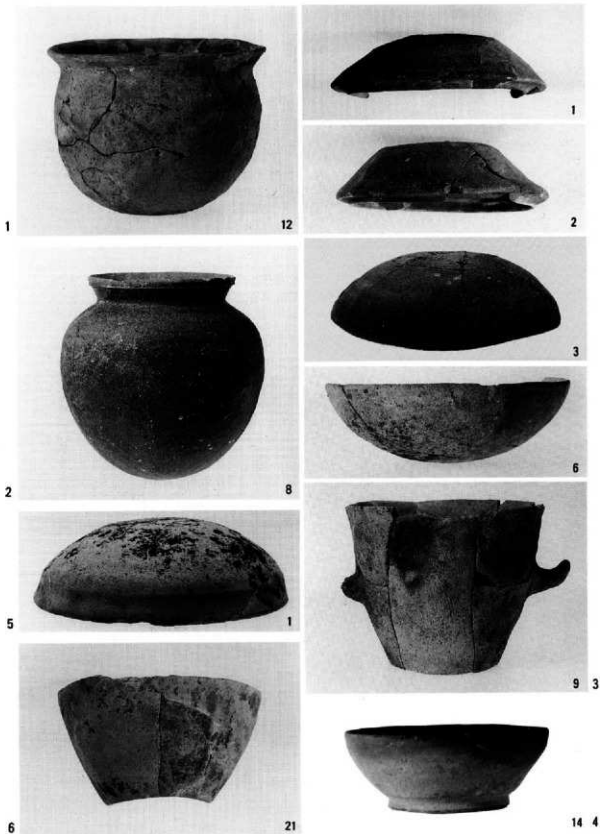
21 4

2

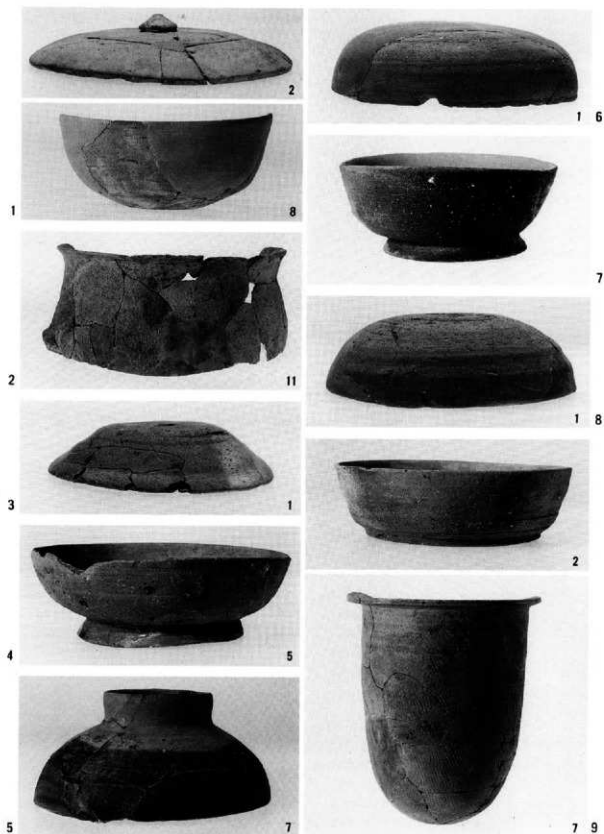
(1) 21号住居跡出土土器 (2) 22号住居跡出土土器 (3) 24号住居跡出土土器 (4) 25号住居跡出土土器①



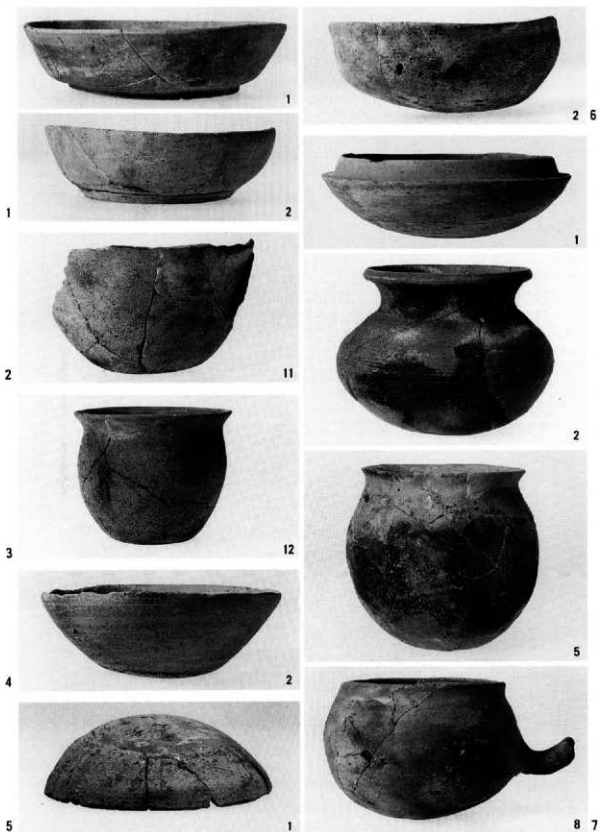
(1) 25号住居跡出土土器② (2) 27号住居跡出土土器 (3) 28号住居跡出土土器 (4) 31号住居跡出土土器
 (5) 32号住居跡出土土器 (6) 34号住居跡出土土器①



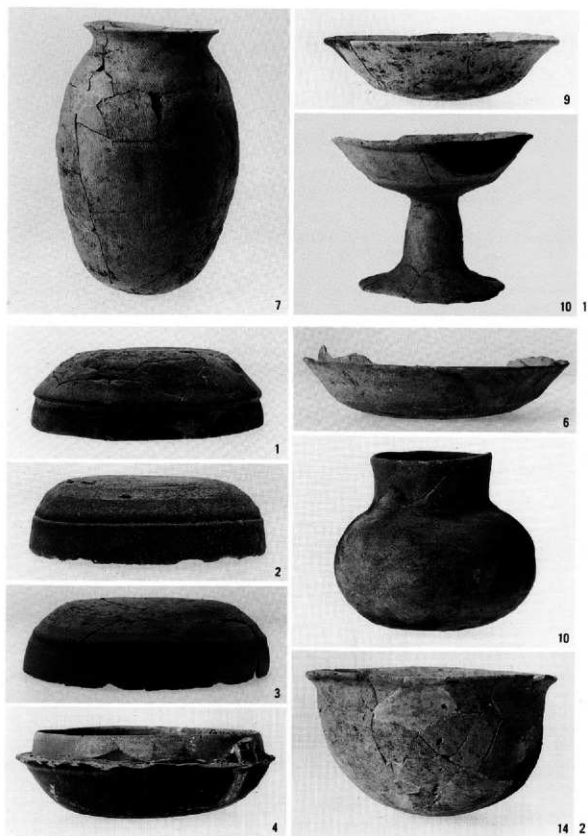
(1) 34号住居跡出土土器② (2) 37・38号住居跡上面出土土器 (3) 39号住居跡出土土器
 (4) 40号住居跡出土土器 (5) 44号住居跡出土土器 (6) 51号住居跡出土土器



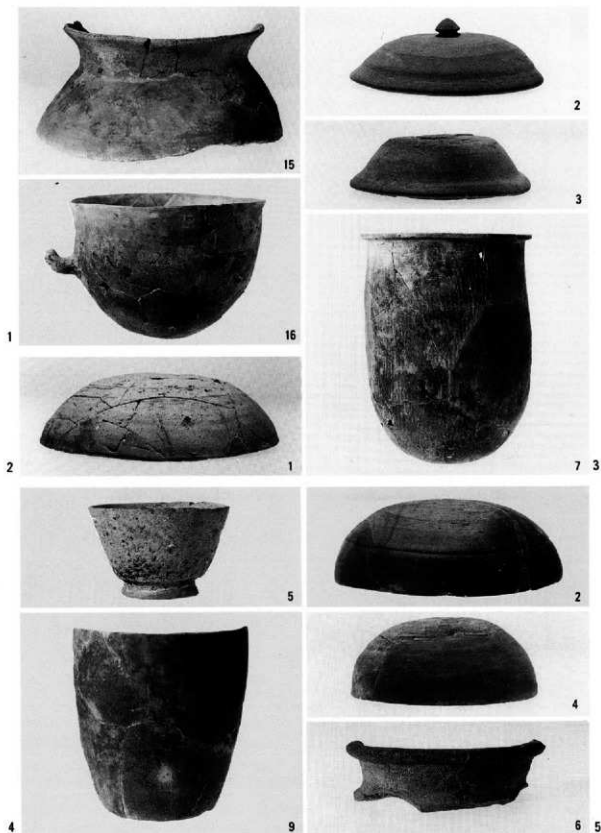
(1) 53号住居跡出土土器 (2) 54号住居跡出土土器 (3) 55号住居跡出土土器 (4) 61号住居跡出土土器
 (5) 63号住居跡出土土器 (6) 67号住居跡出土土器 (7) 74号住居跡出土土器 (8) 76号住居跡出土土器
 (9) 81号住居跡出土土器



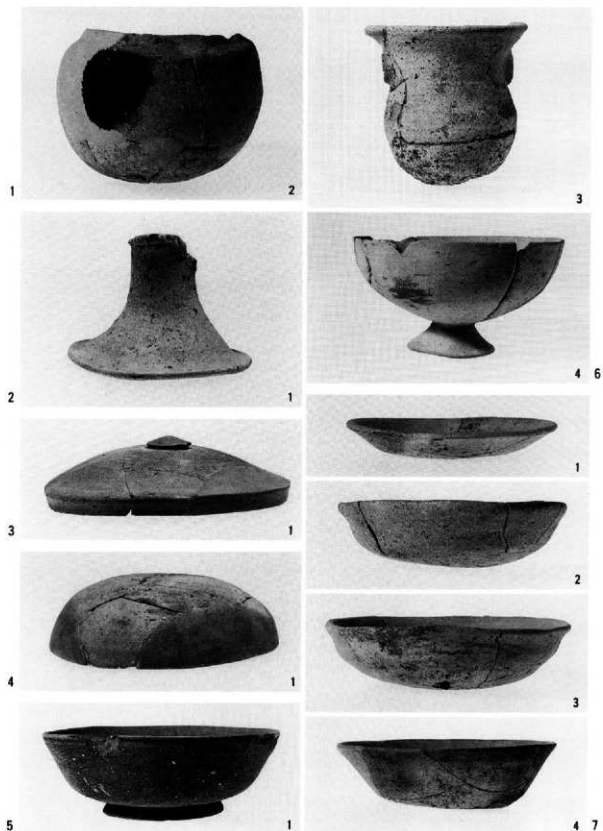
(1) 83号住居跡出土土器 (2) 84号住居跡出土土器 (3) 85号住居跡出土土器 (4) 90号住居跡出土土器
 (5) 92号住居跡出土土器 (6) 94号住居跡出土土器 (7) 95号住居跡出土土器①



(1) 95号住居跡出土土器② (2) 99号住居跡出土土器①



(1) 99号住居跡出土土器② (2) 100号住居跡出土土器 (3) 104号住居跡出土土器
 (4) 106号住居跡出土土器 (5) 107号住居跡出土土器



(1) 2号竖穴出土土器 (2) 4号竖穴出土土器 (3) 5号竖穴出土土器 (4) 9号竖穴出土土器
 (5) 10号竖穴出土土器 (6) 13号竖穴出土土器 (7) 1号土坑出土土器①



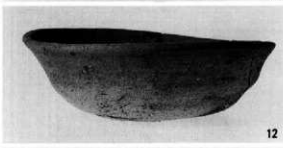
5



11



6



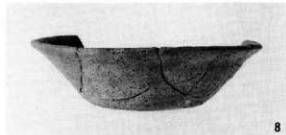
12



7



13



8



14



9



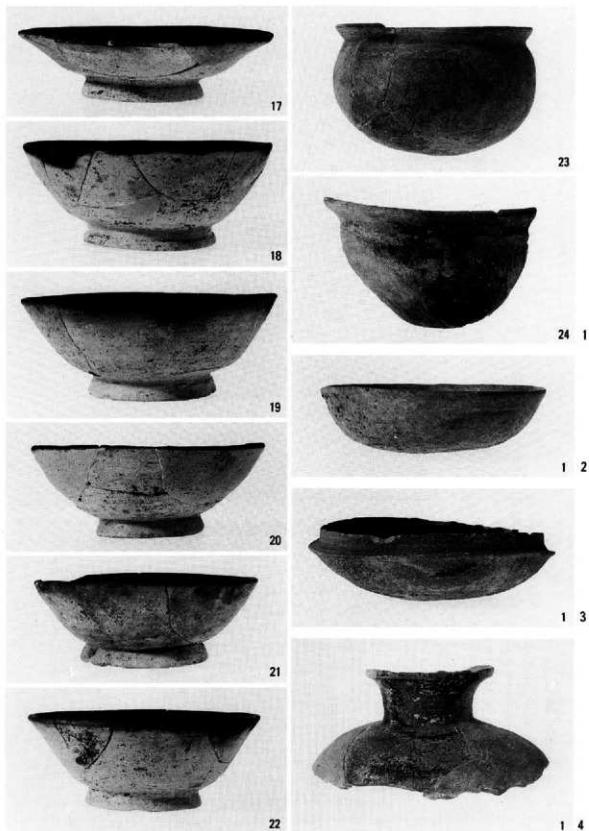
15



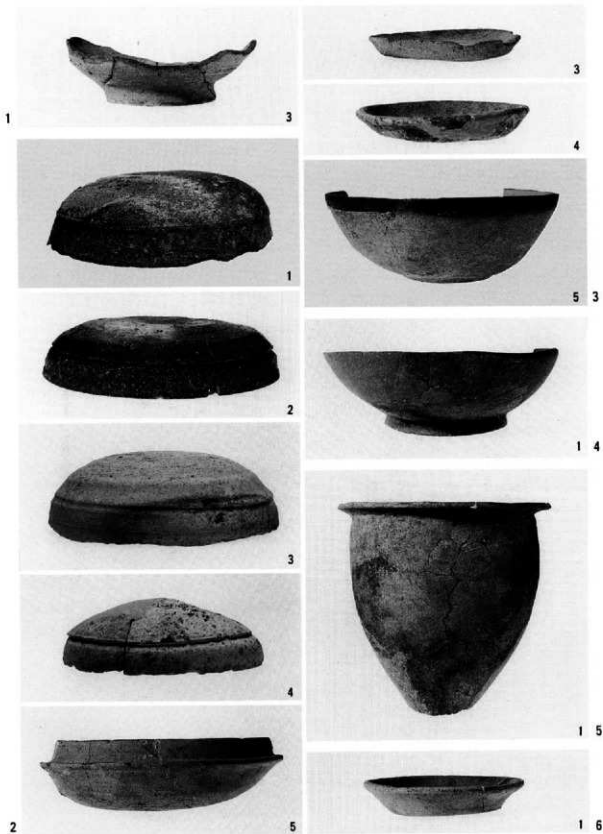
10



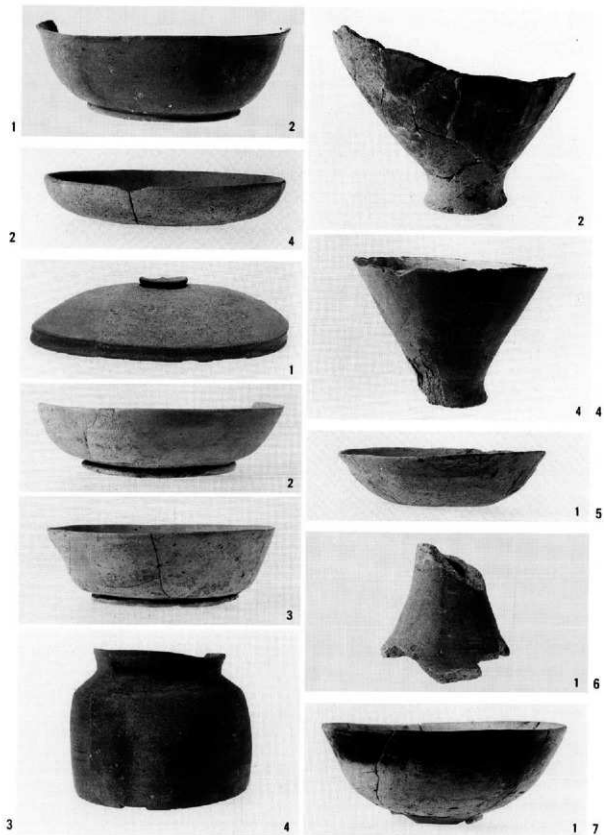
16



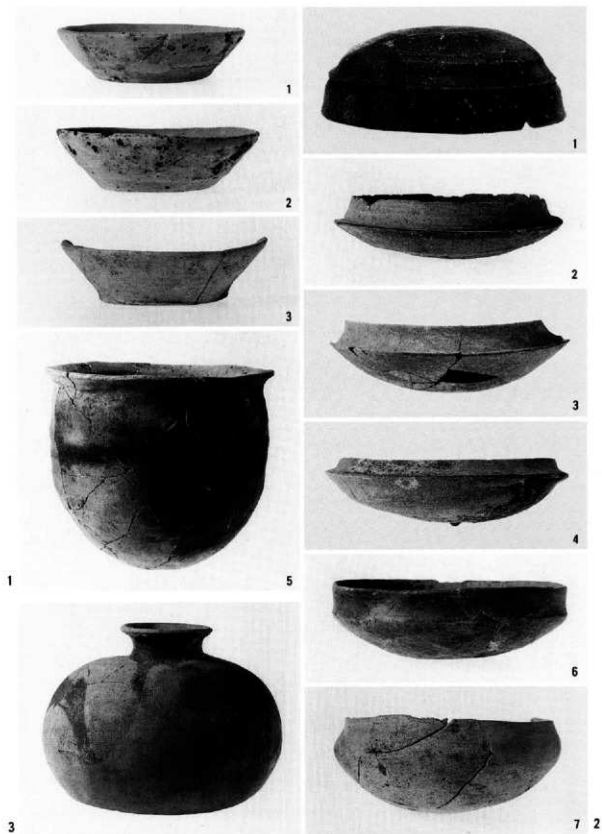
(1) 1号土坑出土土器③ (2) 2号土坑出土土器 (3) 4号土坑出土土器 (4) 9号土坑出土土器①



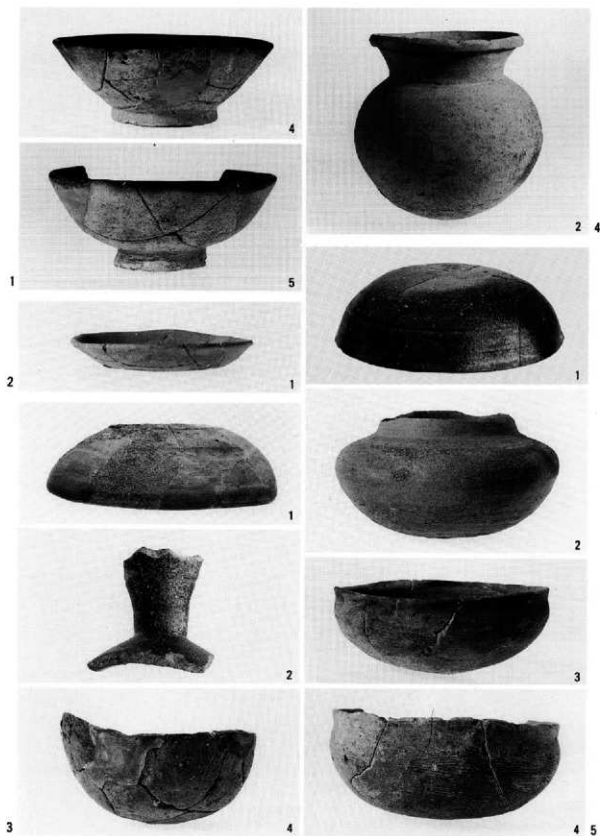
(1) 9号土城出土土器② (2) 10号土城出土土器 (3) 12号土城出土土器 (4) 15号土城出土土器
 (5) 19号土城出土土器 (6) 20号土城出土土器



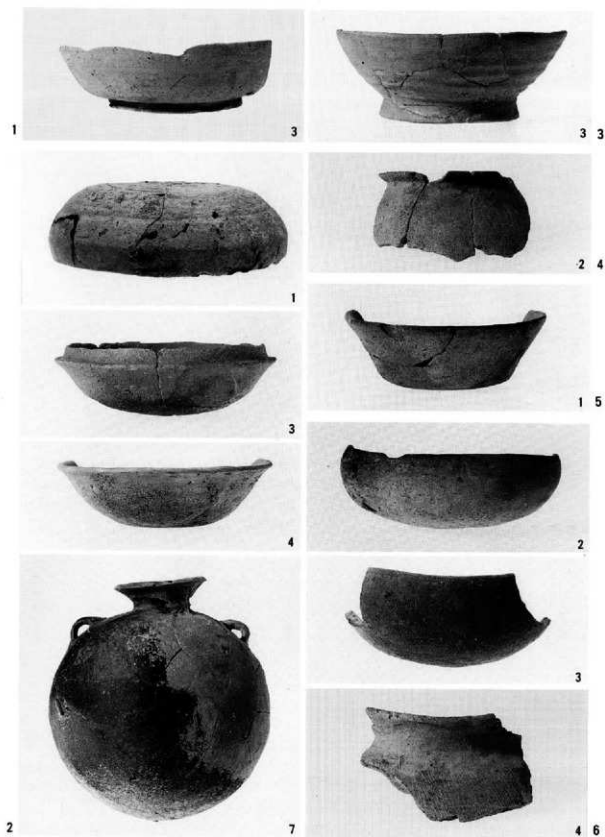
(1) 22号土壙出土土器 (2) 23号土壙出土土器 (3) 25号土壙出土土器 (4) 26号土壙出土土器
(5) 27号土壙出土土器 (6) 28号土壙出土土器 (7) 29号土壙出土土器



(1) 31号土壙出土土器 (2) 35号土壙出土土器 (3) 36号土壙出土土器



(1) 37号土城出土土器 (2) 38号土城出土土器 (3) 40号土城出土土器 (4) 44号土城出土土器
(5) 45号土城出土土器



(1) 5号集石土城出土土器 (2) 3号溝出土土器 (3) 8号溝出土土器 (4) 9号溝出土土器
 (5) 11号溝出土土器 (6) 14号溝出土土器





13



15



21



19



22



23



24



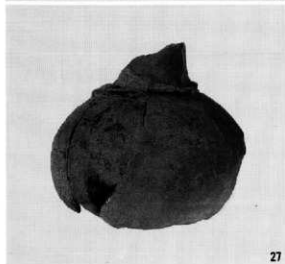
28



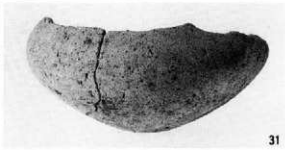
25



30



27



31



32



38



45



46



39



42



40



47



48



49





63



67



64



68



65



69



66



71





95



100



99



103



102



105





114



115



116



117



122



129



132



133



134



136



137



140



141



144



145



154



146



155



148



156



149



157



158



161



162



164



160



165



163



166



167



168



169



170



172



174



175



173



176



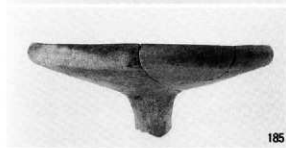
178



183



184



185



187



186



188



189



190



191



193



194



195



196



197



198



200



201



202



203



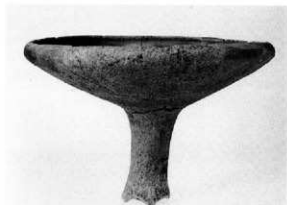
204



205



206



207



209



208



212



213



215



216



218



217



220



221



223



222



225



226



227



228



230



233



234



235



236



237



238



239



240



241



242



244



245



246



247



248



249



250



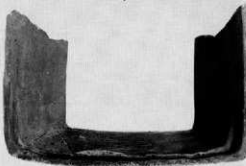
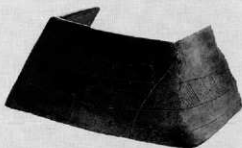
258



259



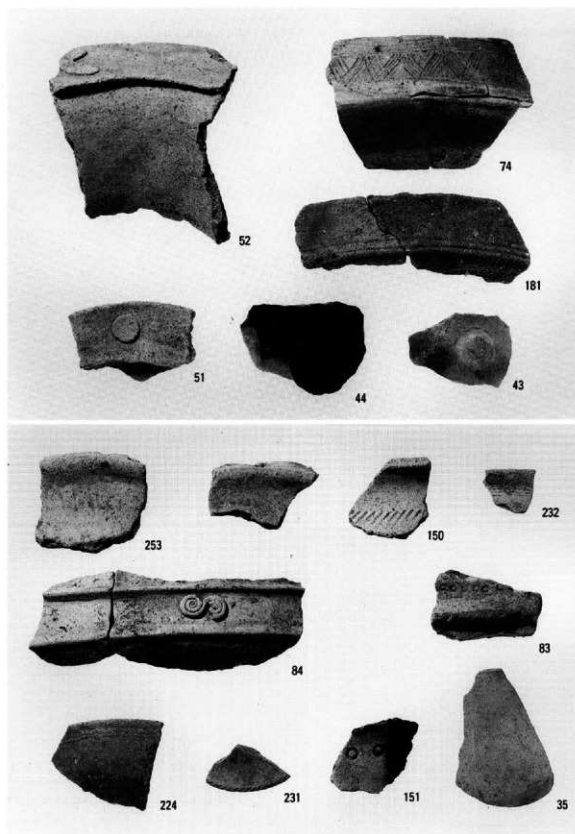
252



260



255





2



35 2



3



P1338-1



4



P1404



5



P905



1



P987

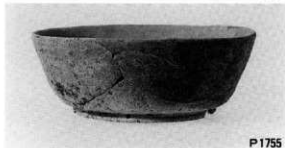
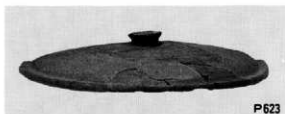


P259



P1388-2 3

(1) 北端谷部他出土土器 (2) 田河道出土土器 (3) ビット出土土器①





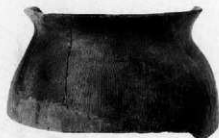
P759



P1480



P1158



P157



P1468



P457



P429



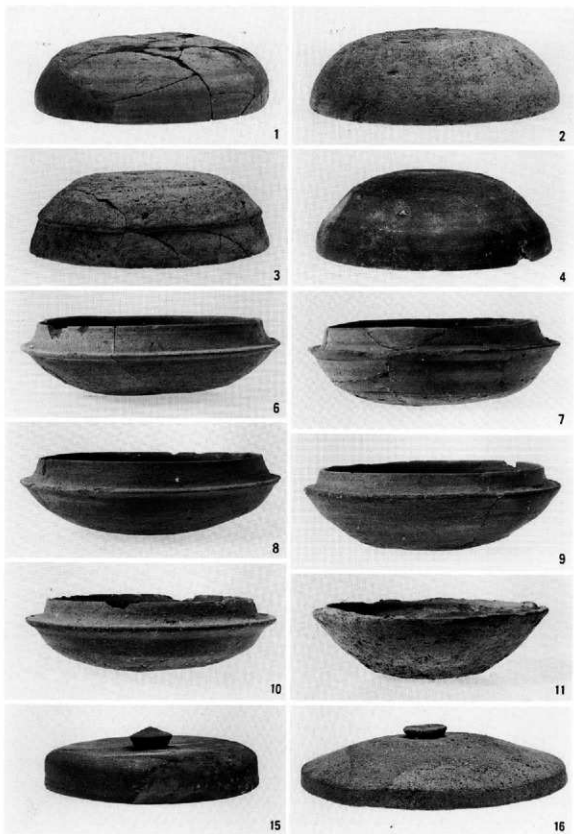
P1138



P408



P1791



遺構検出面出土土器①



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



30



32



33



35



36



37



38



39



40



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51

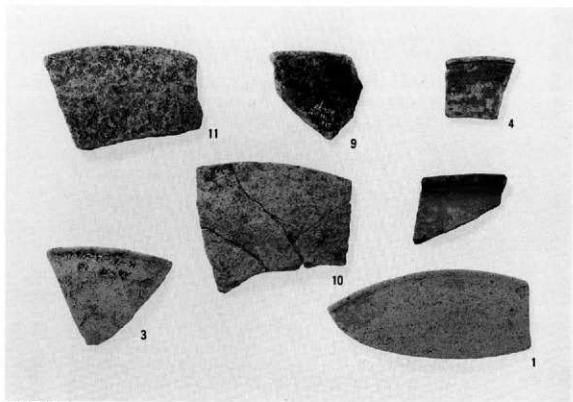


52

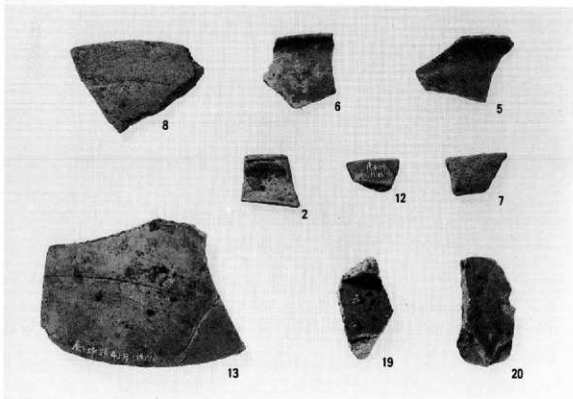


53

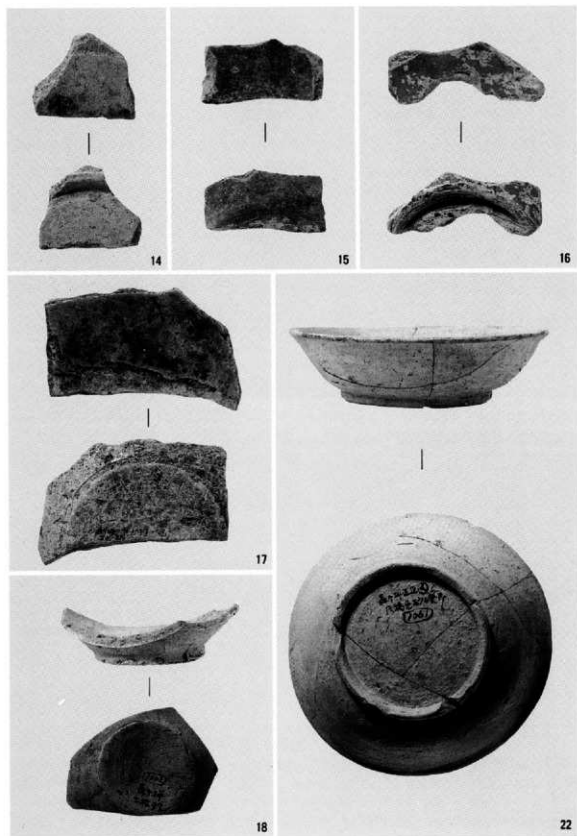


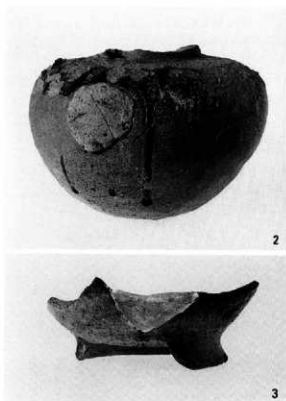


緑釉陶器①

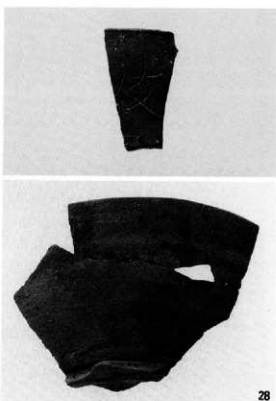


緑釉陶器②

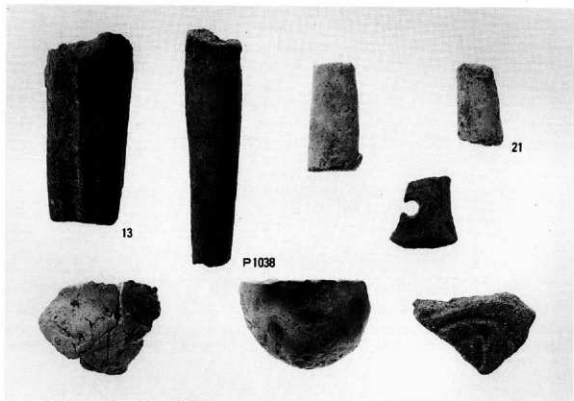




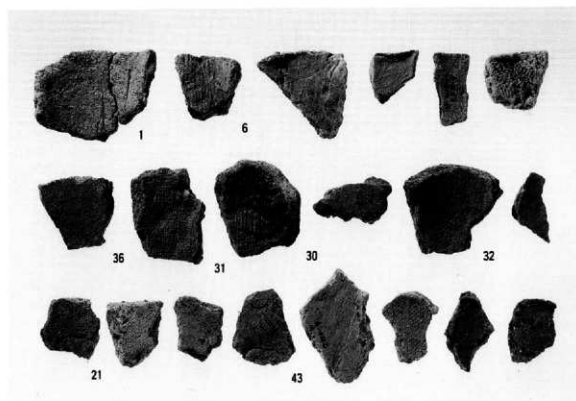
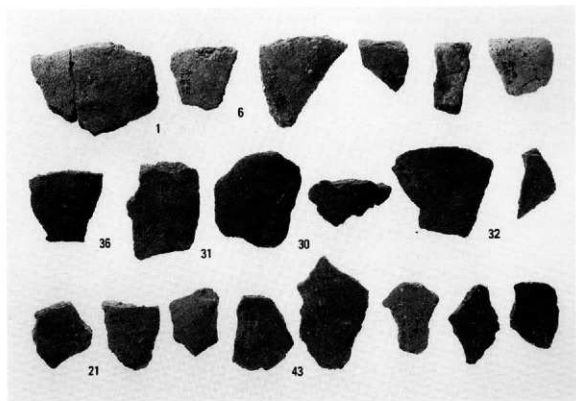
(1) 灰釉陶器



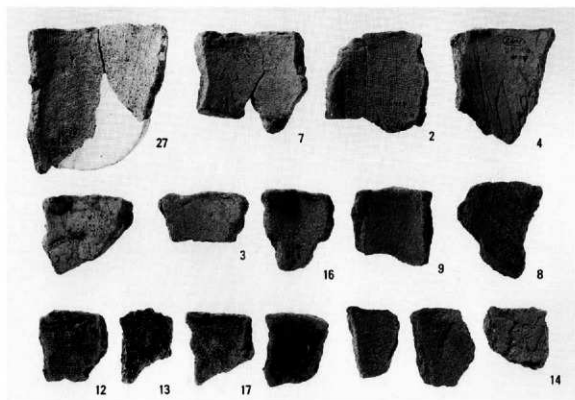
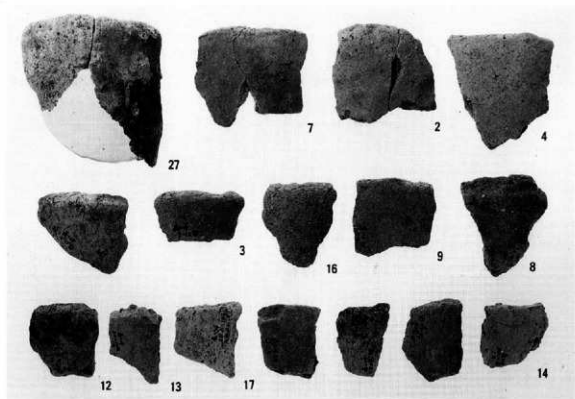
(2) 文字資料土器



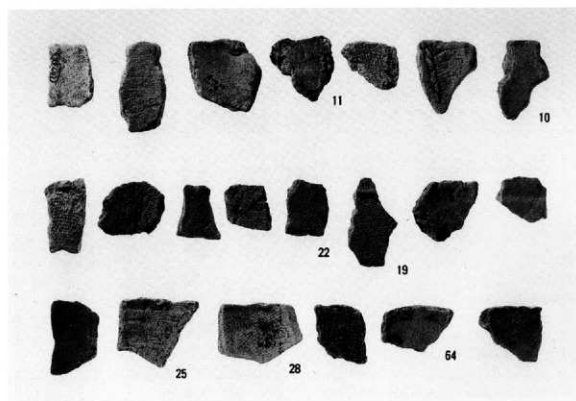
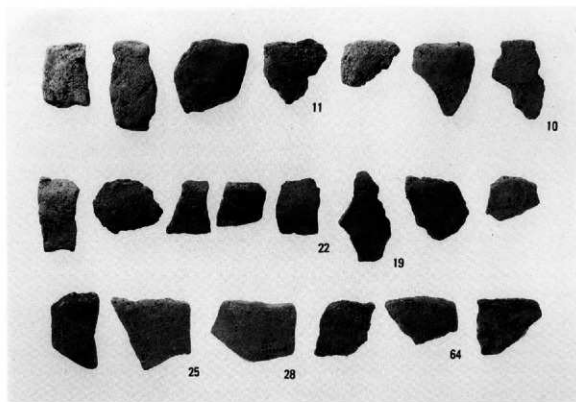
(3) 縄文土器・フイゴ羽口・土製品他



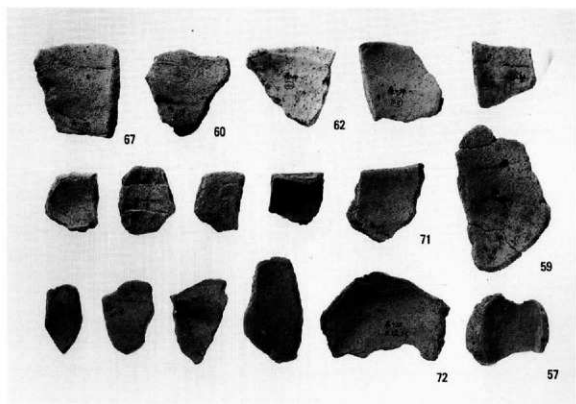
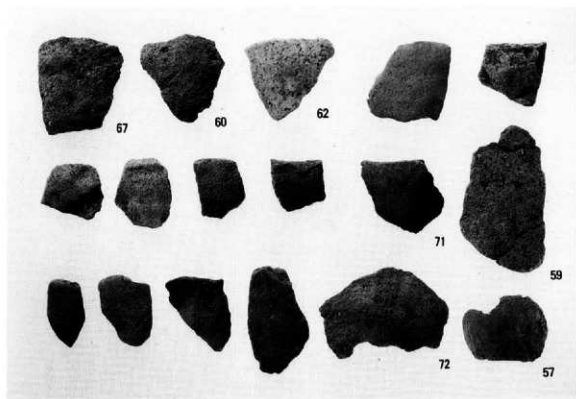
烧埴土器① (上—外面, 下—内面)



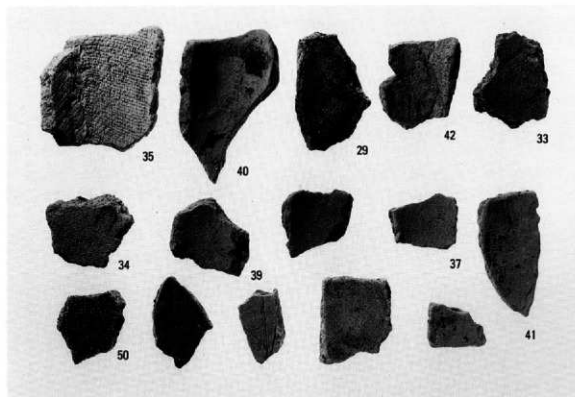
椀埴土器② (上-外面, 下-内面)



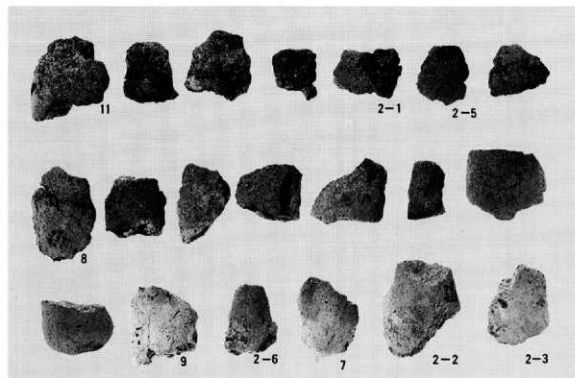
烧埴土器③ (上-外面, 下-内面)



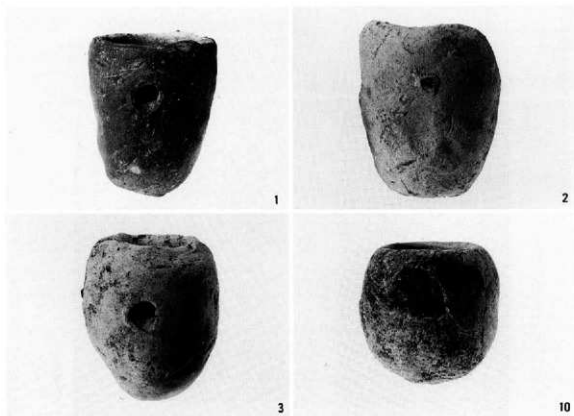
烧埴土器④ (上—外面, 下—内面)



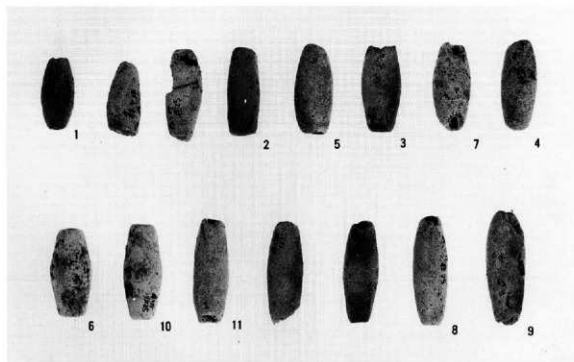
(1) 焼塩土器⑤



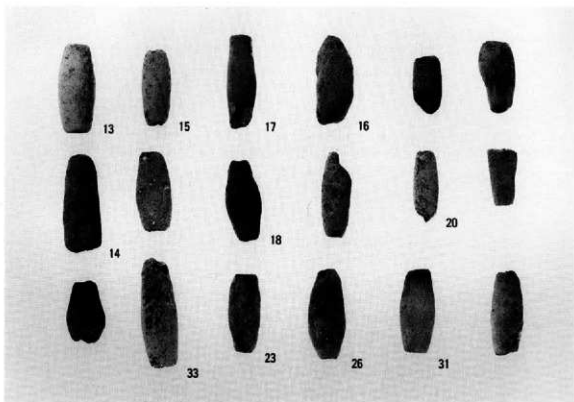
(2) 包含層・2号鍛冶跡出土フイゴ羽口



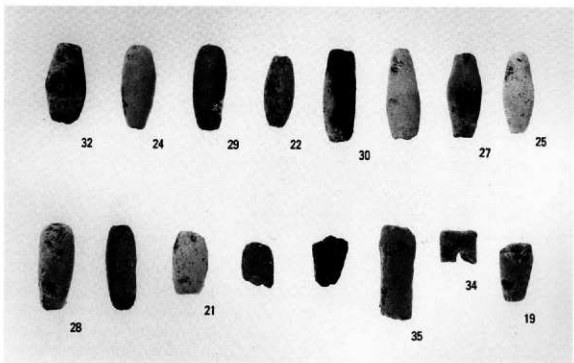
(1) 住居跡・竪穴・包含層出土版納壺



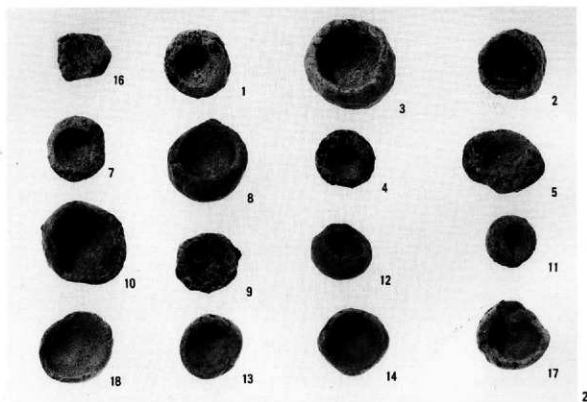
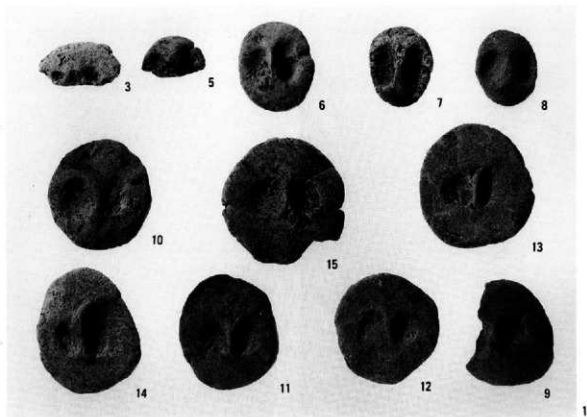
(2) 住居跡出土土鐘



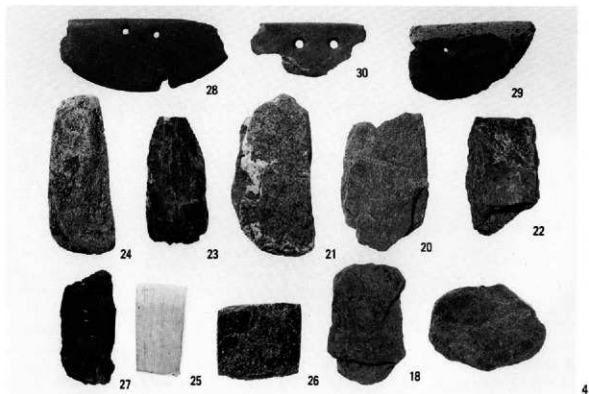
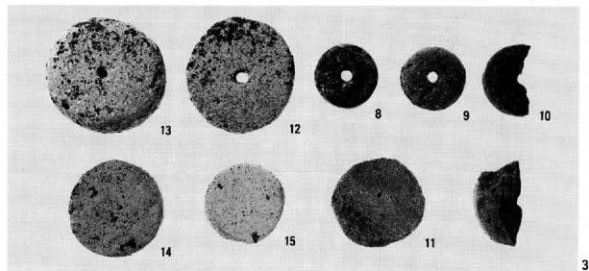
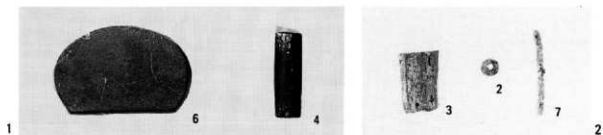
(1) 住居跡・土壇・溝・包含層出土土錘



(2) ビット・包含層出土土錘



(1) 住居跡・土壇出土模造鏡 (2) 住居跡・竪穴・溝他出土ミニチュア土器

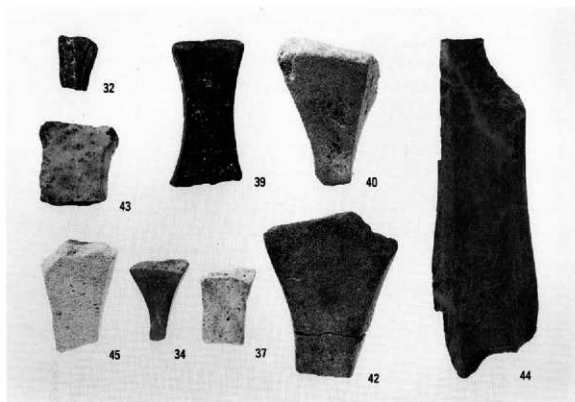


(1) 赤幡森ヶ坪遺跡出土石帯・管玉

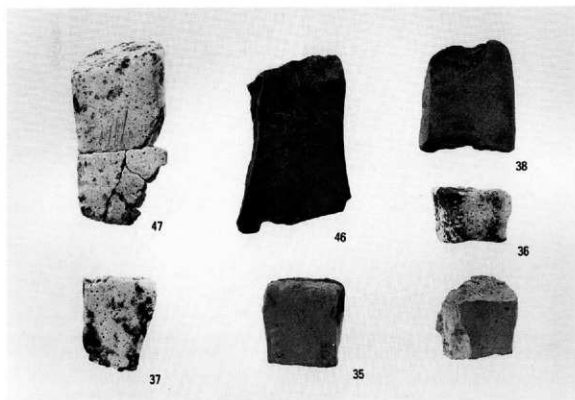
(2) 赤幡森ヶ坪遺跡出土石製品・銅製品

(3) 住居跡・竪穴・包含層出土紡錘車・石製円盤

(4) 住居跡・土壇・谷部・包含層出土石斧・石庵丁



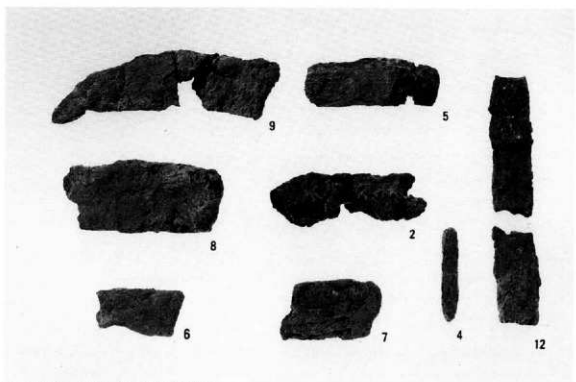
(1) 住居跡・土壙・谷部・包含層出土磁石①



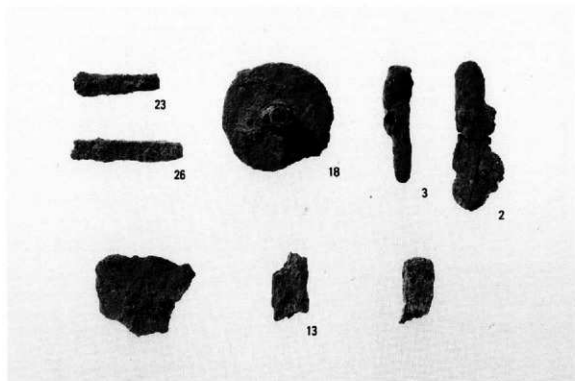
(2) 住居跡・土壙・谷部・包含層出土磁石②



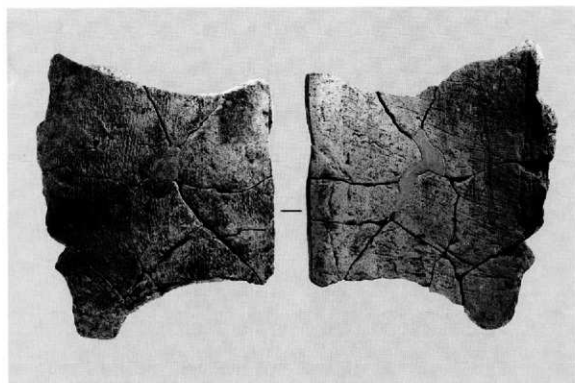
(1) 住居跡・土墳・包含層出土鉄器①



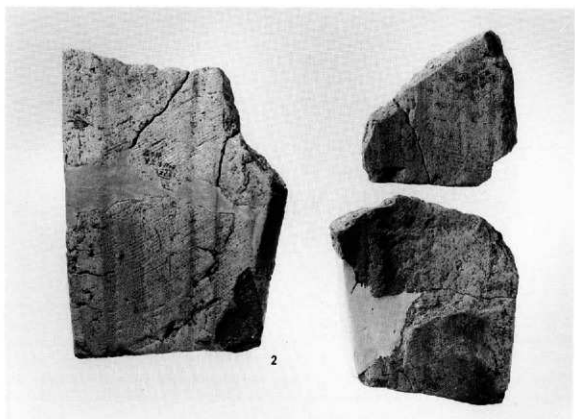
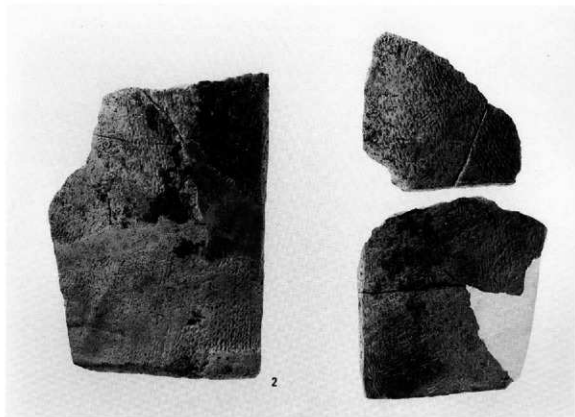
(2) 住居跡・土墳・包含層出土鉄器②



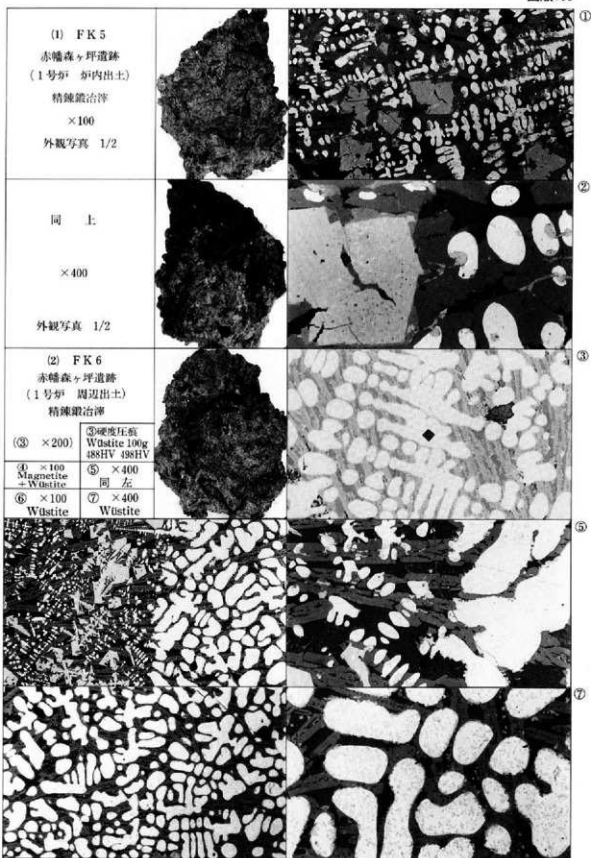
(1) 住居跡・土塚・包含層出土鉄器③



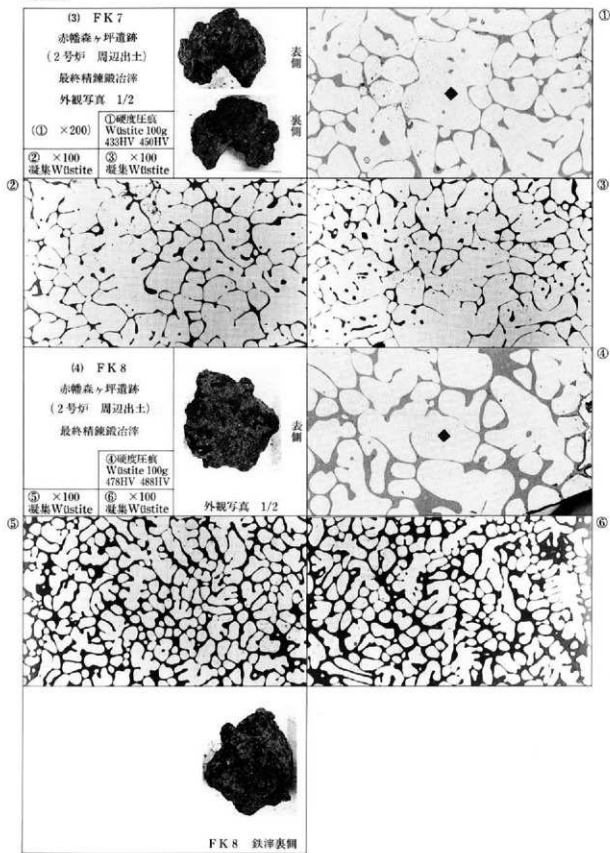
(2) 壑穴出土瓦



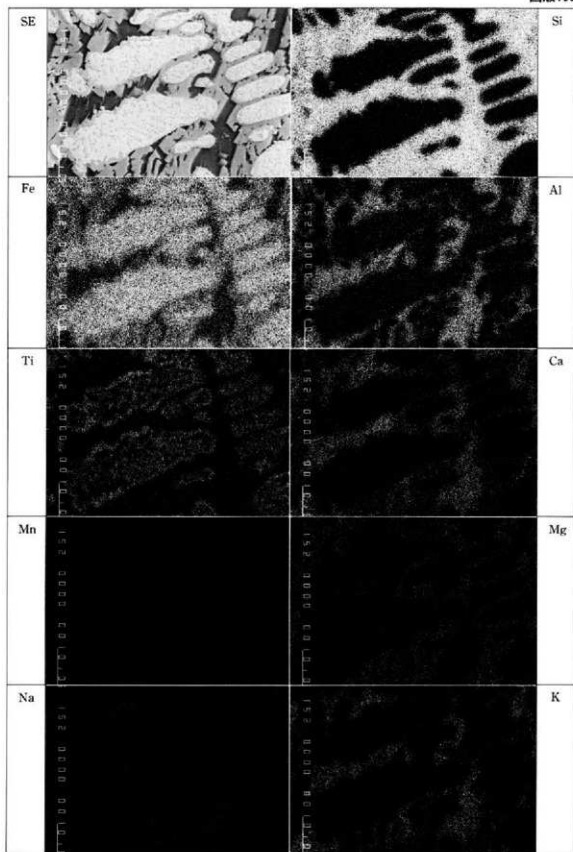
整穴・包含層出土瓦



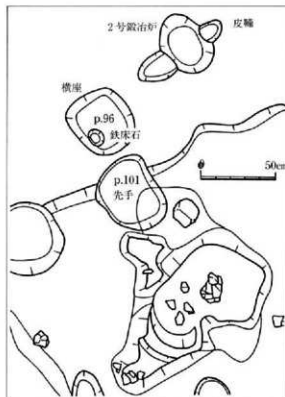
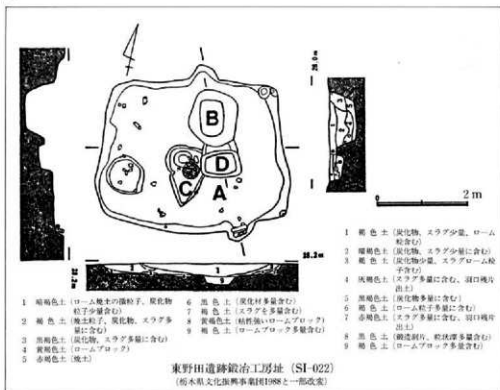
精錬鐵治萍の顯微鏡組織



鍛錬鍛冶滓の顕微鏡組織



赤幡森ヶ坪遺跡出土精錬鍛冶滓（FK6）の特性X線像



職人尽絵「鍛冶師」(喜多院)

奈良尾遺跡鍛冶工房空間利用

鍛冶空間利用の各例

権田バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 8 卷 中 巻

平成 4 年 3 月 31 日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会

福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印 刷 赤 坂 印 刷 株 式 会 社

福岡市中央区大手門 1 - 8

福岡県行政資料

分類番号	所属コード
J H	2 1 3 3 0 5 1
登録年度	登録番号
H 3	12